

墳 墳 跡 跡
号 号
3 号
遺 遺
池
17
ち 田 角
山 ば 津 水
り
緑 す 山 清

1984年3月

総社市教育委員会



緑山17号墳出土大刀 銀象嵌文様

序

総社市は吉備文化発祥の地といわれ、市内には多数の埋蔵文化財の存在が知られています。これらは貴重な歴史的資料であり、これを保護保存して次の時代に伝えることは、現代に生きる私たちに与えられた責務であります。しかし、時代の要請ではありますが、地域開発の増大に伴い、全国的にも遺跡の多く存在する本市にとっては、開発と文化財保護との調和が大きな課題となっています。

今回初めて発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。ここに収録している4遺跡は、いずれも市の公共事業に伴い、やむなく記録保存のための発掘調査を実施したものであります。発掘調査の結果、緑山17号墳では全国的にも稀な銀象嵌の文様が施された大刀が出土するなど、あらためて古代における本市の重要な位置づけを認識いたしました。

調査にあたりましては、岡山県教育委員会をはじめ関係各位から多大な御指導と御協力をいただきました。厚く御礼申しあげる次第であります。

ここに報告書を刊行する運びになりましたものの、短期間で整理作業にあたり、また本市教育委員会としては初めての刊行でもあるため、不十分な点多多あると思いますが、小報が今後の文化財の保護保存に活用され、また考古学の研究資料として役立てば幸いであります。

昭和59年3月

総社市教育委員会

教育長 浅 沼 力

例 言

1. この報告書は、総社市教育委員会が実施した発掘調査の概要である。
2. 各調査の担当は、以下のとおりであり、文化係職員谷山雅彦の協力を得た。
緑山17号墳 村上幸雄 すりばち池3号墳 高田明人
山津田遺跡 高田明人 清水角遺跡 村上幸雄
3. この報告書の作成は、昭和57年9月以降発掘調査と併行しながら、社会教育課服部収蔵庫にて整理作業を実施し、各担当者が執筆した。全体編集は、村上が行った。
4. 遺物の整理、実測及び実測図・遺構図の浄写は、担当者が行い、谷山雅彦の助力を受けた。
5. この報告書の高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
6. 第2図の地形図は、国土地理院発行の25,000分の1の地図（総社東部、総社西部、倉敷、箭田）を合成し複製したものである。その他の地形図は、総社市発行のものを複製またはトレースしたものである。
7. この報告書では、図面に溝→D、住居址→H、土壌→Pの略号を使用し、遺物については、各遺跡ごとに通し番号を付した。
8. 緑山17号墳出土大刀は、(財)元興寺文化財研究所に化学処理及び象嵌文様抽出を委託した。
9. 緑山17号墳から出土した大刀及び鉄滓の金属学的調査は、(株)新日本製鉄大澤正己氏に依頼し、御教示を得るとともに玉稿をいただいた。その内容は緑山17号墳の調査報告に掲載した。
10. この報告書に関係する遺物、実測図、写真等は、服部収蔵庫で保管している。

目 次

序 文

例 言

1. はじめに	1
2. 調査の体制	4
第1章 緑山17号墳	7
1. 調査にいたる経緯	9
2. 歴史的地理的環境	9
3. 調査の概要	11
4. まとめにかえて	30
付載 緑山17号墳出土鉄滓及び鉄装大刀の金属学的調査	51
第2章 すりばち池3号墳	63
1. 調査にいたる経緯	65
2. 位置と環境	65
3. 調査の概要	67
4. 小 結	79
第3章 山津田遺跡	93
1. 調査にいたる経緯	95
2. 確認調査の概況	95
3. 位置と環境	98
4. 調査の概要	99
5. 小 結	114
第4章 清水角遺跡	125
1. 調査にいたる経緯	127
2. 遺跡の位置	127

3.	調査の概要	127
4.	おわりに	136

表 目 次

表 1	昭和30年以降の総社市における発掘調査一覧表	3
表 2	三須丘陵の巨石墳	10
表 3	緑山古墳群計測表	10
表 4	須恵器・土師器計測表	24
表 5	供試材の履歴及び調査項目	52
表 6	土師質高台付椀・小皿計測表	133

図 目 次

第 1 図	総社市位置図	
第 2 図	調査遺跡位置図 (S = 1 / 50,000)	2

1. 緑山17号墳

第 3 図	緑山周辺地形及び古墳分布図 (S = 1 / 5,000)	8
第 4 図	緑山17号墳 墳丘図 (S = 1 / 200)	13
第 5 図	石室平・断面図 (S = 1 / 80)	15
第 6 図	埋葬主体数推定図	17
第 7 図	遺物出土状況図 (S = 1 / 60)	18
第 8 図	出土遺物 1	20
第 9 図	出土遺物 2	21
第10図	出土遺物 3	22
第11図	出土遺物 4	25
第12図	出土遺物 5	28
第13図	出土遺物 6	29

2. すりばち池3号墳

第14図	すりばち池3号墳周辺地形及び古墳分布図	64
第15図	墳丘測量図 (S = 1 / 200)	68

第16図	墳丘及び周溝断面図(S = 1/60)	69
第17図	石室平・断面図(S = 1/60)	70
第18図	石室床面(S = 1/30)	71
第19図	遺物出土状況図(S = 1/30)	72
第20図	須恵器	74
第21図	刀子	76
第22図	鉄鏃	76
第23図	紡錘車	77
第24図	小玉	78
第25図	遺構に伴わない出土遺物	78

3. 山津田遺跡

第26図	山津田遺跡周辺地形図(S = 1/5,000)	94
第27図	山津田遺跡周辺地形及び地区設定図(S = 1/5,000)	96
第28図	山津田遺跡 遺構配置図	99
第29図	1号住居址 平・断面図(1/80)	101
第30図	1号住居址 出土遺物 1	103
第31図	1号住居址 出土遺物 2	104
第32図	2, 3号住居址, 段状遺構 平・断面図(S = 1/80)	106
第33図	2号住居址 出土遺物	107
第34図	3号住居址 出土遺物	108
第35図	段状遺構 出土遺物	110
第36図	4号住居址 平・断面図(1/80)	111
第37図	4号住居址 出土遺物	111
第38図	土壌2 平・断面図(1/40)及び出土遺物	112
第39図	土壌3 平・断面図(1/40)	112
第40図	遺構に伴わない出土遺物	113

4. 清水角遺跡

第41図	清水角遺跡周辺地形図(S = 1/5,000)	126
第42図	清水角遺跡 遺構配置図(S = 1/400)	128
第43図	土壌1(井戸状遺構) 平・断面図(S = 1/40)	129

第44図	土壙 1	出土遺物 1	131
第45図	土壙 1	出土遺物 2	132
第46図	土壙 2	平・断面図(S = 1/60)	134
第47図	土壙 9	平・断面図(1/20)及び出土遺物	135
第48図	溝	平・断面図(S = 1/120)	135

図 版 目 次

1. 緑山17号墳

図版 1	1. 緑山遠景	2. 緑山から南を望む(中央が作山古墳)	33
図版 2	1. 立木伐開後の状況(南から)	2. 石室天井石の状況(西から)	34
図版 3	1. 石室天井石の状況(南から)	2. 石室天井石の清掃後の状況(東から)	35
図版 4	1. 奥壁周辺の築成状況(東から)	2. 左側壁周辺の掘り方	36
図版 5	石室内掘り上がり状況(南から)		37
図版 6	1. 石室掘り上がり状況(北から)	2. 奥壁	38
図版 7	石室掘り上がり後の各部状況		39
図版 8	1. 開口部から奥壁を望む	2. 袖部	40
図版 9	遺物出土状況(上 南から 下 北から)		41
図版 10	1. 奥壁周辺遺物出土状況	2. 奥壁周辺遺物出土状況と棺台石	42
図版 11	1. 大刀出土状況	2. 金環出土状況	43
図版 12	1. B号棺周辺の遺物出土状況と棺台石	2. D号棺周辺の遺物出土状況と棺台石	44
図版 13	出土遺物 1		45
図版 14	出土遺物 2		46
図版 15	出土遺物 3		47
図版 16	出土遺物 4		48
図版 17	銀象嵌文様を施した鉄装大刀		49
図版 18	供献鉄滓の顕微鏡組織		57
図版 19	供献鉄塊酸化物及び鉄装大刀の顕微鏡組織		58
図版 20	鉄装大刀破片厚み方向の顕微鏡組織		59
図版 21	鉄装大刀組織の走査X線像		60

図版22	走査X線像部分の分析結果	61
------	--------------	----

2. すりばち池3号墳

図版23	1. すりばち池3号墳遠景(南から)	2. すりばち池3号墳近景(南から)	81
図版24	1. 調査前の墳丘の状況(南から)	2. 調査前の周溝の状況(北から)	82
図版25	1. 切通し面の状況(調査前)	2. 切通し面の状況(清掃後)	83
図版26	1. 石室断面(切り通し面)	2. 墳丘と石室の状況	84
図版27	1. 作業風景	2. 石室全景(西から)	85
図版28	1. 石室と掘り方の状況	2. 玄室から羨道を望む(北から)	86
図版29	1. 須恵器出土状況(東から)	2. 須恵器出土状況(南から)	87
図版30	遺物出土状況(上右・小玉, 上左・紡錘車, 下右・鉄鏝, 下左・刀子) 88		
図版31	石室及び礫床面の状況(上左・上右 北から, 下 南から) 89		
図版32	出土遺物 1	須恵器	90
図版33	出土遺物 2	須恵器・石製品・鉄器	91
図版34	遺構に伴わない遺物	弥生土器	92

3. 山津田遺跡

図版35	1. 江崎地区圃場整備事業区域(西から)	115	
	2. 圃場整備事業地と備中国分寺五重塔		
図版36	1. 山津田遺跡遠景(東から)	2. 山津田遺跡南半部近景(南から)	116
図版37	調査区北半部 遺構検出及び掘り上りの状況 117		
図版38	調査区南半部 遺構検出状況(上 南から, 下 北から) 118		
図版39	1. 1号住居址(東から)	2. 1号住居址内土壌 遺物出土状況	119
図版40	1. 2, 3号住居址及び段状遺構(東から)	2. 段状遺構 遺物出土状況	120
図版41	1. 4号住居址 検出状況	2. 4号住居址	121
図版42	山津田遺跡出土遺物 1 122		
図版43	山津田遺跡出土遺物 2 (上 H-3 出土) 123		
図版44	山津田遺跡出土遺物 3 124		

4. 清水角遺跡

図版45	1. 清水角遺跡 航空写真	2. 調査後の遺跡	139
図版46	1. 南側の工事用掘削城土層断面(立会調査時) 140		

図版46	2. 北側の工事用掘削壕の土層断面	140
図版47	1. 土壌1 遺物出土状況 2. 土壌1 掘り上がり後の状況	141
図版48	1. 土壌2 掘り上がり後の状況 2. 遺構全景	142
図版49	1. 土壌2 底面の炭 2. 溝 断面 3. 土壌9 遺物出土状況 4. 柱穴1 遺物出土状況	143
図版50	出土遺物1	144
図版51	出土遺物2	145
図版52	出土遺物3	146
図版53	出土遺物4	147



第1図 総社市位置図

1. はじめに

高梁川の造出した肥沃な可耕地に恵まれた本市には、沖積地や周辺の丘陵部に多くの遺跡が所在している。宮瀬川などによって形成された総社平野を構成する各微高地には、その殆んどといっても過言ではないほどに多数の集落址が想定されている。こうした農業生産基盤の優越さが各時代にわたって多くの集落の存立を可能にしたのであろう。一方丘陵部には、古墳時代にあつては彼らの墓城として多数の古墳が営造されている。その数は現在既知数で800基をうわまわり、すでに消滅したり未知のものを加えれば、優に1,000基を越えるものと推定される。しかしこれらの遺跡は、単に数的に多いのみでなく、質的にも豊かなものが多数含まれている。古墳に限ってみても、全国8位の規模を誇る大前方後円墳の作山古墳をはじめ、三須丘陵に点在する数基の巨石墳など、この地域のみでなくより広範な地域に君臨した首長たちの姿を彷彿させるものである。

こうした質量ともに豊かな古代遺跡は、早くから研究者の注目するところであり、いくつかの報告がなされ、また発掘調査も実施されてきた。しかもその調査は大部分が学術的目的で実施されたもので、幸いにして突発的な契機に起因するものは少ない状況であった。しかし昭和40年代をさかいに、列島改造的な大規模な開発が行われることとなり、否応なくその渦中にひきこまれることとなった。表1は昭和30年以降の本市における主要な発掘調査の一覧表である。鉄道、道路など大規模な交通関係開発がないのは喜ばしいが、一方では住宅団地の造成のように面的な大規模開発も行われており、また近年は圃場整備などが各所で実施されていることも事実である。

昭和51年度より始まった岡山県南広域都市計画事業総社中央地区土地区画整理事業は、本市における文化財行政にとって大きな転換となった。事業面積53.2haに及ぶもので、昭和55年3月頃にはすでに約40%の工事が終了していたが、この段階で集落址（真壁遺跡）が検出され、工事を一時中断することとなった。これを契機として教育委員会の機構を一部改め、埋蔵文化財の専門職員を採用し対処することとなった。こうして総社平野における集落址調査が本格的に始められることとなった。

以降の調査については別表に記したとおりであり、今回報告するのは「真壁遺跡」を除く他の調査報告である。



1. 緑山17号墳 2. すりばち池3号墳 3. 山津田遺跡 4. 清水角遺跡

第2図 調査遺跡位置図 (S = 1/50,000)

表1 昭和30年以降の総社市における発掘調査一覧表

調査年月	遺跡の名称	調査の目的・契機	調査の概要
昭和33年7月	佐野山古墳	自主調査	径約25mの円(方)墳。埴輪を伴うが埴石なし。墳頂中心部に箱式棺。人骨二体、玉類、鉄剣、鉄鏃、刀子、甕が棺内より出土。棺外副葬品に鉄板革綴の甲冑一式出土。五世紀代の築造。
昭和33年12月	随庵古墳	簡易水道の送水池工事中に発見	全長約40mの帆立貝式前方後円墳。後円部墳頂に竪穴式石室と粘土床。石室内に割竹形木棺残存。滑石製有孔円板、同勾玉、白玉、金製輪状品、刀子、位至三公鏡、柴水晶、ガラス製小玉、刀が棺内から、甲冑、鉄鏃、工具、鍛造具、漁具、鉾が棺外から出土。粘土床からは、剣、刀子、鉄斧、手鎌が出土。五世紀後半の築造。
昭和36年	砂古山古墳群	測量、実測中心の調査	同一丘陵上に存する全長35～50mの前方後円墳三基を含む。各々に竪穴式石室を有す。新本川流域における前半期の主要首長墓群と考えられている。
昭和38年	宮山墳墓群	自主調査	弥生時代後期末の墳墓遺跡。土壇墓、箱式棺などと共に全長38mの前方後円状の墳墓がある。これには割石、円礫積み <small>の</small> 小型竪穴式石室があり、刀、剣、素縁四獣鏡、銅鏃、ガラス小玉、鉄鏃など出土。墳丘には葺石があるほか、宮山型とよばれる特殊器台、特殊壺が多量に発見。また土壇墓中に同種 <small>の</small> ものを棺に転用したものあり。この調査により円筒埴輪が特殊器台から変化したものと判明。
昭和40年	建行田遺跡	自主調査	高梁川中流域の小規模河岸段丘にある遺跡。縄文時代前期の小遺跡と後期にも小規模な生活跡。さらに弥生中期の住居址近く <small>の</small> 埋葬地としても使用された遺跡と考えられている。
昭和42年	伊与部山墳墓群	自主調査	弥生時代後期の集団墓と古墳時代の方墳などを一括した遺跡。ほぼ方形の区画内に大小二つの配石墓あり。区画の外方に木棺配石墓、木棺直葬墓などがある小規模な集団墓地。
昭和42年 昭和53年	備中こうもり塚	石室内部の清掃と墳丘実測。環境整備に伴う事前調査	著名な巨石墳。全長103mの前方後円墳で横穴式石室を有す。石室全長19.5m。玄室中央に家形石棺があり、鉄釘、陶棺も出土。多数の副葬品があり、盗掘前の副葬品の多種多用途がうかがわれる。
昭和44年12月	三輪山古墳群	市営スポーツセンター建設	三輪山北麓にある横穴式石室墳四基。
昭和46年	立坂遺跡	自主調査	弥生時代後期後葉の墳墓遺跡。墳表から多数の特殊器台・壺が発見され、のちにその初現期 <small>の</small> ものとして注目された。周囲に石列を巡らした径18m位の墳丘墓。墳下と墳外に数基の埋葬が確認。
昭和46年	備中国分寺	吉備路風土記の丘環境整備に伴う調査	東西160m、南北178mの寺域。南門、中門及び井戸址などを検出。その他の主要伽藍は、現国分寺境内地のため不明。

調査年月	遺跡の名称	調査の目的・契機	調査の概要
昭和49～50年	西山古墳群	泉住宅団地建設	大部分の古墳は協議により保存。4基を発掘調査。一基は竪穴式石室。須恵器十数個体出土。いずれも前半期の古墳。
昭和51年4月	金子1号墳	厚生年金センター建設	箱式棺一基を発掘調査。金子2号墳は葺石をもつ一辺16mの方墳。2号墳は墳丘測量のみ。現状保存。
昭和52～53年	栢寺廃寺	周辺の宅地化による寺域・伽藍配置の把握のための緊急調査	賀陽氏の氏寺と推定される古代寺院跡。発掘調査により伽藍配置の一部が判明。塔の西側に金堂、塔と金堂で結ぶ中間北方に講堂が予測され、全体として法起寺式の伽藍配置が想定されている。
昭和53年	鬼ノ城	自主調査	規模社大な古代山城。石塁、土塁などの塁状遺構の検出を主目的に一部発掘調査が行われた。調査の結果、全長2.8kmに及ぶ塁状遺構と5ヶ所の水門址、3ヶ所の城門址が判明した。
昭和55～56年	殿山遺跡、殿山古墳群	土取りに伴う発掘調査	弥生中期後半の集落址と10基の墳丘墓、古墳の発掘調査。
昭和55年7月～57年9月	真壁遺跡	区画整理事業	縄文～中世にわたる複合集落遺跡。弥生時代を中心に多数の遺構、遺物。
昭和56年2月	すりばち池3号墳	市道拡幅工事	古墳時代後半期の横穴式石室墳。
昭和57年2月 7月 8月	緑山17号墳 山津田遺跡 清水角遺跡	市道改良拡幅工事 圃場整備事業 都計道路延長	古墳時代後半期の横穴式石室墳。 弥生時代後期の集落址。 鎌倉時代の集落址。

2. 調査の体制

昭和55年6月に市教育委員会社会教育課の一部を改め、文化係を新設して埋蔵文化財専門職員を採用し、以降の発掘調査を実施することとなった。

調査は区画整理地内の「真壁遺跡」を皮切りに、「すりばち池3号墳」「緑山17号墳」「山津田遺跡」「清水角遺跡」をはじめとし、その間に圃場整備が計画されている新本、下倉地区の確認調査や長良山、三須農道等の緊急、立会調査をえて今日にいたっている。しかし真壁遺跡の調査が長期にわたったことと、数ヶ所の併行調査となった状況から、その後の整理作業は遅々として進まず、また最も基本と考えられる分布調査も空白地域を多く残していることは、今後の大きな課題である。

なお調査にあたっては、岡山県教育委員会の指導助言のもとに実施し、関係諸機関の方々からも多くの御教示をいただいた。また発掘調査にあたっては地元の方々の協力を得た。記して謝意を表します。

調査組織

社会教育課文化係

課 長 茅野 健二

主幹兼文化係長 深見 又一 55・6～56・3 鎌田 弥 56・4～57・3

課 長 補 佐 枝松 和昌 55・6～56・3 小倉 悟 56・4～

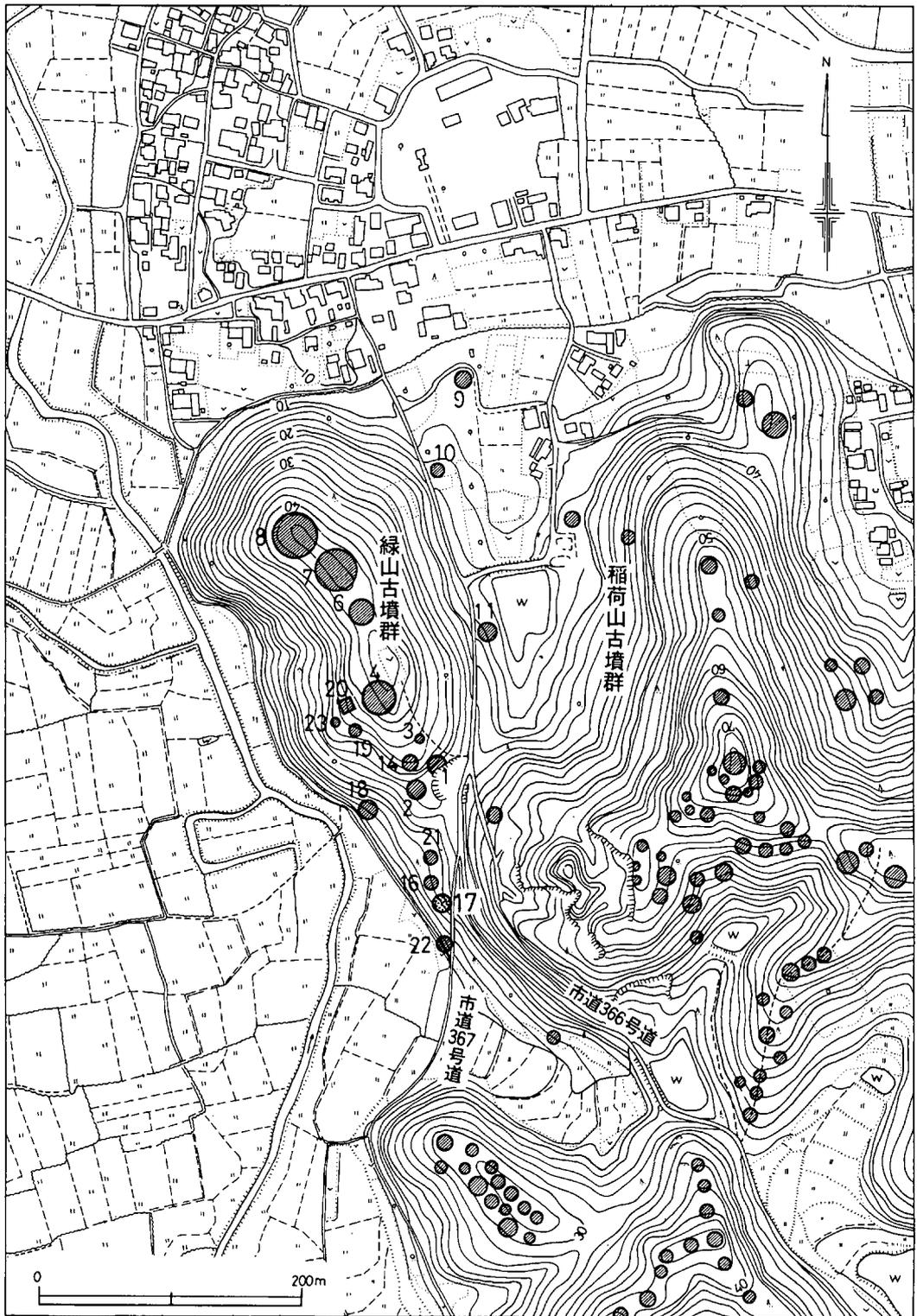
主 査 村上 幸雄（調査担当） 55・6～ 57・5から文化係長

主 事 秋山 律郎（庶務担当） 55・6～

主 事 補 谷山 雅彦・高田 明人（調査担当） 55・6～ 57・10から主事

作 業 員 水川 竹夫 寺松 毅 貸波 守 大楨寿騎太 野山己之助 角田祐四郎
梶谷 武志 山下 寛治 石賀 順孝 新谷 悦雄 中島 稔 塩見 薫
難波 民雄 泉 幸子 三宅智恵子 楠木 孝重 加藤 清子 加藤 愛子
加藤 敏子 平田喜久子 山本 操子 若林 菊江

第 1 章 緑山17号墳



第3図 緑山周辺地形及び古墳分布図 (S = 1/5,000)

1. 調査にいたる経緯

総社平野の南東に位置する三須丘陵には、これまでに約350基の古墳の所在が知られており、全国的にみても有数の古墳群集地域を形成している。この丘陵には、南北方向にいくつもの道路が横断しており、その西端に位置するのが市道上林支線367号道である。この道は南の江崎と北の上林を結ぶものであり、通勤、通学路として、また国分寺・尼寺や作山古墳をはじめとする行楽道として利用されている。ところが昭和56年度事業として、この道が同和事業の生活改善事業による改良舗装工事が実施されることになり、担当課より予定地内の埋蔵文化財の有無について問合せがあった。遺跡台帳には記載されていないが、岡山大学考古学研究部の報文(註1)によれば、計画地内に123号墳=本墳、以下緑山17号墳と呼称する(註2)、124号墳として報じられている。調査の結果、123号墳の所在は確認したが、124号墳については雑草木の繁茂のため、この時点においては確認しえなかった。計画によれば、本墳は石室の約80%が低触するものである。このため担当課と協議し、現状保存を要請したが、地元の要望もあり、またこの道の直上を市道上林支線366号道が通っており、西側への迂回は路線が大きく曲折するため設計変更が困難であることなどから、やむなく発掘調査を実施することとなった。

2. 歴史的地理的環境

緑山17号墳は、三須丘陵の西端の総社市上林389番地に所在する。

総社平野の南には、屏風をたてたごとく日差山、仕手倉山、狸岩山、和霊山、福山、軽部山など標高200~300mの主峰をもつ山塊が、北東から南西にのびる。この山塊からは、南北にいくつもの低丘陵群が派生しており、仕手倉山から発して北にのびる標高30~80m前後、長さ約3.5km、幅約1kmの低丘陵群が、俗に三須丘陵とよばれている。平野の北には吉備高原に連なる主峰列が望まれ、南の山塊とは山容を異にしている。西を高梁川、東を足守川で画された平野内には、旧河道が複雑に入りくみ、各所に微高地を形成している。これらの肥沃な可耕地は、生産の場としてあるいは居住の場として、現代にいたるまですぐれた活動の拠点としての役割を果たしている。気候、風土に恵まれたこの地は、古代にあっても著名な足跡を残している。全長286m(註3)の大前方後円墳の作山古墳、三須丘陵南縁の備中国分寺・尼寺、平野のほぼ中央部に想定されている備中国府跡をはじめとし、縁辺に眼をむければ全国4位の規模を誇る全長約350mの造山古墳、壮大な古代山城跡の鬼ノ城など枚挙にいとまがなく、また丘陵南を走る旧山陽道は幹線道として各地に通じている。そうした著名な遺跡のみでなく、平野の縁辺の丘陵には数百基の古墳が所在し、一大古墳群集地域を形成していることこそ重要な問題であろうと考えられる。

本題の三須丘陵について、そうした問題を考えてみたい。三須丘陵の古墳については、多くの先学諸氏の努力により、これまでに約350基の古墳の所在が知られている（註4）。古墳時代のほぼ全期間にわたって築造されており、大は造山，作山，小造山，寺山，こうもり塚などの前方後円墳から，小は径10m前後の普遍的な小円墳まで含まれる。これらの古墳群のうち，緑山古墳群を考えるにあたって重要なのは，後期の横穴式石室をもつ有力首長墓と考えられるもののありかたである。西川 宏氏の指摘（註5）によれば，三須丘陵における首長墓として，緑山を除いては，塩毛1号墳，亀山塚，鳶ノ尾塚，新池大塚，翁塚，こうもり塚の6墳があげられている。これらは単独か数基から成る古墳群である。こうした所在の仕方はごく普通の形態であり，各地において認められるものであるが，緑山においては首長墓級と考えられる古墳が系譜的に営造されており，他地域と異なる様相を示していて，とくに有力な首長家の墓地（註6）の可能性も考えられている。調査を実施した本墳は，こうした緑山古墳群を構成する一墳であり，調査のもつ意義もまた大きいものといえるであろう。

表2 三須丘陵の巨石墳

(単位 m)

古墳名称	墳形	規模		袖	石室全長	玄室			羨道			備考
		規径	模高			長	巾	高	長	巾	高	
こうもり塚	前方後円墳	103		両	19.45	7.9	3.5	3.6	11.95	2.2	2.8	文献A 文献B 文献C
亀山塚	円墳	30	6	右	17.79	6.3	2.55	2.67				
翁塚	円墳			両	15.5	4.8	2.3	2.5				
トビオの塚	円墳			両	12.5	$\frac{6.4}{7.5}$	2.2	2.4	$\frac{5.0}{6.1}$	1.5	1.5	玄室長が左右で異なる
塩毛古墳	円墳	25	42	両	8.3	3.9	2.4	2.95	4.4	1.0	1.0	文献C
新池大塚	円墳	16	30	左	10.1	4.8	2.4	2.4				
江崎5号墳	前方後円墳	45	7	左	約12							

A 葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35』 岡山県教育委員会 1979
 B 岡山大学考古学研究所「三須丘陵遺跡分布調査報告」 1976 C 西川 宏「吉備の国」 学生社

表3 緑山古墳群計測表

(単位 m)

番号	墳形	規模		内部施設	石室全長	玄室			羨道			主軸	文献別対比		
		規径	模高			長	巾	高	長	巾	高		A	B	C
1	円墳			横穴式石室	3.7+α	2.3	1.95				22度西	緑山2号墳	No.125号墳		
2	円墳	13.0	4.5	横穴式石室	9.35	5.6	1.6	1.65	3.75	1.4	12度東			No.120号墳	
3	円墳			横穴式石室	3.0		0.7				45度西			No.112号墳	
4	円墳	24.0	6.0	横穴式石室	11.40	6.0	2.45	2.95	5.4	1.5	38度東	緑山四ノ塚	緑山6号墳	No.116号墳	
6	円墳	19.0	4.0	横穴式石室	3.7+α	3.7	2.5	1.7			82度東	緑山二ノ塚	緑山9号墳	No.115号墳	
7	円墳	30.0	6.0	横穴式石室	11.20	5.35	2.55	2.8	6.0	1.3	44度東	緑山一ノ塚	緑山10号墳	No.114号墳	
8	円墳	36.0	8.0	横穴式石室	15.1	7.2	2.85	3.8	7.9	1.4	30度東		緑山11号墳	No.113号墳	
9				横穴式石室	6.35	3.55	2.2		3.0	1.35	78度西				
10				横穴式石室	6.8		1.6				62度西				
11	円墳	13.0	2.5	横穴式石室	8.3	3.9	2.4	2.95	4.4	1.0	82度東	塩毛古墳	塩毛1号墳		
14	円墳	11.5	3	横穴式石室	6.2		1.4				16度西			No.117号墳	
16				横穴式石室	6.1		1.4				60度東			No.122号墳	
17	円墳	16.0	3~3.5	横穴式石室	9.8	6.2	1.5	1.7	3.6	1.1	38度東			No.123号墳	
18				横穴式石室	9.6	3.8			5.8		2度西			No.119号墳	
19				横穴式石室	5.5		1.1	1.0			12度西			No.118号墳	
20	方墳	13.0			2.5		1.0				70度東				
21				横穴式石室	5.0		1.3	1.4			5度東			No.121号墳	
22				横穴式石室	4.0+α		1.3				70度東			No.124号墳	
23				箱式棺											

※ 遺跡台帳に拠ったため，5，12，13，15は欠番 ※ 計測値は現況値

A 永山卯三郎「吉備郡史」上巻 1937年 B 西川 宏「吉備の国」 学生社 1975年
 C 岡山大学考古学研究所「三須丘陵遺跡分布調査報告」 1976年

3. 調査の概要

(1) 調査の経過と方法

本墳は、戦後まもなく道をつくる際に墳丘の東側の大半を削り取られ、西側の一部も戦時中か戦後の開墾時に採土のため削られており、数枚の天井石の一部が露出していた。盗掘によるものであろうか羨道部の天井石の一枚が動かされており、土砂が充満する石室内は、隙間からの観察でやや幅の狭い左袖の横穴式石室であることがうかがわれた。

しかし用地買収が遅れたこともあって、調査の開始が2月初めとなり、工事が昭和56年度事業であるため、遅くとも3月初旬迄には調査を終了しなければならないという状態であった。

このため工事と調査が併行して行われることとなり、そのため石室内部の調査に重点をおかざるをえず、墳丘については東側及び奥壁側の現道路切断面の観察をもってあてることとし、西側については調査の進行状況を勘案して決めることとした。しかし調査が進むにつれ、石室がおもいのほか崩れかかっており、天井石や一部の側壁の除去作業が難航し、休日返上で辛うじて3月16日に終了した。

なお124号墳（緑山22号墳）については、工事に伴う周辺の伐開後に確認することができたが、道路の一部をやや東に変更することで今回の工事については支障なしと判断し、具体的取扱いについては次年度に協議することになった。

日誌抄

調査は昭和57年2月2日に着手し、3月16日に終了した。実働調査期間は36日間である。

2月2日～5日 調査に先立ち関係諸機関へ挨拶。担当課と道路予定部分の範囲や排土置場を検討。発掘用器材を搬入。立木伐開作業を行う。現状から径約15m前後の円墳で、石室全長約8m余、玄室長6m前後の左袖の横穴式石室であることが判明した。

8～9日 墳丘を中心に伐根等の清掃作業。調査前の状況撮影。墳丘測量（ $S = 1/50$ ）。石室の主軸線設定のため、奥壁及び羨道の一部を掘下げる。石室長に対し、やや巾の狭い石室である。

12～16日 天井石露出作業。伐開後の状況から、天井石は7枚残存していることが判明。そのうち4枚は樹根等の影響で崩落しかけているらしい。石室が全体として右側に傾いているらしく、調査の難航が懸念される。天井石を中心に現状撮影。表土剥ぎ及び転落した天井石を除去するための準備作業。現道路の切断面を清掃し、墳丘の築成状況を観察、実測。

18～24日 工事担当の業者に依頼し、天井石の除去作業。石室内の掘下げ開始。工事期間が切迫しているため、道路の擁壁部分の掘下げ要望があり、やむなく了承。このため周溝の確

認は、工事用掘削坑の断面観察をもってあてることとする。石室内や前庭部などから鉄滓出土。残存する3枚の天井石も、石室全体が傾いているため、現状のまま調査を進行することは危険と判断。再び天井石除去のための準備作業を進める。なおこれまで不明であった124号墳を発見。石室現長4m、巾1.3m。奥壁寄りの天井石2枚が残存する横穴式石室と判明した。緑山22号墳とし、取扱いを協議する。

25～28日 天井石除去。石室内の掘下げを進め遺物検出作業を始める。奥壁周辺を中心に須恵器などの副葬品及び棺台石が出土。前庭部にも散見。石室実測のための割付けを行い、実測を始める。

3月3日 大刀出土。比較的残存度が良い。棺台石及び鉄釘の出土状況から、木棺数棺の追葬が推定される。

4～10日 C号棺南で金環一对出土。石室の輪郭を明確にするため、右側壁の上面を掘下げ。左側壁は、封土を全部除去し、部分的に掘り方を確認する。遺物出土状況撮影。

11日 記者発表。

12～15日 遺物取り上げ。床面清掃。金環出土の周辺で滑石製勾玉出土。石室内掘り上り状況の撮影。各部にわたり補足調査。

16日 午前中で調査を完了し、機材搬出。

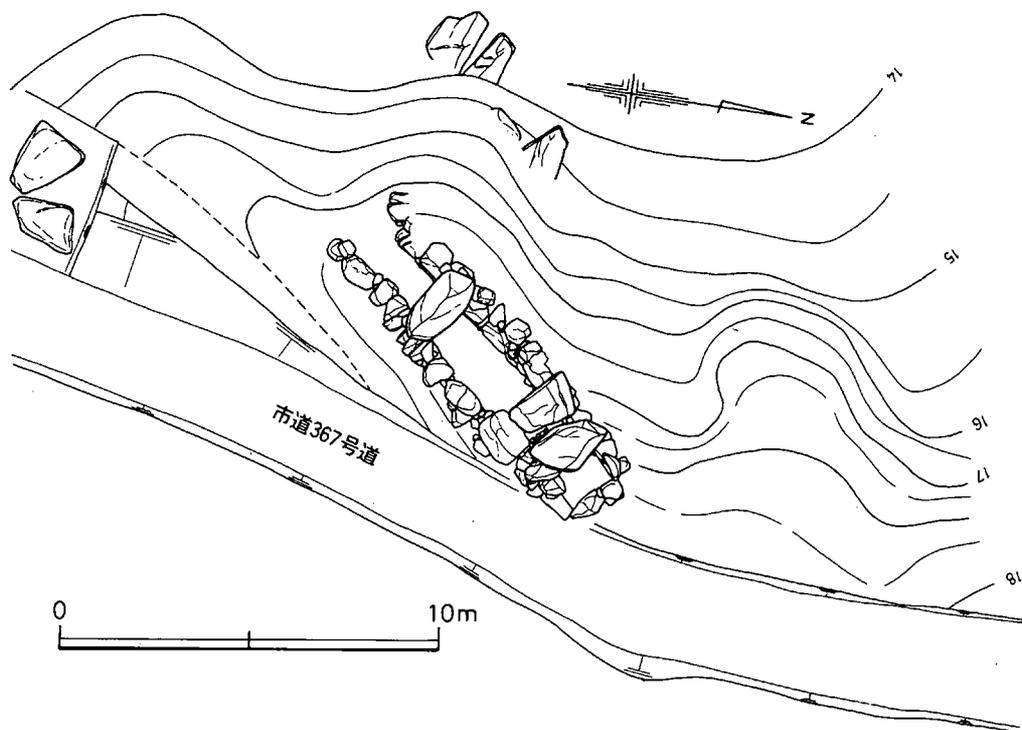
(2) 立 地

緑山古墳群は、三須丘陵の最西端に位置する小丘陵に所在し、19基の古墳から構成される。この丘陵は、標高40mほどで南北長350m、東西長150mほどの小丘陵である。標高75mの稲荷山に続く鞍部を市道が通り、分断された形となっている。花崗岩の露岩が多く、採石や採土のためかなり地形が改変されている。緑山、稲荷山古墳群とも、三須丘陵における横穴式石室墳の最も群集した地域であるが、分布調査が必ずしも完全でなく、また上記理由による地形改変のため古墳の消失などもあり、群構成についてはその接点部分が特に判然としない(註7)。緑山古墳群は、頂部平坦面を中心に南～南東斜面、東～北東斜面下に19基の横穴式石室をもつ古墳(註8)が存在する。特に頂部平坦面には、大型の石室をもつ古墳を含め4基(註9)が所在し、早くから巨石墳の群集した地域として、またそればかりでなく古い様相をもつ横穴式石室墳が3基(註10)所在していることにも関心がもたれていた。

本墳は、緑山と稲荷山を結ぶ鞍部の南側斜面に所在し、標高は約16mで眼下の水田との比高差は約7mを測る。僅かな標高差があるものの、16、21、22号墳の3基がほぼ同一状況下にある。

(3) 墳丘と周溝

墳丘の規模については、石室を中心としてみた場合、左半分は道路建設時に掘削されており、



第4図 緑山17号墳墳丘図 (S = 1/200)

奥壁周辺の側壁は石材が露出するほどの状態で、玄室から羨道部にかけては側壁が辛うじて隠れる程度の残存状況である。右半分も良好とはいえ、玄室の中央部あたりを中心に大きく抉り取られており、残存状況の良好なのは北西側の一部のみである。しかしこの部分も調査期間の関係から、封土築成状況の調査ができなかったため、その後の封土流出も考えられるため、現況からの墳丘規模の判断は推定とならざるをえない。奥壁背後の現道路切断面の観察によれば、風化花崗岩の地山を掘り込んで墓壙とし、版築状に盛土をしながら石室を構築している状況がうかがえる。周溝は、道路面が高いため埋積土の上部しか検出されておらず、道路擁壁用の工事用掘削坑も推定される周溝部域まで及んでいないので、周溝の位置、規模についても推定にとどめざるをえない。

以上の状況からは、調査不十分のためあくまでも推定の域をでないが、本墳は円墳で径約16m前後、高さ3～3.5m前後で、傾斜の高い山側を中心に上端幅約4m、深さ1m以上の周溝が半円状にめぐっていたものと推定される。

(4) 内部主体

本墳の内部主体は、ほぼ南西に開口する左袖の横穴式石室である。

石室は全長9.8mを測り、左側が右側に比し1.2mほど長い。玄室は長さ6.2m、幅は奥壁で1.4m、中央部で1.5mで、高さは1.7mを測る。袖部は20cmを測るにすぎない。羨道は長さ3.6

m, 幅1～1.1mで、高さは95cmであり、玄室に比べ75cm低く、玄室と羨道の差が明確にあらわれている。

右室の掘り方は、墳丘の右半分が未掘、左側は道路建設時に削平され、しかも現道が工事用車両の通行のため掘下げられなかったため、掘り方は奥壁部～左側袖部の範囲で確認したのみであるが、奥壁部はやや広目で側壁部は石材がおさまる程度の大きさにしか掘られていない。

床面は、風化花崗岩の地山を削り整形しただけのものであるが、玄室中央部から羨道部にかけては地山が下降しているため、埋め出して床面としている。このため石室構築にあたっては、地山部分の床面は石材を据えつけるために僅かに掘り込んだのみであるのに対し、埋土部分の床面は石材を深く埋め込んだ状態で構築している。

なお調査最終段階で床面にサブレンチをいれたが、排水施設は検出されなかった。

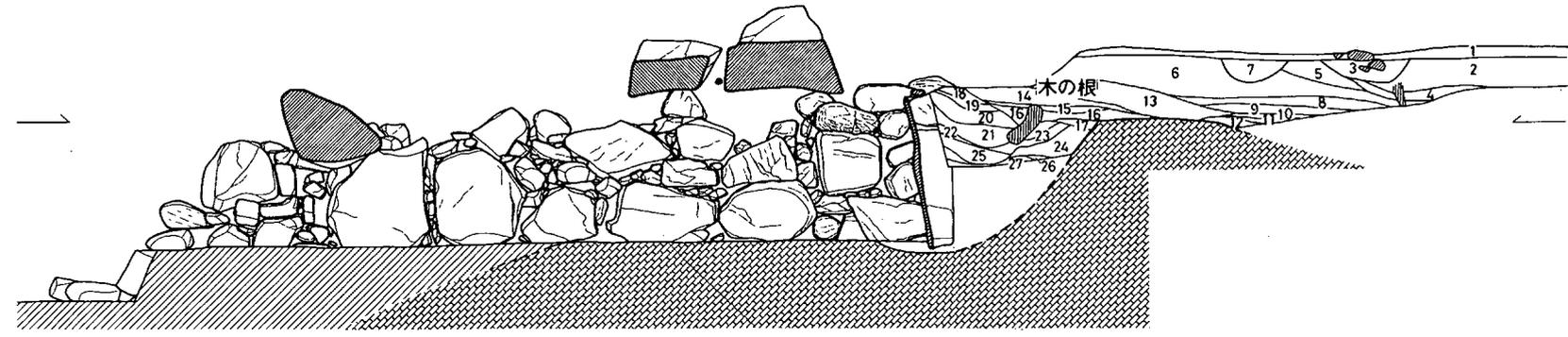
石材は、本墳周辺に産する花崗岩の自然石や割石を使用している。本墳の所在する緑山や東の稲荷山には花崗岩の露岩が多く、近年まで石切場であったほどであり石材にはこと欠かない。奥壁左側は奥行45cm、長さ175cmの石材を、右側は大小二個の石材から構築されるが、両側壁とは直角にならず、右側がやや鋭角的な変形コの字状を呈する。左側壁は、土圧や木の根の影響を受けて内傾が著しく、危険であるためほぼ二段目までしか残存できず、それより上段の石材は掘下げの段階で除去した。玄室中央部から袖部にかけての基底部は、やや大型の石材を横長に用い、二段目はそれよりやや小型の石材を同様に用いて、三～四段積みになっているが、奥壁近くはやや乱雑な構築となっている。袖石は幅90cm、奥行35～80cm、長さ145cmの石材の横口を縦長に用いている。羨道部は玄室に比し石材がやや小さく、二～三段積みとなっている。右側壁は外傾しているが、ほぼ同様の手法を用いており、羨道とのさかい近くの玄室部では、やや大型の石材の広口を縦長に使っている。羨道部は、石材の選択、構築状況ともに左側壁より粗雑である。側壁は、現状では全体にやや右側に傾いたものとなっているが、構築時にはほぼ垂直な立ち上がりをもっていたものと推定される。天井石は、残存状況からみて、欠落したものを含め玄室に六個、羨道部に三個の計九個であったと推定されるが、石材はかなり不揃いでしかも不整形なものが多い。長さに比しやや幅狭い石室であるため、天井石も最大2×1.3×0.5mのものである。

なお閉塞施設については、首肯するような痕跡を認めることができなかった。また墓道については、羨道～前庭部周辺は埋め出しによるものであるため、明確な形での把握はできなかったが、右側壁の先端部が基底部より低く、しかも外方へ曲っている状況や地形観察から、この部分に推定しておきたい。

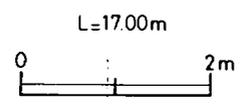
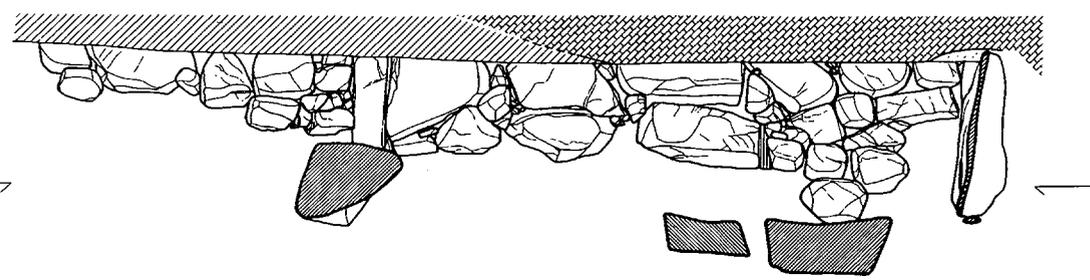
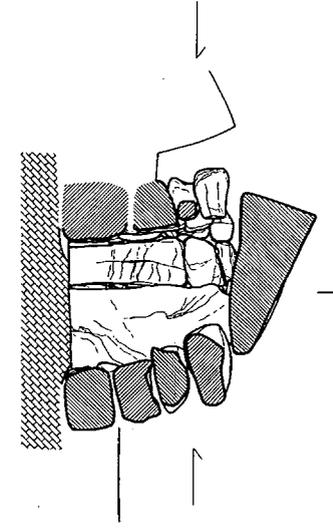
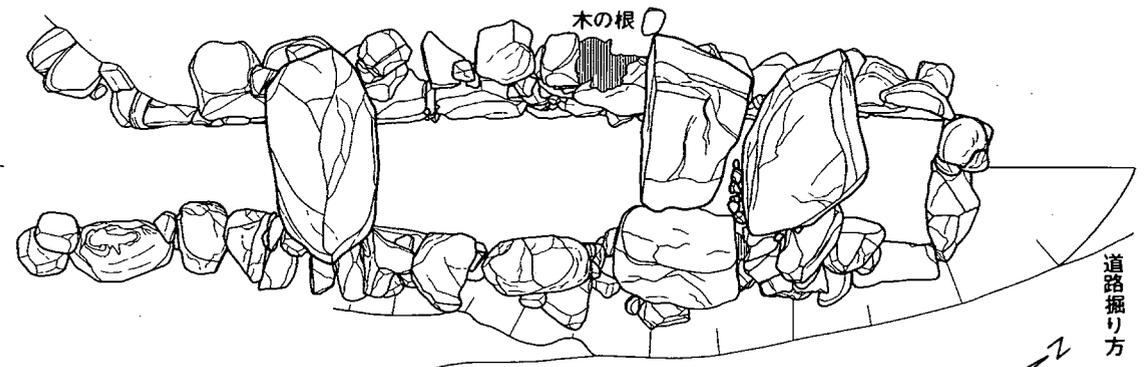
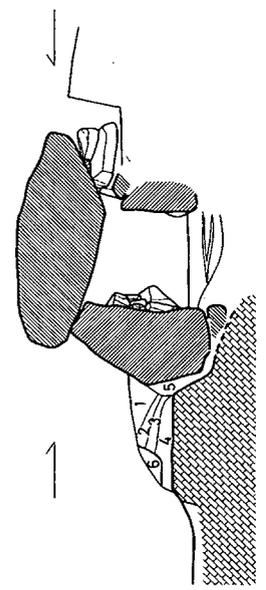
(5) 埋葬主体

石室内の遺物の残存状況は、死者を納めた棺が木棺であったことを示している。玄室内には

- 1. 淡黒色土
- 2. 暗黄褐色土
- 3. 黒色土
- 4. 黄褐色土
- 5. 暗黄褐色土
- 6. 旧道 (淡黒色土)



- 1. 表土層
- 2. 褐色土 (砂質含み)
- 3. 土壌 (新)
- 4. 淡灰褐色土
- 5. 褐色土 (粒子やや小粒)
- 6. 褐色土 (粒子やや大粒)
- 7. 土壌 (新)
- 8. 淡黄褐色土
- 9. 淡褐色土
- 10. 淡褐色土 (9より小粒)
- 11. 明褐色土
- 12. 淡褐色土
- 13. 淡褐色土 (6より小粒)
- 14. 褐色土 (やや粒子大)
- 15. 褐色土 (やや粒子小)
- 16. 淡茶褐色土
- 17. 褐色土 (15, 16より粒子小)
- 18. 淡褐色土 (やや粒子大)
- 19. 褐色土
- 20. 淡明褐色土
- 21. 暗褐色土
- 22. 淡明褐色土
- 23. 暗褐色土 (ブロック状に明褐色土混入)
- 24. 淡明褐色土
- 25. 暗褐色土 (粒子小)
- 26. 暗褐色土 (炭混入)
- 27. 淡明褐色土



第5図 石室 平・断面図 (S=1/80)

数の多寡は別にして、ほぼ全体から鉄釘が出土しており、棺台に用いられたと考えられる花崗岩の小転石や割石がかなり認められる。これらの棺台石は、追葬時に除去されたり移動させられている可能性もあるため、必ずしも規則的という訳ではないが、鉄釘の出土状況と重複して捉える時、右側に2+1?棺、左側に3棺の計5+1?棺の存在が推定される。A号棺の棺台石は、残存状況がよくほぼ原状を保っていると考えられる。A'棺については、いずれを棺台石とするかは判然とせず、他の棺台石の残存状況に比し積極的に首肯する材に乏しい感は否めないが、鉄釘の出土状況から存在した可能性を考えておきたい。B~E号棺については、個々に残存状況の差違が存するものの、遺物の出土状況からみてもほぼ間違いないであろう。羨道部の一石は、やや大型の扁平なもので、あるいは棺台に用いられた可能性も否定できないが、この部分から鉄釘の出土はなく、組合せ木棺であれば別だがやや疑問も残る。

いずれにしても、追葬にあたって先葬の棺や副葬品を片付けて新しい空間をつくりだした状況とは考えられず、比較的短期間に順次空間を利用して埋納されたものと推定される。

(6) 遺物の出土状況

石室は、先述したごとく残存状況は良好で、とくに玄室は崩落しかけてはいない、天井石も側壁も危険防止のため除去した石材を除けば、ほぼ構築時の状況にかなり近い状態であった。羨道部についても同様である。また左側壁の奥壁部寄りには、基底部から二段目までの石材しか存在せず、またこの部分の天井石も欠落した状態であった。しかし石室内の遺物はこの部分が最も良く残存しており、盗掘による遺物の被害はきわめて少なかったか、あったとしても比較的軽微なものと推定しておきたい。

石室内の遺物は、奥壁周辺を中心に散在的ではあるが羨道部先端まで、ほぼ石室内の全体にわたって検出された。奥壁寄りでは、大部分が完形に近い状態の須恵器13個体と、破損した2個体の土師器が出土した。この一群の遺物群に近い位置で、一部折損しているが鉄装の大刀が出土している。これより開口部にかけては、1~2個体の須恵器と羨道先端部で4個体の須恵器が検出された。金環一對と滑石製勾玉は、ほぼ近接した状態で検出されており関連したものと考えられる。鉄釘は折損しているものが殆んどであり、ほぼ玄室内の全体から出土しているが規則性は認められないようである。鉄滓は、玄室内の羨道に近い部分で出土したほか、床面よりやや遊離した状態で検出されたものも数個存在する。このほか、前庭部から須恵器杯身のほか鉄滓が出土している。



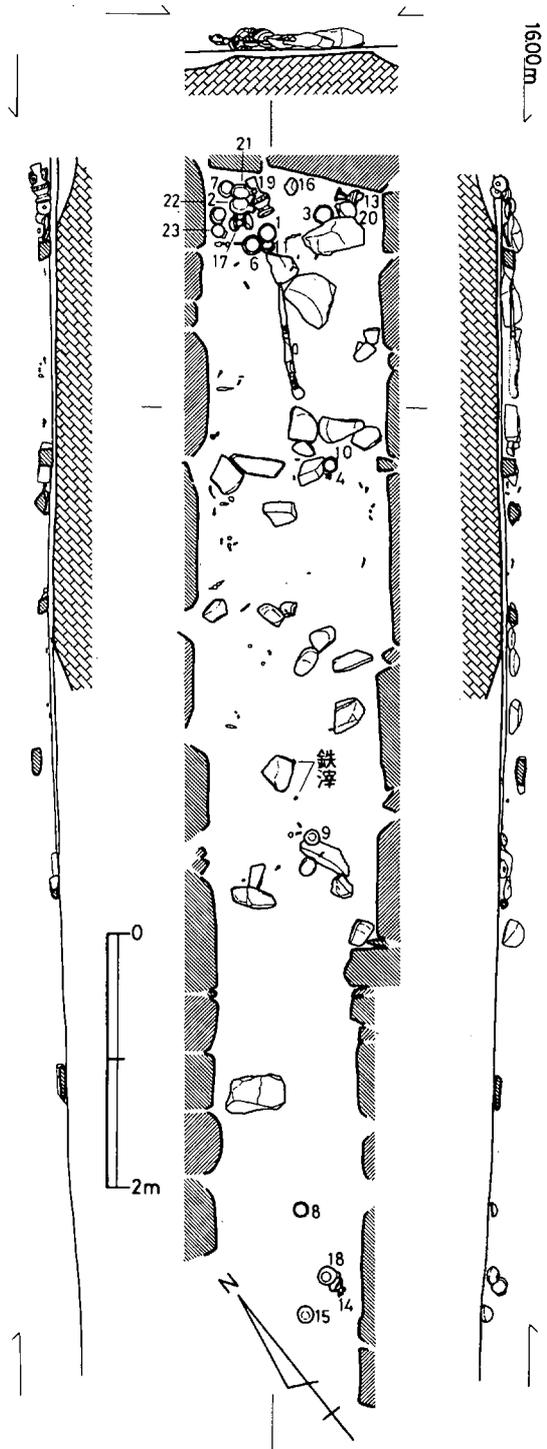
第6図 埋葬主体数推定図

以上の遺物の出土状況から、奥壁周辺の一群の須恵器、土師器及び大刀はA号棺に伴うものと考えられる。B号棺には4, 10の須恵器、C号棺には金環と勾玉、D号棺には9の須恵器が考えられよう。鉄滓については、E号棺の可能性もあるが出土状況からはD号棺に伴うと考えたり。E号棺は刀子が伴うであろう。開口部周辺の須恵器4個体については、閉塞施設が判然としないため石室内副葬遺物とみるか追葬時における墓前祭に伴うものか明らかではないが、出土位置からすれば後者の可能性が強いと考えられる。また前庭部出土の須恵器、鉄滓も同様であろう。

(7) 出土遺物

石室内出土の遺物は、須恵器約30、土師器2、大刀、馬具、鉄鏃、鉄滓、鉄釘などで、鉄釘を除いては完形ないし完形に近い状態で出土したものが多く、また前庭部からも須恵器数点のほか鉄滓が出土している。図示した容器類は、1~23が石室内、他は前庭部出土である。

杯蓋(1~5) 杯蓋は5個体出土した。1は天井部はまるみをもつが、全体としてはやや扁平な外観を呈している。口縁部とのさかいは不明瞭で、端部はまるくおさめる。天井部 $\frac{1}{2}$ をヘラ削り調整し、他はヨコナデで仕上げている。ヘラ削りとのさかじめ及び口縁部とのさかいは付近に、ヨコナデにより生じた浅い凹状部をもつ。2は天井部はまるく、口縁



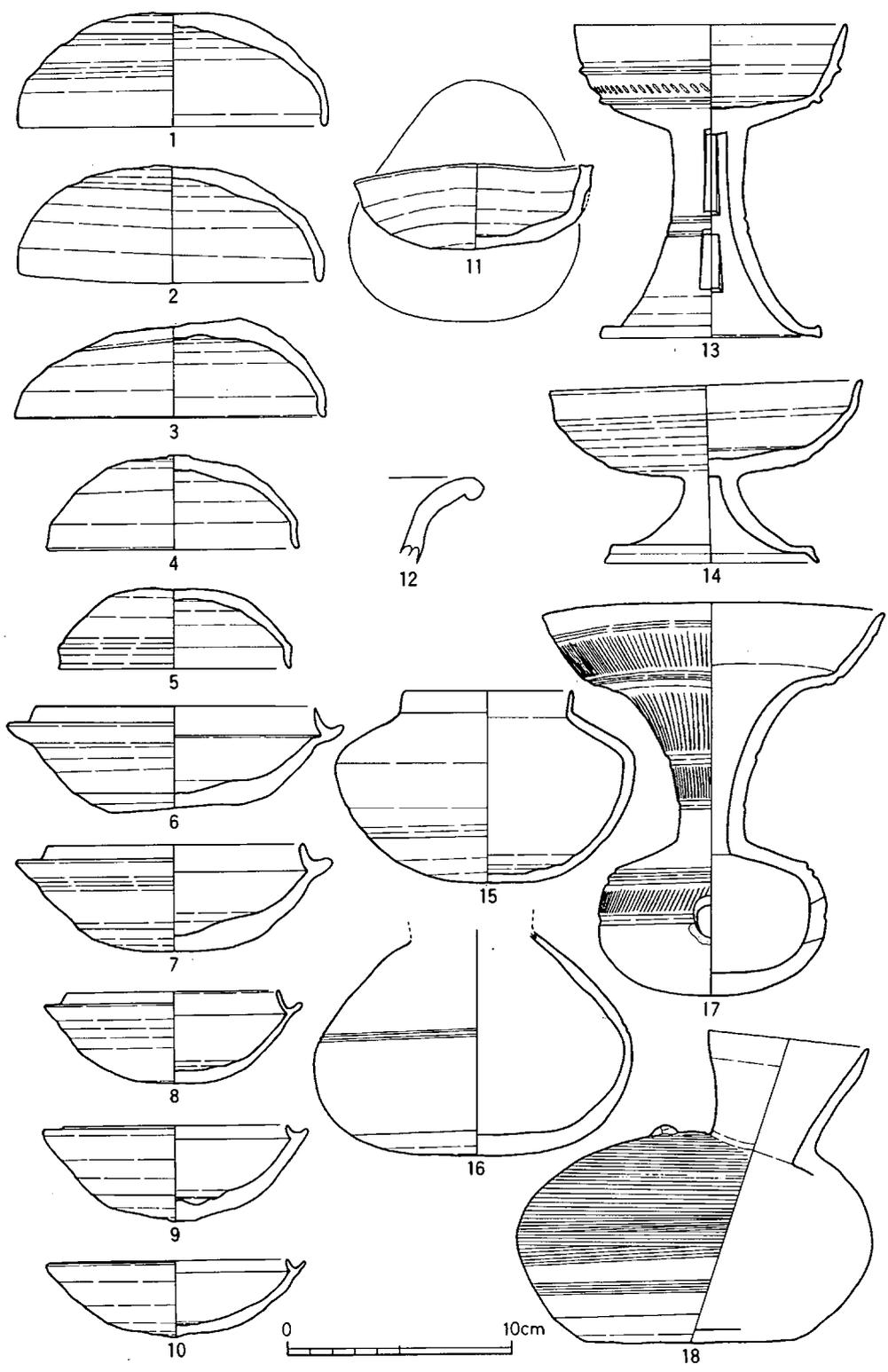
第7図 遺物出土状況図 (S = 1/60)

部は内弯ぎみに垂下する。1と同じく天井部はヘラ削りで、他はヨコナデにより仕上げ、浅い凹状部をもつ。3はややいびつであるが、天井部は平坦で口縁部は屈曲して垂下するもので、1よりももっと扁平な外観を呈している。天井部をヘラ削りし、他はココナデを施す。6とセットをなすものである。4は天井部はまるく、口縁部との境に鈍い稜をもち、端部はまるくおさめる。天井部は約 $\frac{1}{2}$ 強がヘラ切り未調整で、他はヨコナデで仕上げる。5はやや平坦な天井部から、口縁部は内弯ぎみに垂下し、端部を僅かにつまみだしている。口縁部とのさかじめに鈍い稜をもつ。天井部は $\frac{1}{2}$ 強がヘラ切り未調整で、他はヨコナデによる仕上げである。天井部にヨコナデにより生じた浅い凹状部をもつ。

以上の杯蓋は、形態、調整から二つのタイプに分類される。A類は、天井部はまるく、口縁部との境界は不明瞭で、天井部の中心から $\frac{1}{2}$ 位はヘラ削り調整をおこない、他はヨコナデにより仕上げるものである。これに該当するのは1～3で、平均口径13.6cm、器品4.7cmを測る。B類は、器形の小型化がより進んだもので、天井部はまるく口縁部との境界に鈍い稜をもち、口縁部は屈曲して垂下する。天井部の約 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ がヘラ切り未調整で、他はヨコナデで仕上げている。これに該当するのは4、5で、平均口径10.7cm、器高3.85cmを測る。

杯身（6～10） 6は全体にやや歪である。底部は平坦でやや浅い。受部はやや長目にひきのばし、端部を丸くおさめる。たちあがりは短かく1.2cmで、やや内傾し、端部は尖りぎみである。底部 $\frac{1}{2}$ 強をヘラ削りのほか、他はヨコナデで仕上げる。7は底部がやや丸く深い。器壁は全体に厚目である。受部は水平に近い状態でひきのばされ、端部は丸い。たちあがりは短かくやや内傾し、端部はまるい。底部 $\frac{1}{2}$ 強をヘラ削りのほか、ヨコナデにより仕上げているので浅い凹状部が存する。8は丸く深い体部で、受部は斜め上方にひきのばされている。たちあがりは短かく内傾し、端部はまるくおさめる。底部 $\frac{1}{2}$ 弱はヘラ切り未調整のほか、他はヨコナデで仕上げる。9も体部は丸く深い。全体に器壁が厚く、受部は短かく斜め上方にひきのばされ、端部は丸くおさめる。ただあがりは短かく内傾するが、受部よりわずかに高い程度である。底部はヘラ切り未調整のほか、他はヨコナデ仕上げである。10は体部は丸くやや浅い。受部は斜めにたちあがり、端部は丸くおさめる。たちあがりは内傾しやや尖りぎみにおさめるが、受部とほぼ同じ高さである。底部をヘラ切り未調整のほかは、ヨコナデにより仕上げる。

以上の杯身も、形態、調整から二つのタイプに分類される。A類は、器形がやや大きめで深く、底部 $\frac{1}{2}$ 強をヘラ削りするほか、他はヨコナデで仕上げる。たちあがりも全般の傾向からすれば短かいが、次に述べるタイプのものより長い。これに該当するのは6、7で、平均口径は11.9cm、受部径14.55cm、器高4.6cmを測る。B類は、A類より小型化し、たちあがりも短い。底部はヘラ切り未調整のほか、他はヨコナデで仕上げている。これに該当するのは8～10で、平均口径9.8cm、受部径11.6cm、器高3.9cmを測る。



第8図 出土遺物1

杯身? 11は器種が不明だが、一応杯身としておく。底部は丸く、やや浅い。端部の端面は平らでをわずかに凹部がめぐる。底部 $\frac{1}{2}$ 強をへら削りのほかは、ヨコナデにより仕上げている。本品は、調整後三方向から指で内面に押し込んだもので、焼けひずみによるものではなく、人為的なものと考えられる。このため平面形は角のまるい三角状を呈している。

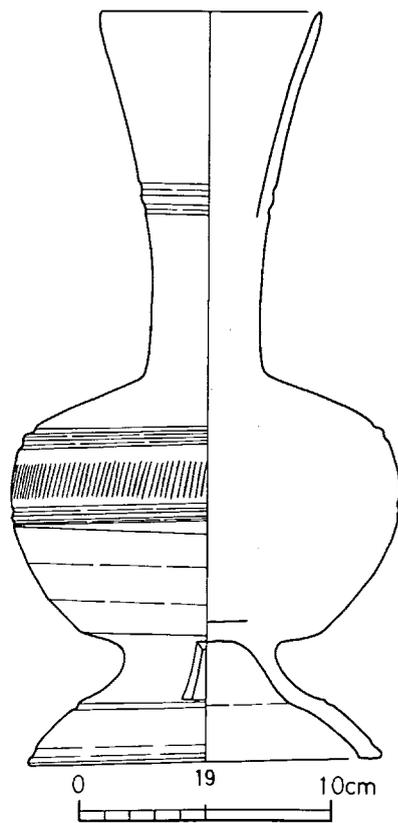
壺 (12) 口頸部の破片で、口縁端部は丸く折り返されている。

高杯 (13, 14) 13は長脚二段透しの高杯である。杯部は、ほぼ水平な底部から口縁部は斜め上方にたちあがり、境界に明瞭な凸帯をもち、口縁端部は丸くおさめる。凸帯間は板状工具による刺突文がめぐる。脚部は外反し、裾部は水平に開き端部をやや拡張する。脚柱に二段二方向に長方形透孔をもち、透孔間に二本の沈線がある。調整はヨコナデである。14は短脚で、杯部は水平な底部から斜め上方に開き、口縁部はわずかに外反しながら垂直状にたちあがる。脚部は八の字状に開き、裾端部は外開きにやや尖り気味におさまる。ヨコナデによる仕上げで、杯部に調整時の凹状部が残る。

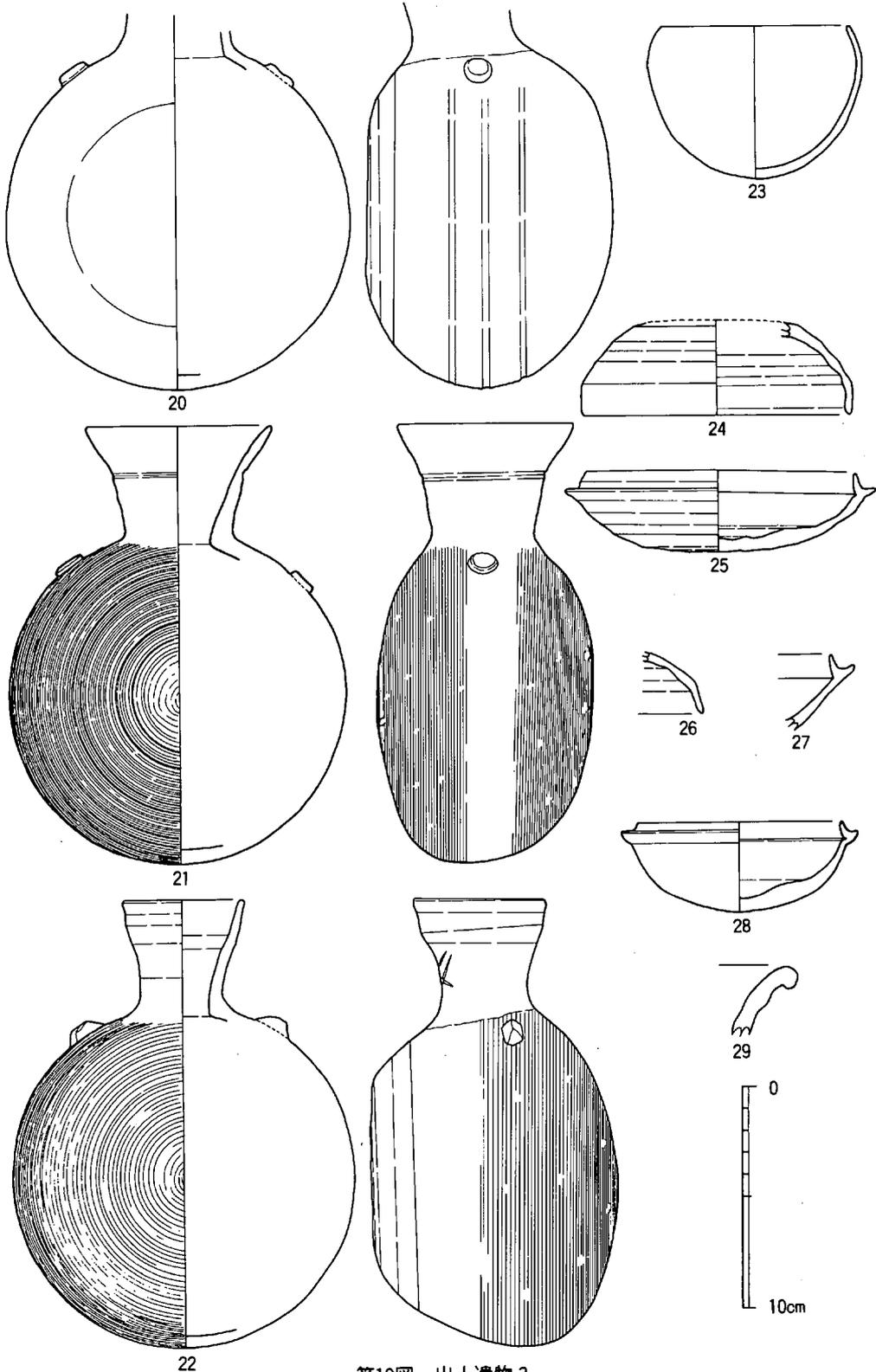
短頸壺 (15) わずかに外反気味に垂直にたちあがる口縁部をもち、肩部と胴部の境に鈍い稜をもつ。底部は丸く、 $\frac{1}{2}$ 強がへら削りのほかはヨコナデにより仕上げる。

長頸壺 (16, 19) 16は口頸部を欠く。三角形状の胴部をもち、肩部に浅い二条の沈線がめぐる。底部はへら削りで、他はヨコナデで仕上げる。19は完形の台付長頸壺である。脚部は八の字状に一度外反しながら内弯ぎみに開く。一端の広い長形状の透孔三孔が穿たれ、透孔下に一条の沈線がめぐる。胴部は肩部がよく張り、胴部境目と胴部中央に二条の沈線がめぐり、沈線間にへら状工具による刺突文がめぐる。頸部は外反しながら長くのび、口縁端部はわずかに尖り気味におさめる。頸部中央に浅い二条の沈線がめぐる。調整は、胴下半がへら削りのほかはヨコナデ仕上げである。

甕 (17) いくぶん扁平なタマネギ状の体部から、下端がよくしぼりこまれた頸部は上方へ強く外反してのび、段屈曲部からわずかに内弯し、端部がやや尖り気味の口縁部へつづく。体部には、肩部との境に二条、胴中央部に一条の沈線がめぐり、その間に円孔が一孔穿たれ、板状工具による刺突文がめぐる。頸部には二ヶ所に沈線がめぐり、縦位に板状工具による直



第9図 出土遺物2



第10図 出土遺物 3

線文が配され口縁部まで続く。

平瓶 (18) 肩はよく張っているが、底部は平底である。口縁部は外反しながらたちあがり、端部はやや内弯ぎみに丸くおさめる。肩部に基石状大でそれよりやや高い雑な小粘上塊を貼り付けている。調整は、底部をヘラ削りのほか、その上位はカキ目調整である。

提瓶 (20~22) 20は口頸部を欠く。器胴の一面は平坦で、他面は丸味をもつ。側面肩部に一对の基石状の扁平な貼り付けを有する。器胴の平坦部はヘラ削りが施され、他はヨコナデである。器胴中央に不鮮明な三条の凹状部がみられる。21の器胴は両面とも丸味をもち、頸部は外反し、口縁部はさらに外方に開いて端部を丸くおさめる。側面の肩部に一对の基石状の扁平な貼り付けを有し、他部は全面に同心円状のカキ目が施され、口縁下に一条の沈線がめぐる。22は器胴の一面は平坦で、他部は丸味をもつ。側面肩部に一对の山形の小块土塊が貼り付けられている。頸部は外反して開き、口縁部は内弯ぎみで端部は丸くおさめる。器胴の平坦な面はヘラ削りで、丸味をもつ面には内面に円盤貼り付け部が認められ、外面は同心円状のカキ目が施される。他部はヨコナデである。頸部に長さ2.4~2.8cm、巾6mmで、二条の平行線状のヘラ記号がみられ、一端をそれに平行にナデた状態がみられる。

土師器 (23) 二個体出土しているが、他の個体は細片となっており復元、図示できない。23は碗で、深い半円状の器形を有し、口縁部は内弯して端部を丸くおさめている。磨耗のため調整は不明である。図示できなかった他の個体は、23よりやや浅い器形になるらしい。

金環 (1, 2) 一对分二個出土しているがいずれも銅地金張りで、2は金箔が比較的良く残存しているが、1はほとんど残存していない。1は外法長径2.65cm、短径2.4cm、内法長径1.35cm、短径1.3cm、環の長径0.8cm、短径0.6cm、突合せ部巾0.3cmである。2は1と同様の順序で記せば2.5cm、2.25cm、1.4cm、1.25cm、0.7cm、0.55cm、0.2cmである。

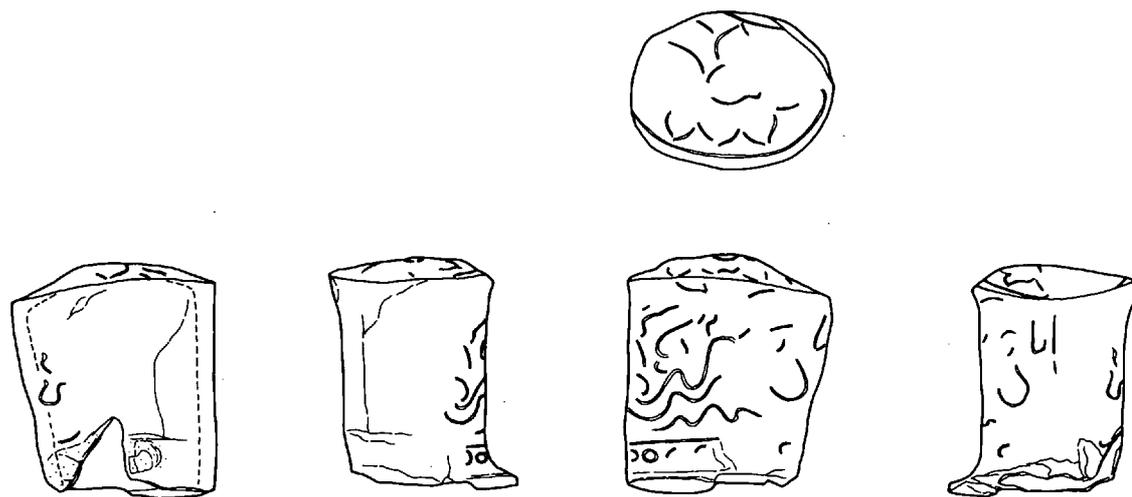
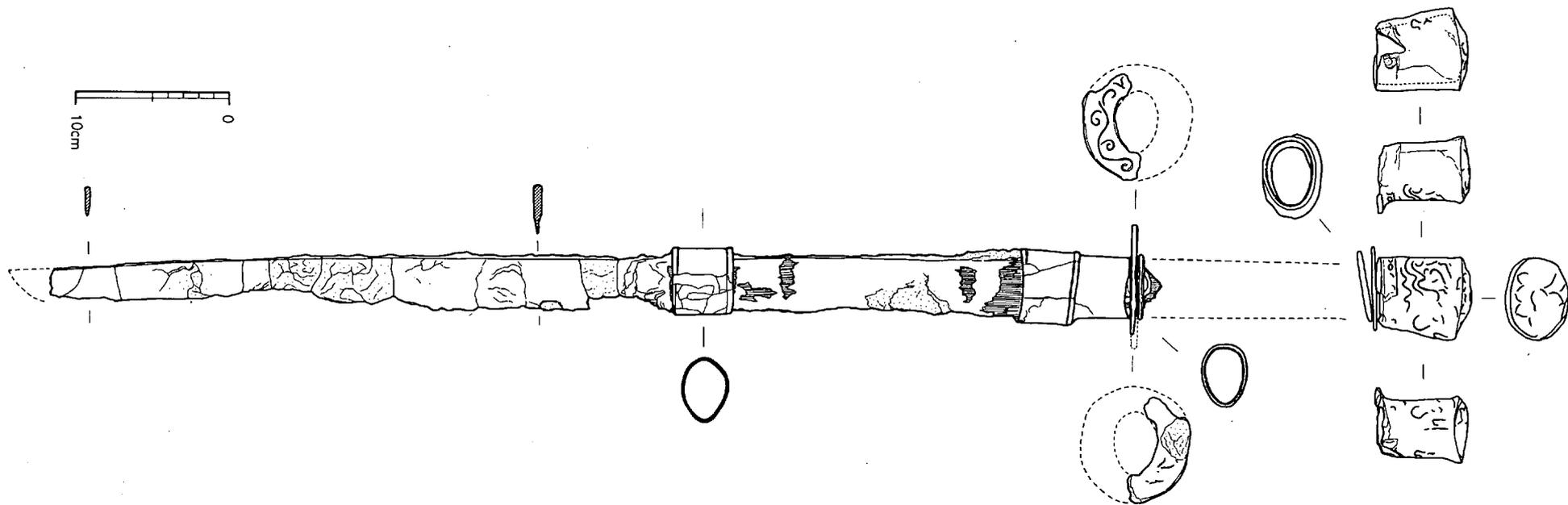
勾玉 (3) 灰褐色の滑石製である。頭部を欠損するが、残存器高2.8cm、頭部0.65cm、尾部厚0.5cm、孔部上面径0.25cmのやや小型品である。孔は二方向から穿たれているが、いずれも未貫孔である。一孔は折損した部位にみられる。

大刀 刀身の尖端部が欠失するものの、比較的良好的な残存状態で出土した。しかし取上げ時に数ヶ所で折損し、辛うじて残っていた柄間の木質部も粉々になった。現存全長93.5cmで、柄は出土時の状態から22.5cmと推計される。刀身は平造りで、身巾は3.6cmを測る。鞘金具間の刀身は錆ぶくれが著るしく、原厚を示しえない。鞘は一部に木質が錆着するのみで残存しないが、金銅の鞘口金具と鞘中金具が刀身に錆着する状態で残存している。鞘尻はみあたらない。柄には柄頭、柄頭の切羽、柄頭の縁金具、柄縁金具が残る。柄頭を除いては、いずれも金銅である。柄頭は鉄製で長さ6.2cm、巾は4.4~5.4cmで、頭頂面側がやや広がった形態を呈すが、中軸線に対しては非対称である。側面と頭頂面とは明確な稜をなしており、頭頂面はやや中央

表4 須恵器・土師器計測表

(単位 cm)

	器種	残存度	口径	最大径	器高	色調	胎土	焼成	ロクロ回転
1	杯蓋	完形	13.6		5.0	淡灰色	1~2mm大の砂粒	良好	右方向
2	杯蓋	完形	13.5		5.2	灰白色	1mm大の砂粒少量含	良好	右方向
3	杯蓋	完形	13.8		4.4	淡灰色	1mm大の砂粒少量含	良好	右方向
4	杯蓋	完形	11.1		4.2	暗灰~灰白	1~2mm大砂粒少含	やや軟質	右方向
5	杯蓋	80%残	10.3		3.5	淡青灰色	1mm大の砂粒少量含	良好	右方向
6	杯身	完形	12.4	15.0	4.5	淡灰色	1~3mm大砂粒少含	良好	右方向
7	杯身	完形	11.4	14.1	4.7	淡灰色	1~2mm大砂粒小含	良好	右方向
8	杯身	完形	9.4	11.5	4.1	淡灰色	1mm大の砂粒少量含	良好	左方向
9	杯身	完形	10.0	11.8	4.2	灰青色	1~2mm大やや多量	良好	右方向
10	杯身	完形	10.0	11.6	3.4	淡灰色	1mm大の砂粒少量含		左方向
11	杯身?	完形	$\frac{10.1}{10.7}$		3.2~3.7	淡灰色	1mm大の砂粒少量含	良好	右方向
12	壺								
13	高杯	90%残	12.1		13.8	青灰色	2~3mm大の砂粒少	良好	
14	高杯	90%残	13.8		7.7	淡灰色	1mm大の砂粒少量含	やや軟質	
15	短頸壺	完形	7.5	13.4	8.5	淡灰色	1~2mm大砂やや多	良好	右方向
16	長頸壺	口頸部欠損		14.2		青灰色	1mm大の砂粒少量含	良好	右方向
17	甌	90%残	$\frac{14.0}{15.2}$		17.4	青灰色	1~2mm大の砂粒少	良好	
18	平瓶	80%残	7.2	15.8	13.9	青灰色	1~2mm大の砂粒少	良好	右方向
19	台付長頸壺	完形	8.8	15.4	29.6	暗灰~灰青		良好	
20	提瓶	80%残		15.6	12.0+a	暗青灰色	1mm大の砂粒少量含	良好	左方向
21	提瓶	95%残	8.4	15.4	19.9	青灰色	1~2mm大砂粉含む	良好	
22	提瓶	90%残	5.5	15.6	20.4	青灰色	2~3mm大の砂粒含	良好	右方向
23	土師器碗		8.6		6.9	明茶褐色	精選された粘土	良好	
24	杯蓋	15%残	12.2		4.3?		1mm大の砂粒少量含	良好	右方向
25	杯身	90%残	12.2	14.2	3.7	灰白色	1~2mm大の砂粒含	良好	左方向
26	杯蓋								
27	杯身								
28	杯身	40%残	9.3		4.1	灰青色	1mm大の砂粒少量含	良好	左方向



第11図 出土遺物 4

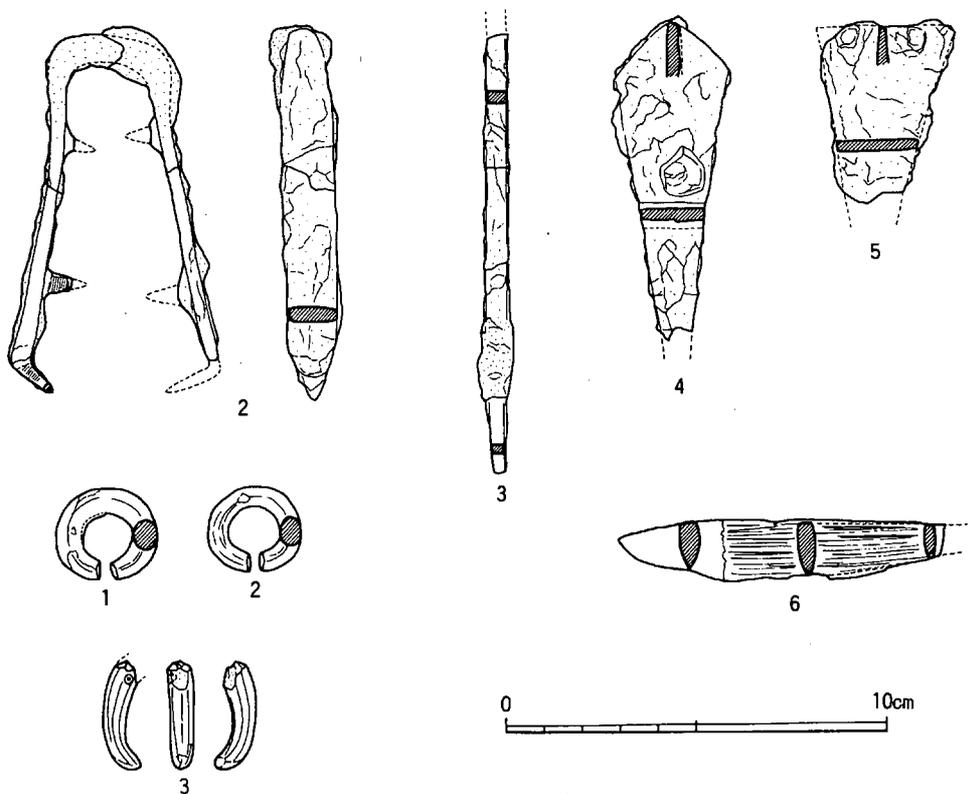
部がふくらみを有す。懸通孔はない。柄頭の厚みは0.4cm前後で、佩表面の一部が欠失し、内面に少量の砂を銹着しているが、現重量は135gである。鐔は半欠するが、ずんぐりした倣卵形を呈す無窓鐔で鉄製である。この柄頭と鐔には、銀象嵌の文様が施されている。柄頭は欠失部があり、また銹化により剝落、欠失しているが、頭頂面、佩裏面にかなりよく残存しており、佩表面と刃側の側面にも僅かながら認められる。頭頂面は残存状況から楕円形の平面形の稜線にそうように楕円の単線が巡っていたと推定され、その内側に小円を中心に数葉の花文がみられる。欠失部分の空間の拡がりから、八葉の花文と推定され、蓮子はないが形状からみて蓮華文と考えられる。佩裏面の文様については、現状では判然としないが、処理前のX線写真や現況から、柄頭縁には細長い長方形の線で画された内側に小単円がみられ、残余数とその間隔から八個前後と推定される。鐔は片側の文様は欠失のため不明だが、他方は唐草文である。

さてこの柄頭の型式は、いかに考えるべきであろうか。装飾付大刀のうち、環頭、頭椎を除く円頭、圭頭、方頭のいずれとも原定義からは断じ難い形状といえよう(註11)。平面形のみからすれば、いわゆる料理帽型の変形の方頭に類似するが、それらは本例より後出のものであり、また材質も銅製であるなど異質なもの(註12)といえよう。形状的に問題は残るが、鉄製の柄頭をもち、鞘口及び鞘中に鉄製でない筒金をもつ点、象嵌の施された柄頭、無窓鐔をもつこと、柄頭に懸通孔のないことなどは、鉄装円頭大刀、なかでも島根県松江市岡田山1号墳出土刀(註13)に類似した特徴をもち、あるいはそうした範疇のなかで考えるのが妥当であろうか。しかし柄頭の形状は異なるものであり、型式分類についてはここでは保留し、類例の増加と新分類が行われることをまちたい。

象嵌文様については、鉄装円頭大刀における亀甲繫鳳凰文(註9)とは異なるものである。懸通孔の周囲に弁をあしらい、花文を構成する例は比較的多いが、柄頭の頭頂部に施したのは奈良県天理市星塚古墳例(註15)のみであり、頭頂部ではないが亀甲繫文内に八弁の花文と鳥文を施した例は群馬県伊勢佐木市波志江町出土例(註16)が知られている。しかし本例の頭頂部における花文とは形状がやや異っており、本例を形状から蓮華文と推定した。側面の文様は不明確だが、簡便化した唐草文か竜文唐草(註17)とも考えられる。とすれば本例の象嵌文様は、仏教的色彩のつよいものとされよう。本例は大刀だが、馬具における仏教的要素をみる見解(註18)もだされており、大刀づくりにおいてもそうした要素とは無縁であるとはいきれないであろう。

いずれにしても本例の鉄装柄頭は、その形状、象嵌文様ともにこれまで類例のないものといえるであろう。

鉄鏃(3~5) 三个体出土しており、いずれも有茎である。3は尖根式で、鏃身部と茎部の一部を欠く。4は平根の三角形式のもので茎部を欠く。5は平根のノミ頭式で、やはり茎部



第12図 出土遺物 5

を欠いている。

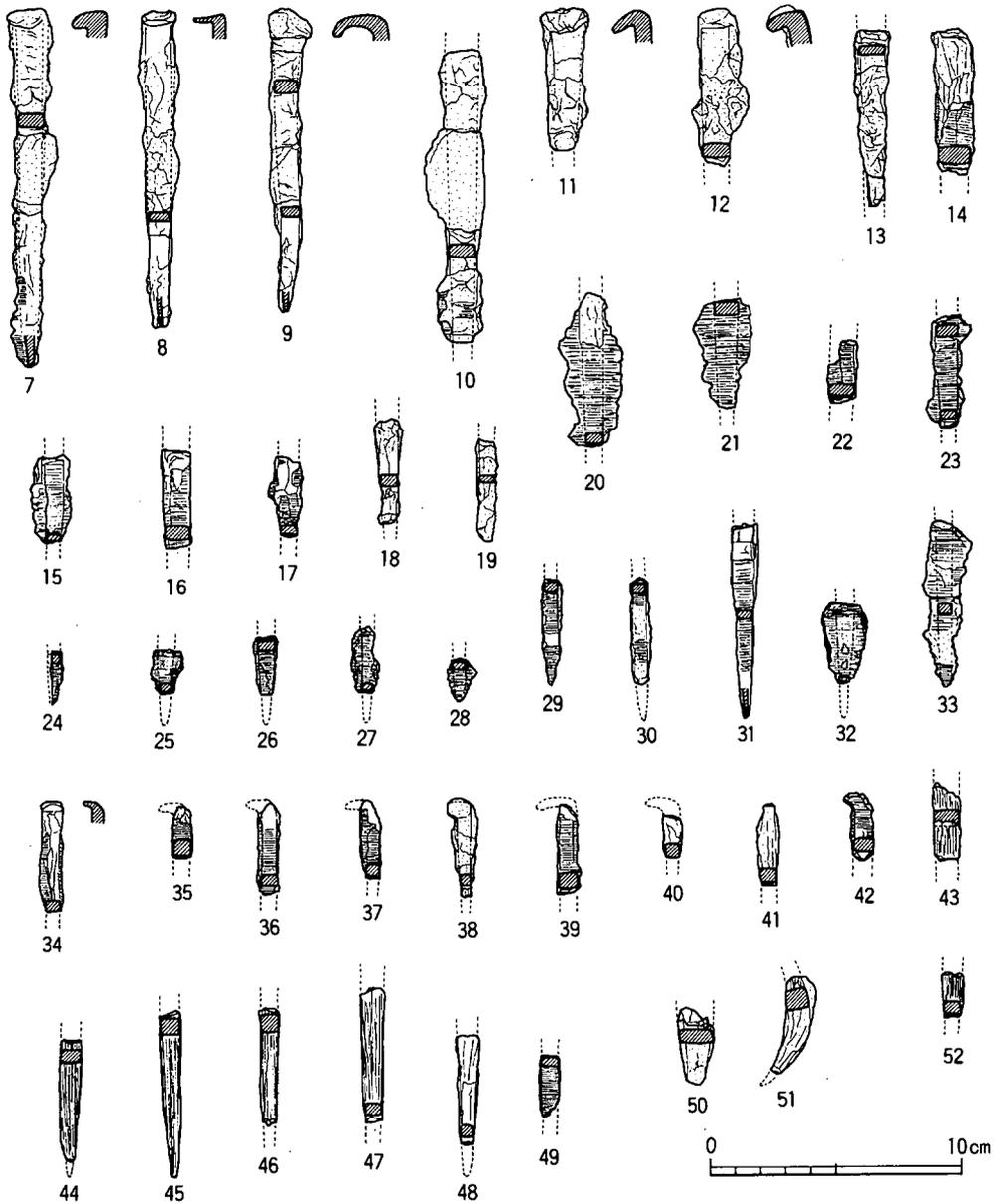
刀子（6） 茎の端部を欠く。刃長の短いもので、基部には木質の錆着が著しい。

馬具（2） 鏡上部金具が一個分出土している。本来一対となるべきものであるが、他方は破片も含めて存在しない。若干の欠損部もあるが、比較的残存状況は良い。鉾は先端部を欠くが片側に二個、計四個つけられている。下端部は一方を欠くが、残存部には木質が付着しており、鉾と共に木部に固定した痕跡をうかがわせる。

鉄釘（7～50） 細片を除き、可能なものはすべて図示した。錆化がすすんでおり、図示したものの中に接合できるものが含まれている可能性は多分に存する。大まかには二種類に分類される。一つは長さ12～13cm前後で、断面が長方形を示すやや大型のものと、他は全長10cm以内で断面が方形を示すものである。両者には出土状況の配置に規則性は認められず、混在して出土しているので、棺の使用部位による相違として捉えられよう。

鉄滓 出土総重量は290gである。石室内ではE号棺のあたりで出土しており、石室内の他の箇所からの出土はない。その他のものは、すべて前庭部からの出土であり、いずれも小片、小量単位で出土したものである。

鉄滓は、県北では相当数出土している（註19）が、県南では総社市上林の備中こうもり塚古



第13図 出土遺物6

墳（註20）、岡山市新庄下および津寺の境界に所在する高坪古墳（註21）について三例目を教えるものである。

出土した鉄滓は、新日本製鉄（株）大澤正巳氏によれば、「製練滓、鍛冶滓、鉄塊で製鉄の一貫作業を示すもの」と考えられている。

以上の出土遺物のうち須恵器は、形態、調整技法の特徴からみて、杯蓋A類、杯身A類、高

杯13など奥壁周辺部出土の遺物は、陶器（註22）でいうTK43併行期ないしそれよりやや後出のものを含むと考えられよう。一方、杯蓋B類、杯身B類など奥壁周辺部以外の遺物については、杯類が最も小型化し、宝珠つまみ出現期直前のものとして捉えられ、TK209よりわずかに後出のものと考えられ、県南の窯址でいえば亀ヶ原1、二子I期、宮嶮1、寒風A（註23）にほぼ該当するものと考えられる。

4. まとめにかえて

先述したごとく、工事期間が切迫していたため石室内のみの調査で終了せざるをえなかったが、判明したいくつかの問題にふれてみたい。

古墳の規模と構造

本墳は、三須丘陵西端の標高40余mの緑山南斜面に所在する径約16m前後の円墳で、横穴式石室を内部主体とする。石室は全長9.8m、玄室長6.2m、幅1.4～1.5mの左袖のもので、石室長に対しやや幅の狭い石室となっている。

本墳の所在する緑山には、尾根頂部を中心に北斜面を除く東、南、西斜面に計19基の古墳の所在が確認されており、一基を除き横穴式石室を内部主体としている。これら19基からなる緑山古墳群中には、石室規模において本墳と同等ないしそれ以上の規模を有するものが4基含まれている。それらの古墳は尾根頂部を中心に位置し、石室の構築状況などからみても本墳に先行する様相を示している。これに対し本墳は山麓端に近い斜面に存するなど、立地、規模、副葬品などの点からみて、それらより後出する時期の緑山古墳群の有力首長の系譜につながるものと考えられる。

古墳の築成と追葬の時期

本墳は、奥壁部周辺から出土した須恵器、とくに杯蓋を中心にした編年観から、六世紀後半に築造され、七世紀初頭頃まで数次にわたる追葬が行われたものと考えられる。最初の埋葬が行われたのち、しばらくの期間の空白があり、第二の埋葬から最終の埋葬にいたるまではあまり時間的間隔をあけぬ状態で、あいついで追葬されたものと考えられる。

被葬者の性格

本古墳の被葬者の性格を考えるにあたって重要なのは、大刀の存在である。この大刀は、鉄装の柄頭をもち、その形式はこれまでに類例をみないものであり、また柄頭と鐔に施された銀象嵌のうち柄頭頭頂面の文様は蓮華文と考えられるもので、儀仗刀と考えられるものである。この大刀の成分分析から、大澤正巳氏は「鋼素材には砂鉄製練による二酸化チタン (TiO₂) の痕跡が認められない」ことから、「大陸産の可能性が強いもの」とされている。とすれば、そうした大刀を佩用していた被葬者は、六世紀後半期における緑山古墳群に葬られた有力首長である

ことは容易に察せられよう。また一方で、銀象嵌で飾られた蓮華文は仏教的モチーフと考えられるものであり、興味深い。高梁川右岸の総社市秦には、県内最古の飛鳥期創建とされる秦廃寺があり、また三須丘陵南の都窪郡山手村には、素弁蓮華文軒丸瓦を焼いたとされる末の奥窯址の存在が知られている。本墳からは、直線距離で前者へ6km、後へ1.5kmの近地点である。仏教受容の基盤が、本墳が築成される頃にはすでに何らかの形で醸成されつつあったとは考えられないであろうか。

いま一つ注目したいのは、鉄滓の存在である。これらの鉄滓は、「製鉄の一貫作業を示すもの」と考えられている。本来廃棄さるべきこれらの「鉄カス」を副葬していることは、本墳に葬られた被葬者が何らかの形で鉄生産にかかわりをもっていたことの証左であると考えてよからう。本墳から南東へ1km離れた丘陵の南に所在する古墳時代後半期のこの地方最大の前方後円墳である備中こうもり塚の被葬者も鉄滓を有しており、吉備地方における有力首長層が漸く活発化しだした鉄生産の掌握に多大の力点をおいていたものと推察される。

調査にあたっては、総社市南溝手 竹川建設(有)には天井石の除去作業をはじめ種々の便宜をはかっていただいた。また総社市中央 藤井整形外科病院 藤井康道氏には多忙な時間にもかかわらず大刀のレントゲン撮影をお願いし快諾していただいた。その結果、象嵌文様の存在が判明し、その後の保存処理に大きな指針となった。

調査及び報告書作成段階においては、岡山県教育委員会文化課 河本 清・平井 勝、岡山県史編纂室 葛原克人・伊藤 晃、(財)元興寺文化財研究所 西山要一、奈良国立文化財研究所 町田 章、穴沢暁光、馬目順一、滝沢芳之、西川 宏氏らに多大の御教示をうけた。末筆ながら記して謝意を表します。

註

- 註1 岡山大学考古学研究所『三須丘陵遺跡分布調査報告』 1976年
- 2 緑山古墳群については、岡山県遺跡台帳 総社市編における名称、番号を踏襲した。このため、その後の調査で古墳でないことが判明したものは、欠番扱いとした。
- 3 同墳は、従来270mと称されてきたが、昭和57年秋の岡山県史編纂室による空撮の結果、全長286mに及ぶことが判明した。
- 4 岡山県遺跡台帳による。註1文献では256基と報告されている。
- 5 西川 宏『吉備の国』 学生社 1975年
- 6 註5に同じ
- 7 本墳およびその周辺の3基ほどは、稲荷山古墳群の一支群の可能性も否定できないが、本文中で述べた理由から判然としないため、ここでは慣習的に緑山古墳群として扱う。
- 8 23号墳については、内部主体が判然としない。

- 9 4号墳と6号墳の間の平坦地は、現在墓地となっているが、現存する4基のありかたからみて墓地部分にもう1基存在した可能性も考えられる。4、6～8号墳は、総社市史編纂事業として墳丘及び石室の実測が継続中である。
- 10 6、9、11号墳が該当すると考えられる。これら3基は盗掘されており、遺物は不明だが、使用石材は横長の小石材を多く用い、持送りが著るしく、石室形態からみてやや古相の横穴式石室と考えられる。
- 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』42、43 1966年
- 11 神林淳雄「鉄装大刀と鉄装柄頭」『考古学雑誌』第30巻第4号 1940年
「金銅装大刀と金銅装柄頭」『考古学雑誌』第29巻第4号 1939年
末永雅雄『日本上代の武器』 木耳社
- 12 穴沢咏光氏の御教示によれば、料理帽型の銅製の柄頭は関東で4例ほどあるが、時期的には7世紀中葉以降とのことである。
- 穴沢咏光「郡山市牛庭出土の銀作大刀」『福島考古』20号 1979年
- 13 島根県教育委員会「島根県文化財調査報告書」第5集 1968年
- 14 橋本博文「亀甲繫鳳凰文象嵌円頭大刀について」『常陸梶山古墳』 大洋村教育委員会 1981年
- 15 小島俊次「星塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第7輯 1955年
- 16 東京国立博物館「国立博物館図版目録」古墳遺物篇（関東Ⅱ） 1983年
- 17 馬目順一氏の御教示による。
- 18 小野山 節「花形杏葉と光背」ミュージアム 2月号 1983年
- 19 大澤正巳「岡山県下の古代製鉄研究」『稼山遺跡群Ⅱ』 久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979年
- 20 葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35 岡山県教育委員会 1979年
- 21 平井 勝「高坪古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』50 岡山県教育委員会 1982年
- 22 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」 平安学園考古クラブ 1966年
- 23 西川 宏「備前における須恵器の編年的研究」『岡山県私学紀要Ⅱ』1966年
「古代中世における手工業の発達 窯業（5）瀬戸内」『日本の考古学』Ⅳ巻 河出書房 1967年
- 葛原克人・池畑耕一「二子御堂奥窯址」『岡山県埋蔵文化財調査報告第Ⅱ集』 岡山県教育委員会 1974年
- 伊藤 晃「新林（宮嶺）窯址の調査報告」 邑久町教育委員会 1975年
- 山磨康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27 岡山県教育委員会 1978年



1. 緑山遠景



2. 緑山から南を望む (中央が作山古墳)

図版 2



1. 立木伐開後の状況（南から）



2. 石室天井石の状況（西から）

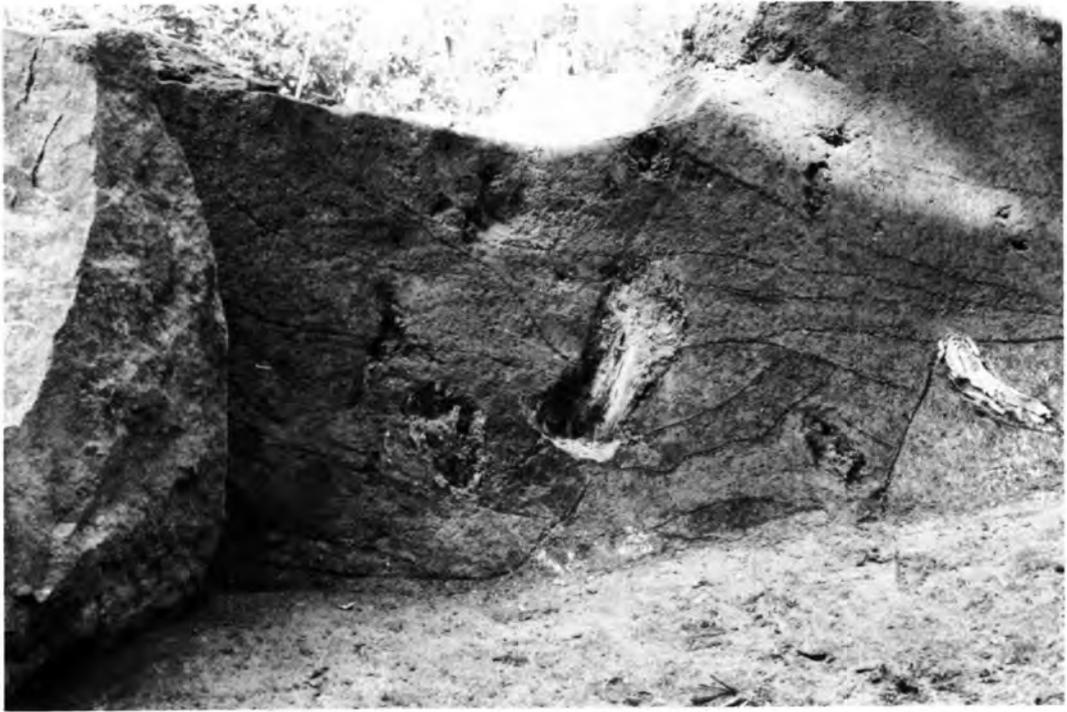


1. 石室天井石の状況（南から）



2. 石室天井石の清掃後の状況（東から）

図版 4



1. 奥壁周辺の築成状況（東から）



2. 左側壁周辺の掘り方



石室内掘り上がり状況（南から）



1. 石室掘り上がり状況（北から）



2. 奥壁



石室掘り上がり後の各部状況



1. 開口部から奥壁を望む



2. 袖部



遺物出土状況 (上・南から, 下・北から)



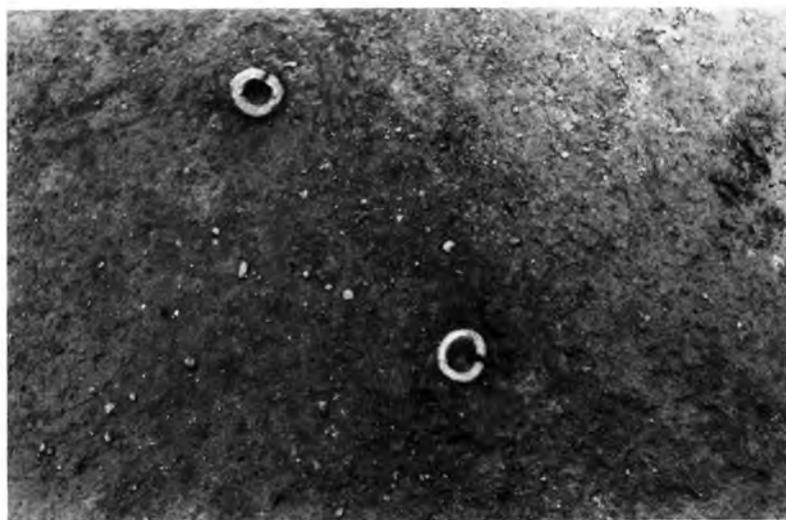
1. 奥壁周辺 遺物出土状況



2. 奥壁周辺 遺物出土状況と棺台石



1. 大刀出土状况



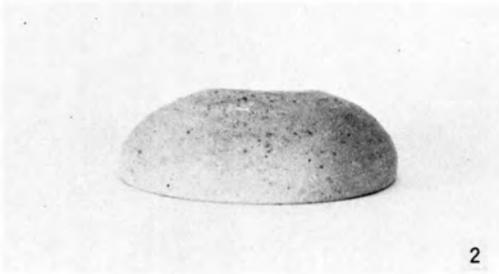
2. 金環出土状况



1. B号棺周辺の遺物出土状況と棺台石



2. D号棺周辺の遺物出土状況と棺台石



出土遺物 1

図版14



13



17



14



16



18

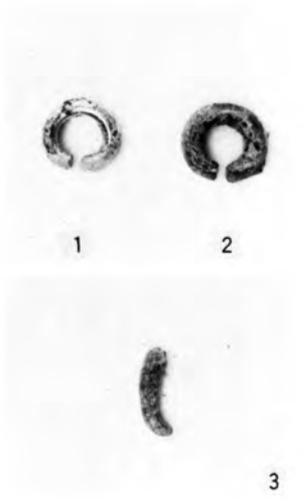


21



19

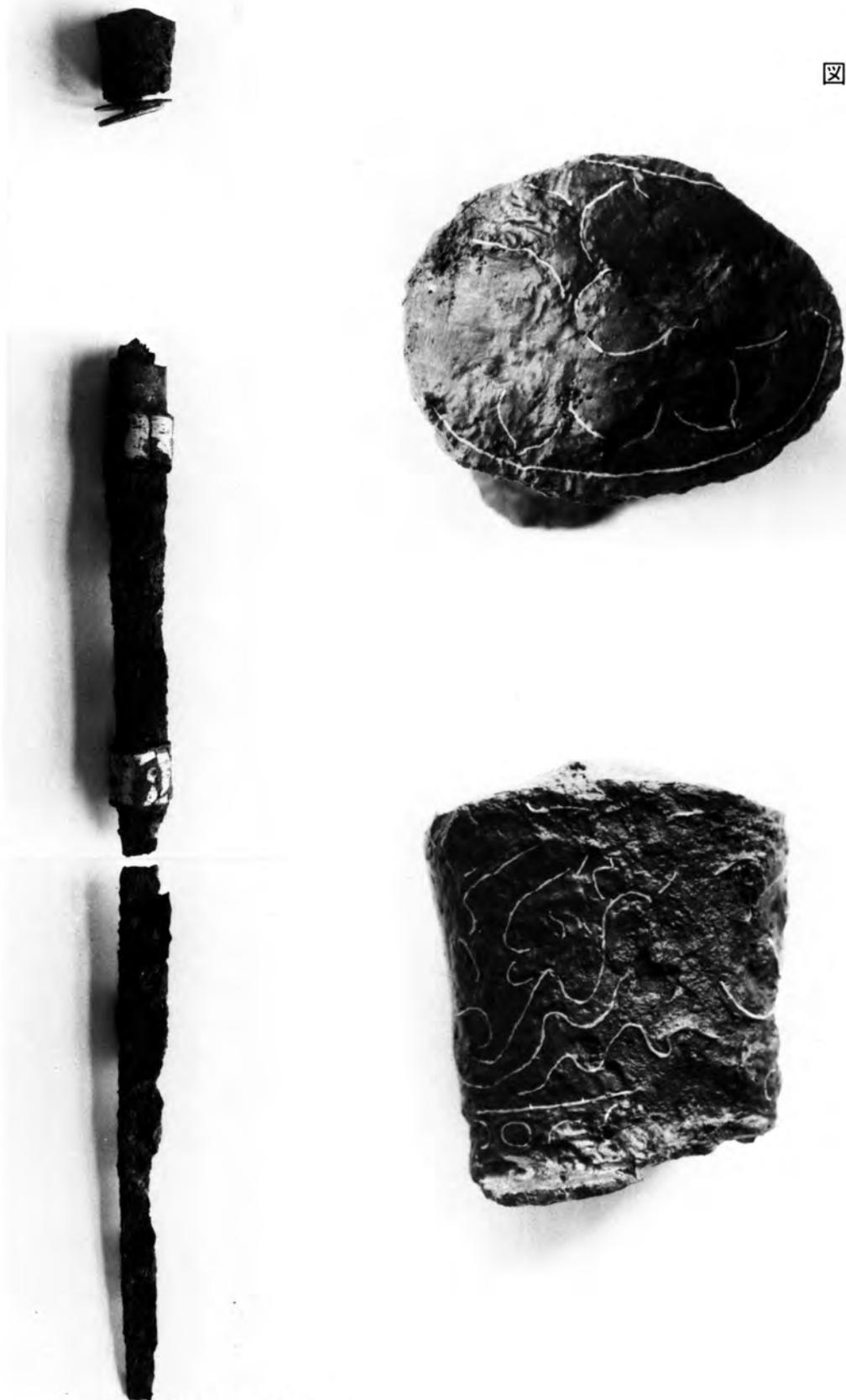
出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4



銀象嵌文様を施した鉄装大刀

緑山17号墳出土鉄滓及び鉄装大刀破片の金属学的調査

大澤 正己

1. 概 要

緑山17号古墳は、総社市上林389番地に所在し、6世紀後半から7世紀初めに比定される左袖式の横穴式石室古墳である。この古墳の前庭部と羨道及び玄室内より鉄滓が検出された。また、銀象嵌の蓮華文をもつ鉄装大刀が出土している。この鉄滓の一部と鉄装大刀の復元できない破片の調査依頼を総社市教育委員会より受けたので、鉬物組成や化学組成及び走査型電子顕微鏡による金属学的調査を行なった。その結果を報告する。

- (1) 鉄滓はチタン分の高い製錬滓と鍛冶滓及び鉄塊酸化物である。羨道部先端と前庭部右側より出土した鉄塊は鉬物組成に、チタン (Ti) と鉄 (Fe) の酸化物であるウルボスピネル (Ulvöspinel : $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) とイルミナイト (Ilmenite : $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) が析出しており、二酸化チタン (TiO_2) が高目 (20~30%前後) であることが予測できる。

また、前庭部左側及び玄室内の出土鉄滓は、前者の鉬物組成にヴスタイト (Wüstite : FeO) とフェアライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、それに鉄酸化物のゲーサイト (Goethite : $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$)、後者に製錬反応初期の排出物で鉄酸化物が晶出していないフェアライト単独が確認された。これら鉬物組成の組合せは鍛冶滓組織である。また、玄室内の奥壁から4.5m離れた中央から出土した塊は鉄酸化物であった。

この様に調査遺物は、製錬滓・鍛冶滓・鉄塊で製鉄の一貫作業を示すものである。供献鉄滓であろう。

- (2) 鉄装大刀破片は、すでに金属鉄の残留がなく酸化物になっており、熱処理に関する情報を得ることができなかった。刃金は折り返し鍛錬が十二分に加わっており、非金属介在物 (鋼中に残った酸化物の混入物) は鍛伸方向も横断方向にもまったく検出されず、非常に清浄な均質な低炭素鋼であることが確認できた。介在物不在のため、素材の原料が鉄鉱石か砂鉄かのみきわめができなかった。しかし俗にいう百練刀という刃金をつくるに際して加熱・鍛打を幾度も繰返しているため、脱滓・脱炭の効いた清浄な鋼となり、銀象嵌加工のできる程度の硬さであったことが推定できる。

この様に丁寧な造りである該刀が国産か将来品か、また何処の鍛工人の製品かといった追求課題が山積するが、これらを明確化する裏付けデータを今回の調査結果からは得ることができなかった。

以上の調査結果から、緑山17号墳周辺の何処かで砂鉄製錬の操業がなされ、還元された鉄素材の鍛造鍛冶までの一貫作業が実施されていたことが推定される。これらの鉄滓・鉄塊の副葬は西日本の古墳時代にみられる風習の一つである供献鉄滓であろう（註1）。

被葬者は製鉄集団と何らかの形でかかわりのあった人物であったと考えられる。

鉄装大刀は、十二分に練り上った低炭素鋼に銀象嵌の蓮華文があるところから儀装刀で大陸産の可能性が強いものと考えられる。また、大陸産であれば鍛打脱炭の具合からみて塊煉鉄（註2）より沙鋼法（註3）による産物とみなされよう。

2. 調査試料及び方法

(1) 供試材

第5表に鉄滓と鉄装大刀破片の履歴及び調査項目を示す。

第5表 供試材の履歴及び調査項目

符 号	試 料	出 土 位 置	調 査 項 目	
			顕微鏡組織	SEM*分析
20-821	砂鉄製練滓	羨道部先端①	○	
20-822	鍛錬鍛冶滓	前庭部左側②（イ）	○	
20-823	砂鉄製練滓	前庭部右側③（ロ）	○	
20-824	鍛錬鍛冶滓	玄室内 ④	○	
20-825	鉄塊（酸化）	玄室内（奥壁から4.5m離れた中央）	○	
20-826	鉄装大刀破片	玄室内	○	○

* SEM (Scanning Electron Microscope) 走査型電子顕微鏡

(2) 調査方法

- ① 肉眼観察
- ② 顕微鏡組織

鉄滓は水道水で十分に洗滌して乾燥後、二分割して片方の中核部を検鏡試料とした。試料はベークライト樹脂に埋込んだ後、エメリー研磨紙（コランダム、 Al_2O_3 に磁鉄鉱を含んだ黒灰色の結晶の粒末砥石を膠質の接着剤で塗布している）の#150, #320, #600, #1,000を使用して荒研磨し、次にアルミナ（ Al_2O_3 ）粉末溶液（アルミニウム塩の沈澱物を焼成して作られた六方晶形細粒粉末の水溶懸濁液）をバフ布に注ぎながら被研面を仕上げ構成鉱物の同定を行った。アルミナの粒子は 5μ と 10μ を2回に分けて使用している。

鉄装大刀破片を鉄滓に準じた方法で試料調製を行った。

- ③ 走査電子顕微鏡（SEM：Scanning Electron Microscope）による分析

この装置の原理は、電子線を絞って試料面に照射し、ここより発生する電子線によって情報を得るものである。特性X線像とエネルギー分散型半導体検出器を使って分析を行なっている。

3. 調査結果

図版18に鉄滓の鉱物組成を、図版19に鉄塊酸化物及び鉄装大刀破片の組織を、また、図版21にSEMによる面分析とエネルギー分散分析との調査結果を示す。

(1) 緑山17号墳羨道部先端出土鉄滓 (20—821)

肉眼観察：黒色飴状を呈する流出滓の製錬滓である。裏面の局部に炉材粘土を附着する。破面は気泡を散発するが緻密である。大きさは実際は $37 \times 30 \times 10$ mmであるが、提供を受けた時点で $19 \times 18 \times 10$ mmの5gに割ってあった。

顕微鏡組織：図版18に示す。鉱物組成は白色多角形状のウルボスピネル (Ulvöspinel : $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) と白色針状及び短片状のイルミナイト (Ilmenite : $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、これに一部灰色木ずり状のフェアライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) と基地の暗黒色ガラス質スラグから構成されている。この組織を示す鉄滓は二酸化チタン (TiO_2) が高目で20~30%程度含有されている(註4)。この結果から製鉄原料は砂鉄と結論づけられる。

(2) 緑山17号墳前庭部左側出土鉄滓 (20—822)

肉眼観察：表裏ともに赤褐色を呈し、一部に木炭痕を残すやや粗鬆な鉄滓である。破面は外皮側は黒褐色で鉄分の多いことを示し、中核部は黒色で気泡を有している。大きさは $30 \times 23 \times 10$ mmで、重量は10gある。1個体分である。

顕微鏡組織：図版18に示す。鉱物組成は白色粒状の少量のヴスタイト (Wüstite : FeO) と、淡灰白色で点状に連なった金属鉄の酸化物であるゲーサイト (Goethite : $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$)、これに灰色短柱状のフェアライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) と基地の暗黒色ガラス質スラグからなっている。鍛錬鍛冶滓で加工鍛冶に際して排出されたもので二酸化チタン (TiO_2) は1%以下を示すであろう。

(3) 緑山17号墳前庭部右側出土鉄滓 (20—823)

肉眼観察：表皮は淡黄黒色を呈し、粗鬆さの少ない鉄滓である。裏面は木炭痕と気泡を残し、色は同色である。破面は黒黄色に微小な気泡が散在する。大きさは $30 \times 20 \times 13$ mmで重量は12gであった。

顕微鏡組織：図版18に示す。鉱物組成は図版18の20—821と同じく、ウルボスピネル (Ulvöspinel : $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$) とイルミナイト (Ilmenite : $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$)、これに基地部の暗黒色ガラス質スラグから構成されている。砂鉄製錬滓である。

(4) 緑山17号墳玄室内出土鉄滓 (20—824)

肉眼観察：表裏ともに赤褐色で木炭痕を有するが左程凹凸をもたない鉄滓である。破面は黒色で微小気泡を発している。大きさは30×20×5mmで重量は10gであった。1個体分の小塊である。

顕微鏡組織：図版18に示す。鉱物組成は淡灰白色で多角形及び棒状を呈するフェアライト (Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) 単独で、これに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成されている。この組織を示すものは鍛冶滓の初期段階で溶出されたところに多くみられる。例えば椀形鍛冶滓の底部の組織に認められる(註5)。なお鉄鉱石を原料とする製錬滓にもフェアライト単独を晶出するが、その場合はフェアライトがもう少し成長していて短柱状になっている。

(5) 緑山17号墳玄室内(奥壁から4.5m離れた中央部)出土鉄塊酸化物(20-825)

肉眼観察：凹凸の少ない表皮が茶褐色を呈し、これにヒビ割れを走らせた塊である。破面は茶褐色で鉄滓にみられる気泡がなく、一部に鉄錆を発している。鉄塊の酸化物である。大きさは42×25×25mmで重量は30gであった。

顕微鏡組織：図版19に示す。組織は金属鉄の酸化したゲーサイト (Goethite： $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$) である。酸化が進行しているので組織による情報は得ることが出来なかった。古墳内には、鉄滓以外にこうした小塊鉄の供献例もありうる(註6)。

(6) 緑山17号墳玄室内出土鉄装大刀破片(20-826)

肉眼観察：全体が黒褐色に酸化した破片であるが、一部にまだ磁性を残している。60×27×3.2mmで重量は11.6gであった。鍛伸方向及びこれに対して直角方向にテクニカッターで剪断すると断面は、幾度も鍛接した重ね鍛えの痕跡が認められた。

顕微鏡組織：図版19に示す。酸化を受けていて金属鉄は残留せず、金属組織の観察はできなかった。また鍛伸方向と直角方向を研磨して非金属介在物を捜したが、鍛打回数が多くなされて非金属介在物は完全に絞り出され、二方向共に認めることが出来なかった。図版20には大刀破片の厚み方向全部を撮影した組織である。幾回にも加えられた重ね鍛えの様子が読みとれる。

SEMによる面分析及びエネルギー分散分析：鍛伸方向の顕微鏡試料について分析を行なった。結果を図版21に示す。面分析の走査X線像が示すように鉄(Fe)にのみ輝点が集中しており、わずかに硅素(Si)が存在するが他元素の介在は認められない。また、エネルギー分散分析結果をその下のスペクトル図、分析結果(Concentration)、及びOxide(酸化物としての)のヒストグラムで示している。

検出された元素は鉄(Fe)と硅素(Si)のみである。鋼中に含有される不純物は硅素(Si)以外はまったく認められない。この純度の高さを考慮すると、原料素材は製鋼段階で脱滓を行なったと予測される。塊錬鉄系であれば酸化鉄-硅酸塩の共晶組成のフェアライト (Fayalite：

2FeO・SiO₂) が残留する筈である。沙鋼法による鋼を鍛打したものと考えられる。

なお、加熱・鍛打回数の積み重ねからみて鋼表面からの脱炭も多かったであろうと考えられる。そのため沙鋼法で0.8%前後の炭素量であっても0.2~0.3%程度のレベルまで低下したものと考えられる。刀としての鋭利性は炭素量が0.5%前後あった方が熱処理(焼入れ、焼もどし性)効果の点から有利であるが、緑山17号墳出土の鉄装大刀は、実用性より儀装性を重視した造刀法が採られたものと予測される。

4. おわりに

緑山17号墳出土の鉄滓は砂鉄製錬滓と鉄製品最終加工時の鍛錬鍛冶(加工鍛冶→小鍛冶)において排出される鍛錬鍛冶滓で、これに小鉄塊が伴っていることが明らかになった。緑山17号墳古墳の被葬者は6世紀後半から7世紀初めにかけて、何らかの形で鉄生産にかかわりのあったものと考えられる。

緑山17号墳古墳の所在する総社市は、鉄の貢納を示す最古の木簡資料が検出された伝飛鳥板蓋宮の調査資料の「**⊕**白髪マ五十戸、**⊕**賊十口」に表示された備中国窪屋郡真壁郷(現岡山県総社市真壁)に近いところでもある(註7)。木簡は7世紀中葉においてもクワ或いはスキの貢納がなされ、鉄生産が緑山17号墳埋葬後も続けられていたことを裏付けている。

総社市内および周辺における他の古墳供献鉄滓例は、こうもり塚古墳(註8)や高坪古墳(註9)がある。緑山17号墳を含めて3古墳は6世紀後半から7世紀初めが比定されている。こうもり塚古墳の鉄滓はまだ調査していないが、高坪古墳出土鉄滓は鍛錬鍛冶滓であった。総社市内の古墳の被葬者達は鍛冶にかなりのウェイトを置いた人物達ではなかったかと考えられる。

この様に鉄生産におおいに関係があったろうとみられる緑山17号墳古墳の被葬者に副葬された蓮華文の銀象嵌鉄装大刀は、当地の産物というよりは大陸将來品の伝世品と考えたい。鋼素材には砂鉄製錬による二酸化チタン(TiO₂)の痕跡が認められないからである。ただし、最近津山市内の築瀬古墳群(註10)や狐塚(註11)、東蔵坊遺跡A・B両地区の住居址(註12)、アモウラ遺跡住居址(註13)から鉄鉱石を製錬した際の排出鉄滓が検出され、同じく津山市押入西遺跡の古墳時代後期の住居址より鉱石系鉄塊等が確認されているので(註14)、鉱石製鉄の鉄製品を全面的に否定できない情勢にあることを述べて筆をおくことにする。

註

註1 大澤正己「古墳供献鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集——たたら研究会25周年記念論文集一』たたら研究会 1983刊行予定。古墳に納められた鉄滓や鉄塊の出土例が149例(9月15日の時点で150例)確認されている。6世紀中頃を境にして古くは鍛冶滓、新しくは製錬滓である。

2 塊煉鉄。鉄鉱石を比較的低い温度(1,000°C前後)の固体状態で、木炭を用いて還元した産物

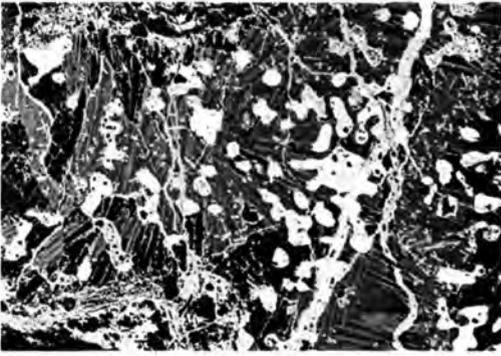
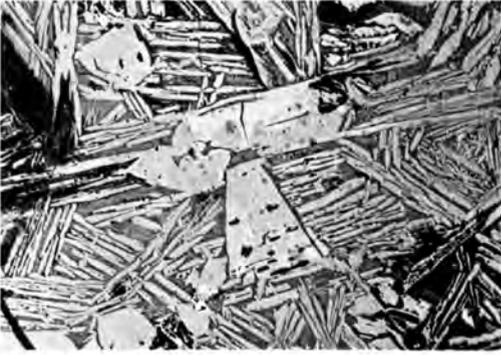
であり、ほとんどC, Si, Mn, S, Pらの元素を含まない。但し組織は粗くやわらかく、孔隙中に鉱石自身に存在した幾多の酸化物が夾雑しあい、その主なものは酸化第1鉄(FeO)と酸化鉄-硅酸塩の共晶組成(Fayalite: 2FeO・SiO₂)である。塊煉鉄の性質は、柔軟で一定の温度下で鍛造して造型ができ、同時に鍛打することによって酸化物の夾雑物をおし出すことができ、材質性能を改善することができる低温固体還元法、塊煉法と称され、鑠鉄、熟鉄或いは海綿鉄とも呼ばれているが、一部では塊煉鉄は生鉄(鉄鉄)沙成の熟鉄と区別する。

春秋末期と戦国初期の鍛造鉄器は、材質調査からみて塊煉鉄であるといわれている。

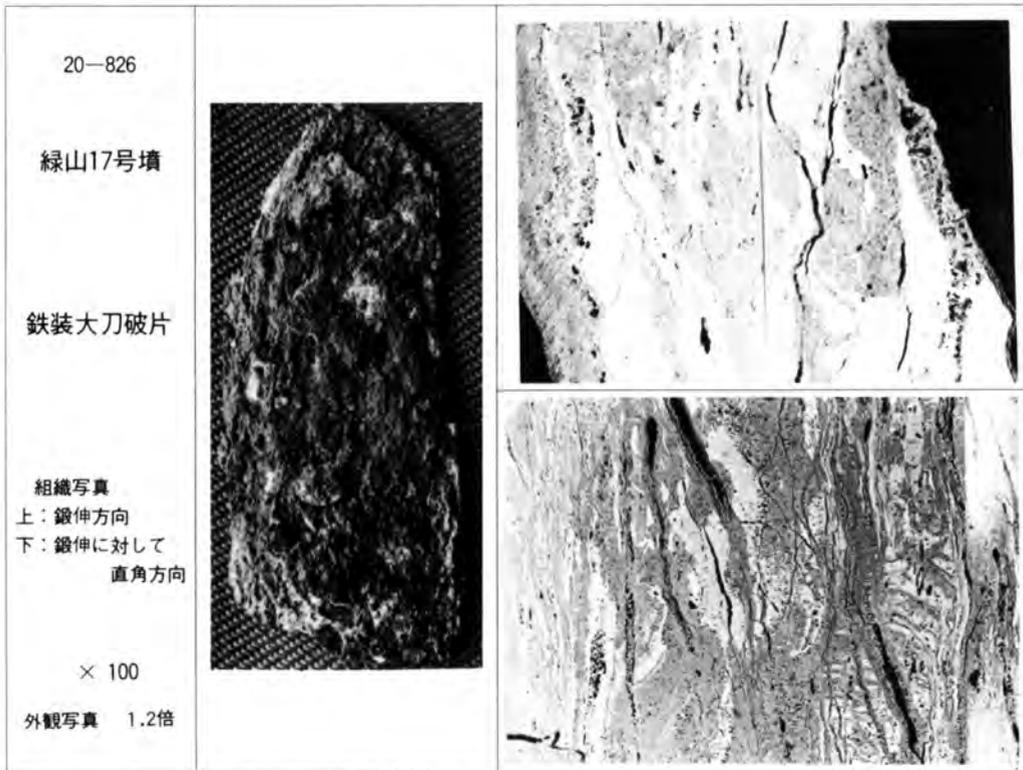
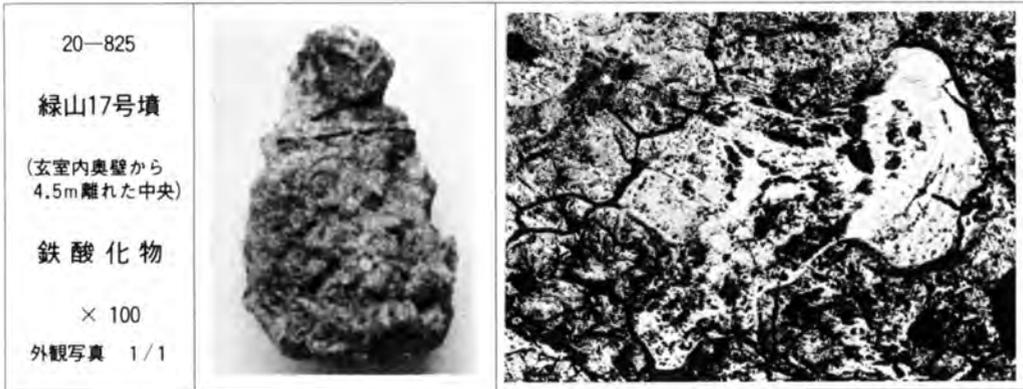
「中国冶金簡史」による。

- 3 沙鋼法。鉄鉄を加熱溶解し、空气中で攪拌脱炭(酸化による)して鋼とする。中国の前漢代に発明された製鋼法である。
- 4(1) 大澤正己「岡山県下の古代製鉄研究」『榎山遺跡群』Ⅱ久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980
- (ロ) 大澤正己「大蔵池南製鉄遺跡を中心とする製錬滓、鍛冶滓の検討」『榎山遺跡群』Ⅳ上掲書と同じ 1982
- 4-(1)は落山古墳羨道部出土鉄滓において、また大蔵池南製鉄遺跡出土鉄滓においてウルボスピネルとイルミナイトを折出したものの二酸化チタンは20~30%台を示している。津山市綾部緑山製鉄炉1号炉(7世紀前半~中葉)の鉄滓の一部にも同一鉱物組成を示すものが確認されている。後日報告予定。
- 5 大澤正己「馬場遺跡出土の鉄滓・砂鉄調査」『馬場遺跡』(新潟県佐渡郡祖川町北片辺馬場遺跡発掘調査報告)祖川町教育委員会 1983
- 上記報告書で21-822鉄滓の組織に示している。
- 6(1) 大澤正己「金武古墳群乙石C群3号墳及び吉武E群3・4・5号墳出土鉄滓の調査」『県道大野二犬線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集 福岡市教育委員会 1980
- (ロ) 大澤正己前掲書①において福岡市柏原古墳群B-2号墳より40点の鉄塊が供献されており、その1点について調査した結果を述べている。
- 祭祀において鉄を供献する記録は延喜式に四時祭の三枝祭、大忌祭、風神祭などにある。これらとの係わりは後日の研究課題にしたいと考えている。
- 7 岸俊男「最新の古代史料と吉備」『古代吉備国論争(下) 34-59頁 山陽新聞社 1979
- 8 葛原克人「備中こうもり塚古墳」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告35 岡山県教育委員会 1979
- 9 平井勝「高坪古墳」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告50 岡山県教育委員会 1982
- 柳瀬昭彦氏経由で鉄滓の提供を受けた。結果の一部を註①に示している。
- 10 大澤正己「築瀬古墳群出土鉄滓の調査」『築瀬古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集 津山市教育委員会 1983
- 11 津山市押入に所在する6世紀末から7世紀初頭に比定される工房跡。鍛冶炉と共に鉄塊、鍛冶滓、製錬滓、鉄鉱石などが出土している。津山市教育委員会が調査を実施。分析調査資料は未発表。
- 12 安川豊史「東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第9集 津山市教育委員会 1981 出土鉄滓の分析結果は未発表。
- 13 津山市教育委員会より提供を受けた鉄滓の分析結果である。未発表資料。
- 14 大澤正己「押入西遺跡出土鉄滓及び鉄塊の金属学的調査」『押入西遺跡』津山市埋蔵文化財調査報告 第14集 津山市教育委員会 1983

図版18

<p>20-821</p> <p>緑山17号墳 (羨道部先端出土)</p> <p>砂鉄製錬滓</p> <p>× 100 外観写真 1 / 1</p>		
<p>20-822</p> <p>緑山17号墳 (前庭部左側出土)</p> <p>鍛錬鍛冶滓</p> <p>× 100 外観写真 1 / 1</p>		
<p>20-823</p> <p>緑山17号墳 (前庭部右側出土)</p> <p>砂鉄製錬滓</p> <p>× 100 外観写真 1 / 1</p>		
<p>20-824</p> <p>緑山17号墳 (玄室内出土)</p> <p>鍛錬鍛冶滓</p> <p>× 100 外観写真 1 / 1</p>		

供献鉄滓の顕微鏡組織



供献鉄塊酸化物及び鉄装大刀の顕微鏡組織



緑山17号墳出土鉄装大刀

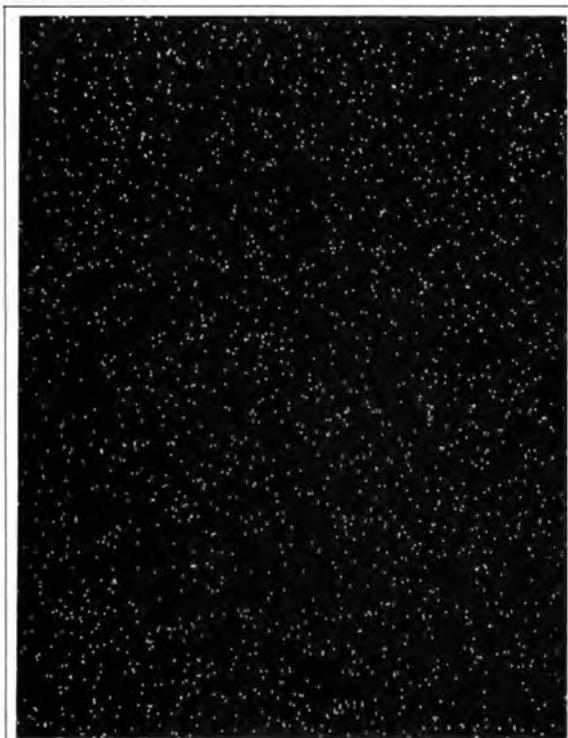


鉄装大刀破片厚み方向の顕微鏡組織

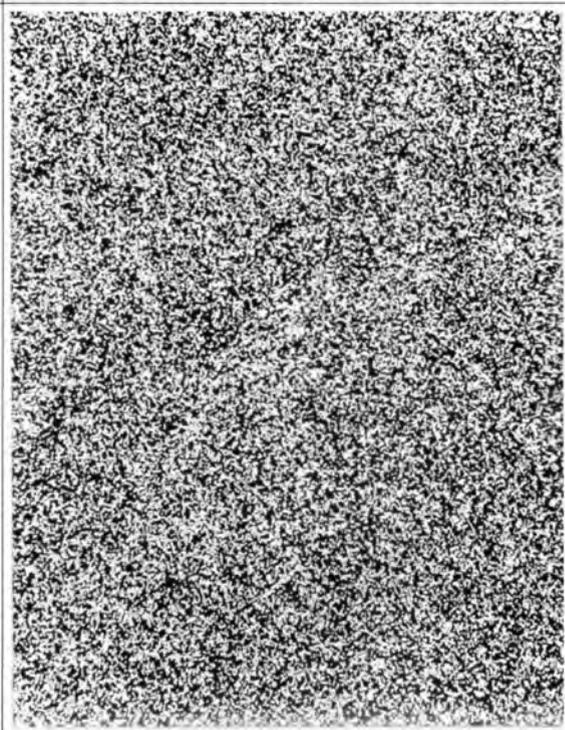
鍛伸方向 × 100

鉄装大刀組織の走査X線像

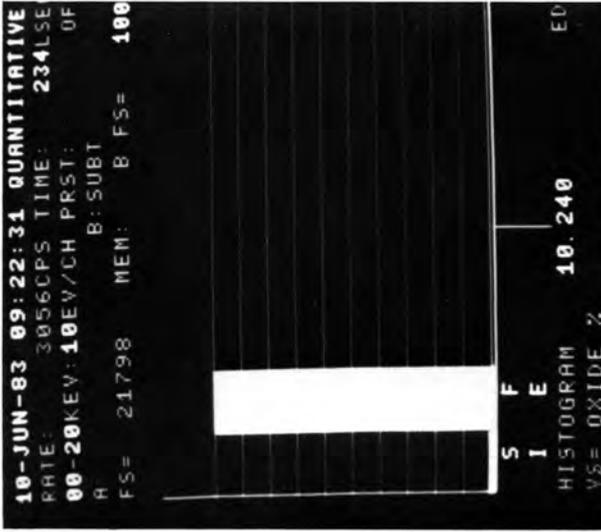
10 μ



二次電子像



Fe



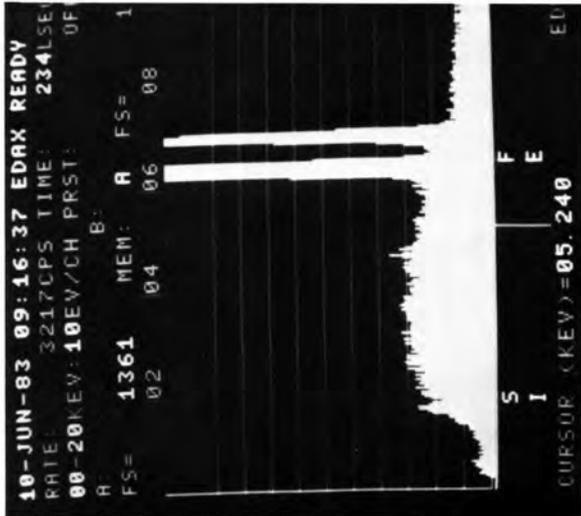
Oxideのヒストグラム

KV=25. TILT=30. TKOFF=15.
 BK0 PT1= 1.2 BK0 PT2=13.1
 NOST
 10-JUN-83

CONCENTRATION

	MT. %	AT. %	OX. %	%S. E
SIK	0.64	0.81	1.38	3.3
FEK	76.66	48.78	98.62	0.1
0	22.70	50.41		
	100.00			

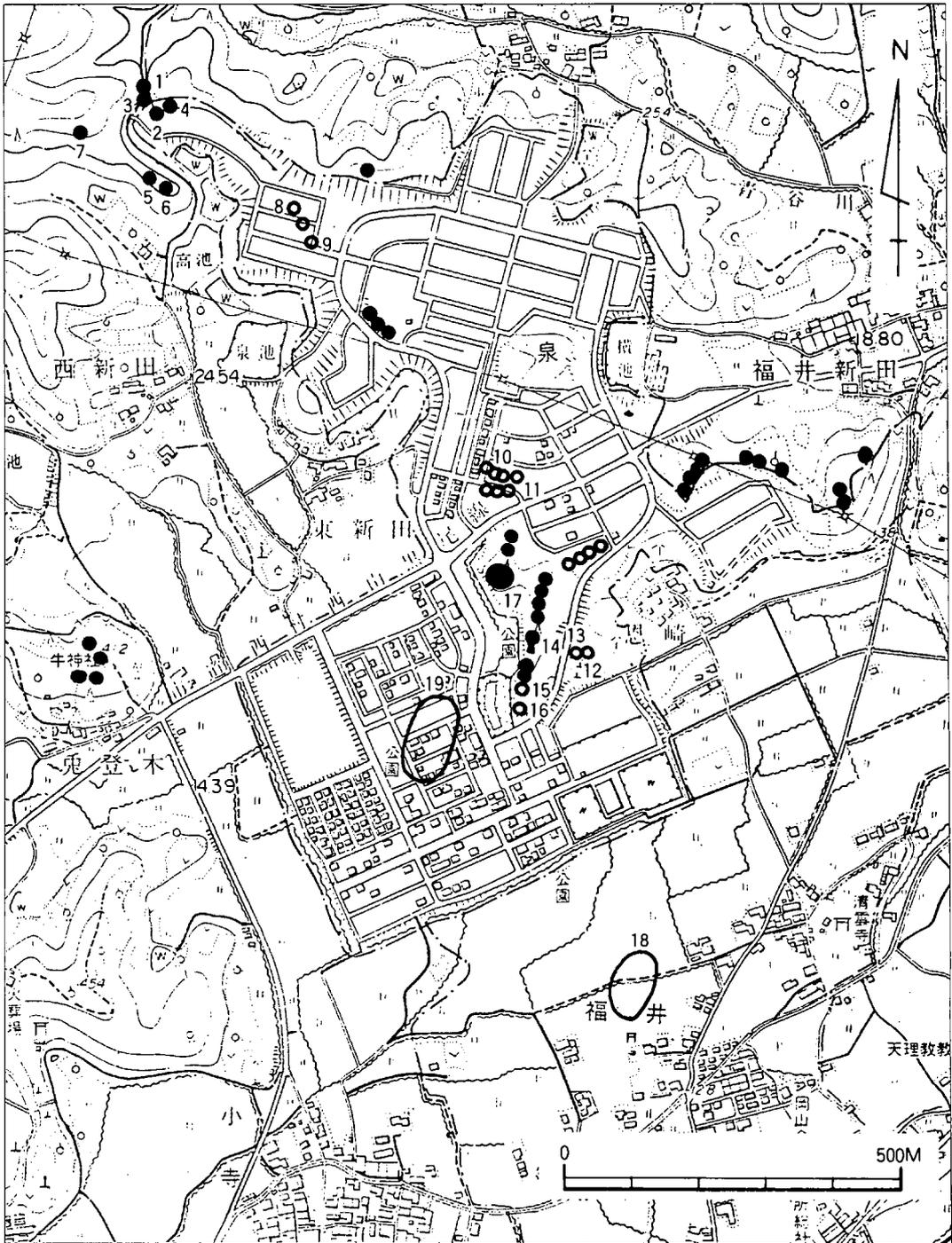
分析結果



同一視野からのスペクトル

走査X線像部分の分析結果

第2章 すりばち池3号墳



第14図 すりばち池3号墳周辺地形図及び古墳分布図 (S=1/10,000)

1. すりばち池3号墳 2. すりばち池1号墳 3. すりばち池2号墳 4. すりばち池4号墳 5. 赤坂1号墳 6. 赤坂2号墳 7. 西の奥1号墳 8. 高池1号墳 9. 高池2号墳 10. 梅谷2号墳 11. 梅谷4号墳 12. 恩崎1号墳 13. 恩崎2号墳 14. 福井8号墳 15. 福井10号墳 16. 福井11号墳 17. 尼子山古墳(東新田3号墳) 18. 神明遺跡 19. 泉ニュータウン建設に伴う発掘調査Ⅶ地点(註文献)(○印は消滅した古墳を示す)

1. 調査にいたる経緯

すりばち池3号墳は、昭和44年ごろ具体化されるにいたった西山丘陵の大部分を含む団地造成計画（現在の泉ニュータウン）に伴う予定地内の分布調査の際に、その存在が知られていたものである。この古墳の周辺には他に3基が存在するが、これらは造成の範囲から除かれて保存がはかられていた。昭和56年度になって、古墳の直下を通る市道兎登木・藪田支線が、大雨時などの崩落により国道180号線が通行止となった際の迂回路として拡幅されることになり、施工範囲内にこの古墳の大部分が含まれることが明らかになった。古墳そのものは、戦後まもなく現在の道路をとりつける際に、墳丘と石室の半分ほどを失っており切通しとなっている崖面は崩壊がつづいていた。そのため、設計の変更をおこなって保存したとしても、法面は改めて切りなおす必要があつて現状を保つことすら著しく困難であるので、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

2. 位置と環境

すりばち池3号墳は、総社市小寺1188番地に所在する。古墳は、総社市街地の中ほどにある国鉄吉備線東総社駅からほぼ北1kmの丘陵上に位置している。この丘陵は、吉備高原の南縁となる標高400mにおよぶ新山の山塊（註1）から派生し、青谷川に沿って南東方向にのびる。この付近は、泉ニュータウンの造成などにより地形の変貌は著しい。

すりばち池古墳群は、泉ニュータウンの造成着手前の分布調査時に知られたもので、4基からなっている。まず1号墳は、板状の石材を小口積みにした竪穴式石室を主体部とするが天井石を一部動かされている。2号墳は、発掘調査をおこなった3号墳に接して南側に位置するが墳丘は低平で主体部は未掘のため不明である。4号墳は、横穴式石室の石材が抜き取られたものと思われる。これらは、いずれも径10m程度の円墳である。市道をはさんで西側の小尾根先端近くに、低平な墳丘をもつ赤坂1・2号墳、やや離れて横穴式石室を主体部とする西の奥1号墳が存在し、これらも墳丘の径が10mほどの円墳である。

小寺から西山にかけての丘陵上には、60基あまりの古墳の存在が知られているが、泉ニュータウンの造成に伴ってそのうちの12基が調査されている（註2）。調査されたものは、いずれも稜線上に立地し、低平な墳丘をもつ径10mほどの円墳である。内部主体については、欠失したものもあるが、竪穴式石室・箱式石棺・木棺直葬などが存在した。そのなかには、円筒埴輪や古式の須恵器を共伴したものが含まれており、5世紀末ないし6世紀初頭の築造と考えられている（註3）。緑地となって保存をはかられているものについても、ほぼ共通した立地・規模を示していることからみて、この丘陵上の古墳築造のピークは5世紀代を中心とする時期である

とみてよいだろう。これらの中にあつて尼子山古墳（註4）は、墳丘の規模において傑出した存在である。未調査のため内部主体は不明だが、径36m・高さ5mの円墳で、稜線上の頂部に立地する。前方後円墳は、西山19・20号墳、福井8号墳の3基があるが、いずれも全長20mほどのものである。これらの前半期に属するものに対して、横穴式石室を主体部とする古墳が全体に占める割合は著しく低くなる。具体的には、すりばち池3・4号墳、西の奥1号墳などがあげられるにすぎない。このようなありかたのほかに、青谷川を朔上したやや奥まった谷に面して20基あまりの横穴式石室を主体部とする円墳からなる塔坂古墳群が存在している。そのなかには、墳丘の径が20m、石室全長が10mに近いものも含まれるが、出土遺物が明らかでないためこまかな時期は不明である。このことは、古墳時代のある時点でこの地域が新たに墓域となったことの結果と言えるかもしれない。

日誌抄

昭和56年（1981年）

- 2月22日（曇） S=1/20で、すりばち池2・3号墳の地形測量。
- 24日（晴） 伐採および崖面での検出作業。断面では床面になると思われる小円礫が認められ、石室の長軸方向で切られているものと思われた。
- 25日（曇） 崖面の検出作業を継続する。礫床を画すると思われる仕切石を認める。現状では玄室の長さは2.5mほどをはかる。
- 26日（曇） 墳丘表土剥ぎ、および周溝確認のための断面観察。降雪のため、午前中で作業を終える。
- 27日（晴） 切通し面に、羨道部の側壁と考えられる石材が検出された。
- 3月3日（曇） 墳丘表土剥ぎ。降雨のために午前中で作業中止。
- 4日（晴） 墳丘表土剥ぎ後、清掃・写真撮影。主体部の掘下げを開始する。
- 5日（晴） 周溝断面での検出作業、主体部の掘下げ。石室の左側壁が現われはじめる。
- 6日（晴） 主体部の掘下げ。埋積土中より須恵器・甕の破片（遊離）出土。周溝は、南側の開口方向では認められない。
- 10日（晴） 主体部の掘下げ。須恵器杯・蓋など出土。副葬品の須恵器は、礫床面よりわずかに上にある。奥壁部分の掘りかたを断面で検出する。
- 11日（晴） 主体部掘り下げは、ほぼ礫床面まで達する。トレンチを設定し、周溝の検出をおこなう。
- 12日（晴） 石室掘りかたを検出し、一部掘下げをおこなう。
- 16日（晴） 石室割付。

- 3月17日(晴) 須恵器実測, 取りあげ。
18日(晴) 礫床面で鉄器(刀子) 2点出土。
19日(晴) 石室実測。小玉等出土。
20日(曇) 礫床面の清掃。紡錘車等出土。
23日(晴) 奥壁付近に鉄鏃出土。
24日(曇) 各部分の補足調査, および周辺を清掃, 写真撮影。
4月6日(曇) 器材の搬出。

3. 調査の概要

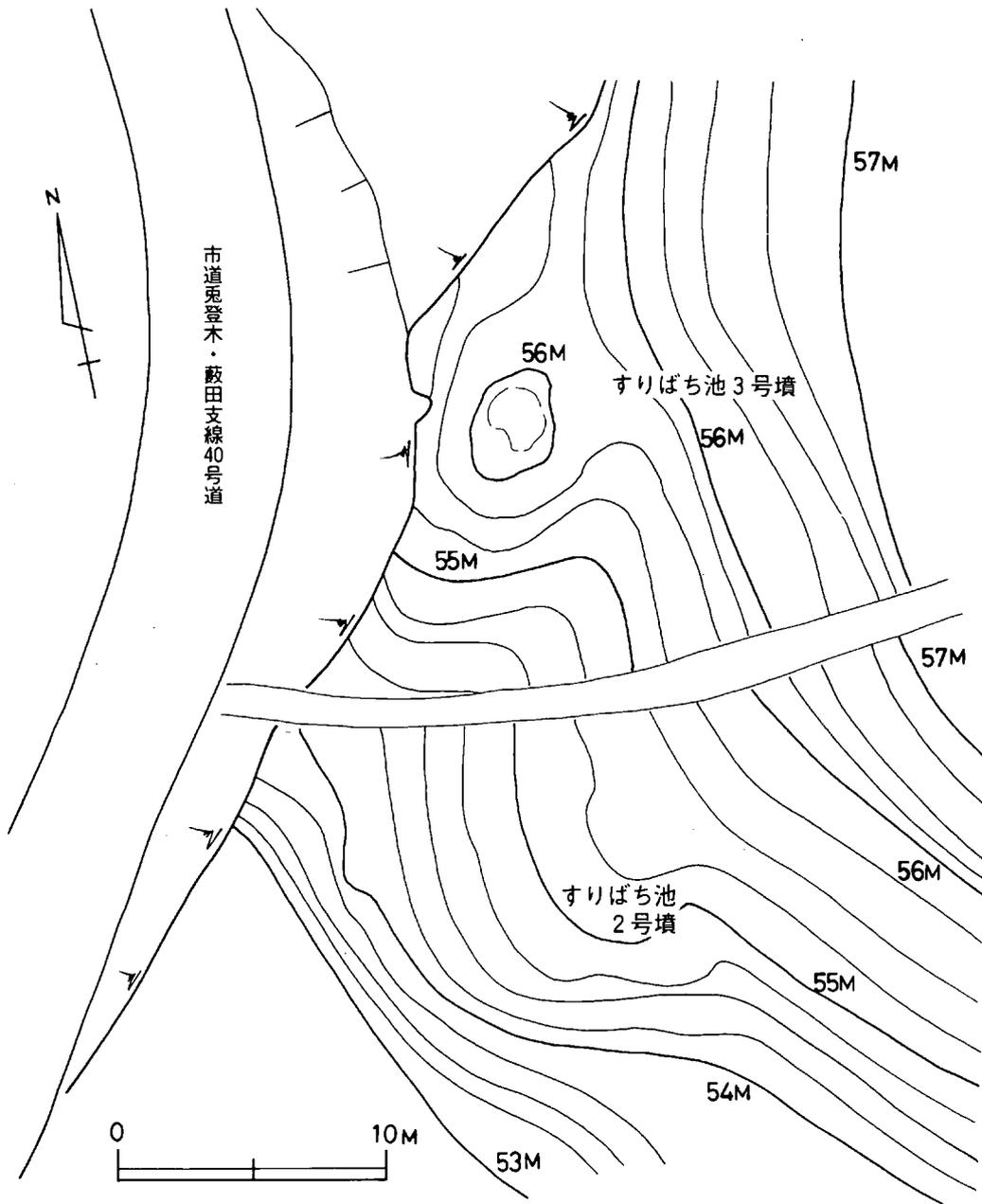
(1) 立 地

すりばち池3号墳は、標高247mの秋葉山から南東に向けて派生する。標高50mほどの低丘陵につながる鞍部のやや南に偏って存在する。古墳の立地する丘陵の鞍部は、今回拡幅されることになった道路がつけられたことによって切り離され、そのために古墳は墳丘および石室のほぼ半分が失われ、さらに土砂が流出をつづけているため崖の上にかろうじて張りついているというべき状態にあった。伐開がおこなわれた時点では、道路側の切通し面に石室石材の一部と床面と思われる小円礫が同一レベルで散見でき、残存した墳丘の東半部は、周溝がかなり埋没しているが、墳丘をとりまくように存在しているものと思われた。

(2) 墳丘および周溝

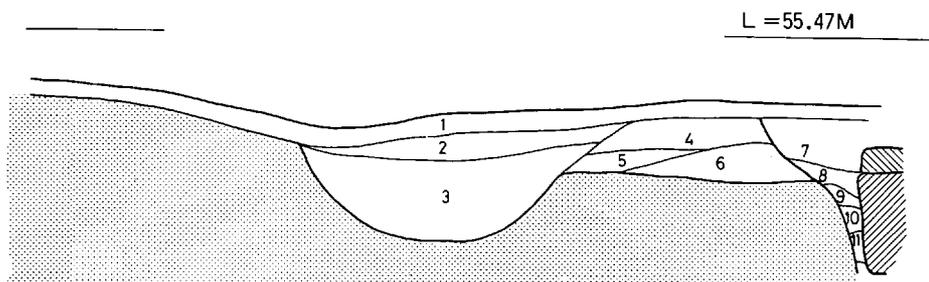
墳丘については、末端部が工事により生じる法面よりもさらに外へひろがるため、切通し面(Sec. 1)および丘陵の傾斜方向に平行に設定したトレンチ(Sec. 2)の2ヶ所で土層を観察するにとどまった。そのため墳端は、前記2ヶ所での断面観察と、発掘前の墳丘測量の結果などを参考に求めざるを得ないが、墳丘の形態については円墳とみてよいだろう。墳丘の規模は石室の残存部のありかたや前記の土層観察から径は約10m、高さは、天井石が失われ、さらに切通しとなったのちの封土の流出が著しく、もはや墳頂部は存在しないため、残存する石室の規模から2ないし2.5m程度ではなかったかと推定するにとどまる。

墳丘の築造の状況は、傾斜面から鞍部となる位置に、旧地表面を岩盤の上20~30cmぐらいまで掘りくぼめて石室の床面をつくっており、これはSec. 2の10層に腐植土層が認められることから明らかである。また、Sec. 2の8・9層には部分的ではあるが腐植土のまざるものとそうでないものが厚さ5cmずつほどの互層となるところが見出され、叩きしめをおこなった痕跡と考えられる。なお、Sec. 1では明らかな腐植土層を見ることができないが、これは墳丘を盛りあげる前に整地をおこなったためかとも思われるが、Sec. 1~2間が未掘であったため断定は困難である。

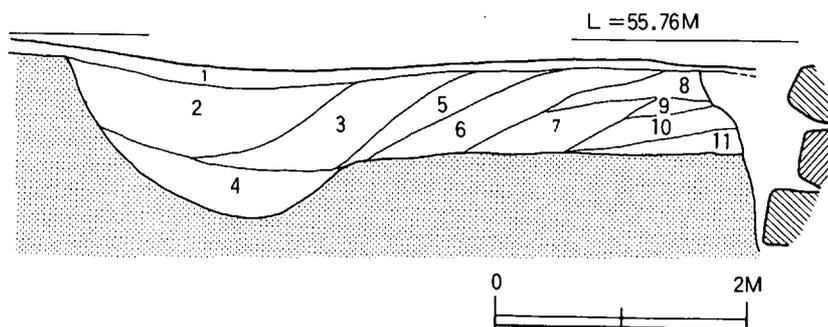


第15図 墳丘測量図 (S = 1/200)

周溝については、調査前の状況および断面の観察によって、幅2m・深さ1mほどのものであったと考えられる。また、切通し面の開口部より下では、周溝の存在を追及しえなかったが、これはちょうどその部分が道のため損われていたことにもよるが、古墳が丘陵の緩傾斜面から鞍部にかかる部分に立地することから、周溝は斜面の上方、つまり古墳の東ないし北東方向から円弧を描くようにめぐらされ、末端は、傾斜にしたがって徐々に深さを減じて消失するよ



1. 表土 2. 灰黄色砂質土 3. 黄茶色砂質土 4. 灰茶色砂質土 5. 灰黄色砂質土 6. 灰褐色砂質土
7. 茶灰色砂質土 8. 淡灰色砂質土 9. 茶褐色砂質土 10. 灰茶色砂質土 11. 淡灰黄色砂質土



1. 表土 2. 黄褐色砂質土 3. 暗黄灰色砂質土 4. 灰黄色砂質土 5. 黄茶色砂質土 6. 灰黄色砂質土
7. 灰茶色砂質土 8. 茶黄色砂質土 9. 淡灰色砂質土 10. 暗茶灰色砂質土 11. 灰黑色砂質土

第16図 墳丘及び周溝断面図 (S = 1/60)

うであったものと考えることが可能である。

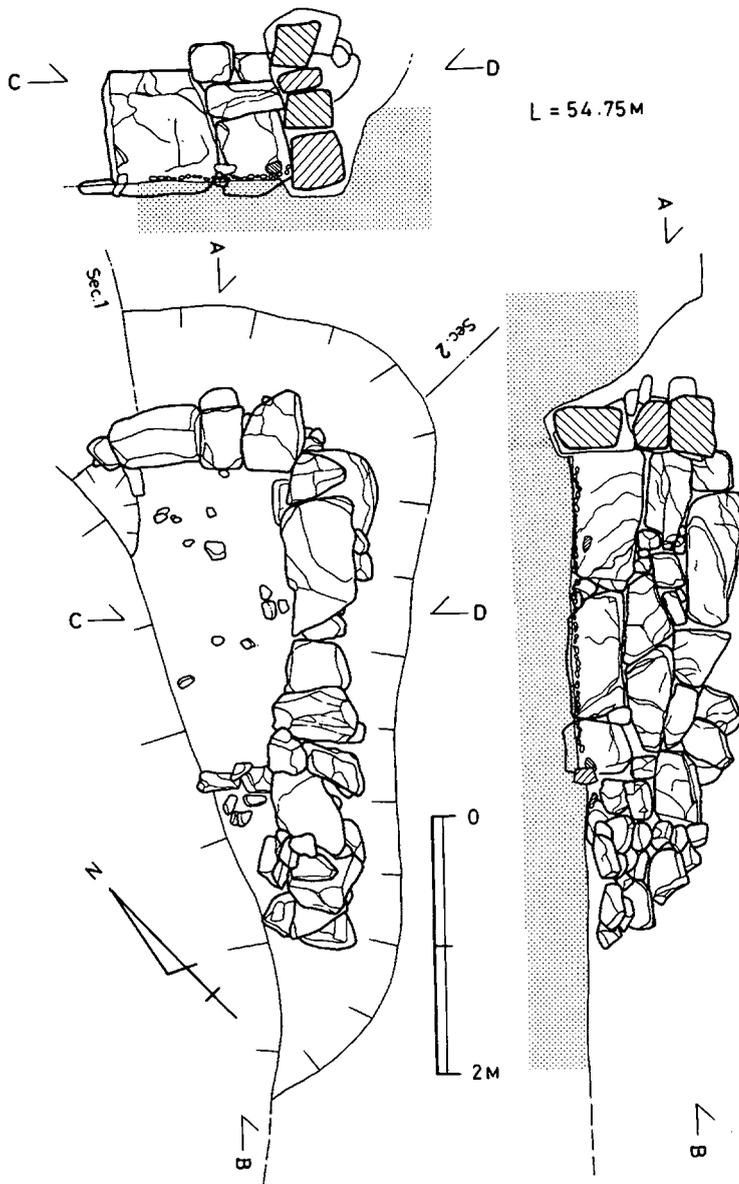
(3) 石室

石室は、天井石を欠いているが小型の横穴式石室である。現存する規模は、全長3.8m、幅1.2m、高さ1.3mである。

石室の掘りかたは、横穴式石室よりもいくぶん大きい程度であり、石室石材との間隙は僅かである。開口部の近くでカットされるが、その規模は、長さ5.4m、幅およそ2.5m、深さ0.7mぐらいと推定できる。

石室の玄室の部分は、天井石と右側壁の石材を欠いているが、長さは2.5m、幅は右側壁の一番奥の石材の掘りかたが残存したことから1.2m、高さは左側壁の残存状況から1.3mほどの規模と考えられる。残存する左側壁部では、袖は認められないが、石材の大きさおよび積みかた、床面に敷かれた小円礫の有無、礫床の開口部側末端に埋めこまれた扁平な割石の存在から、玄室と羨道の区別は明確である。

羨道部は、長さ1.3mが残存するが、幅は右側壁を欠くため、不明である。高さは、残存部で1m不足であり、玄室よりも一段低かった可能性もある。石室の主軸方向はN-45°-Eで、南西に向け開口する。

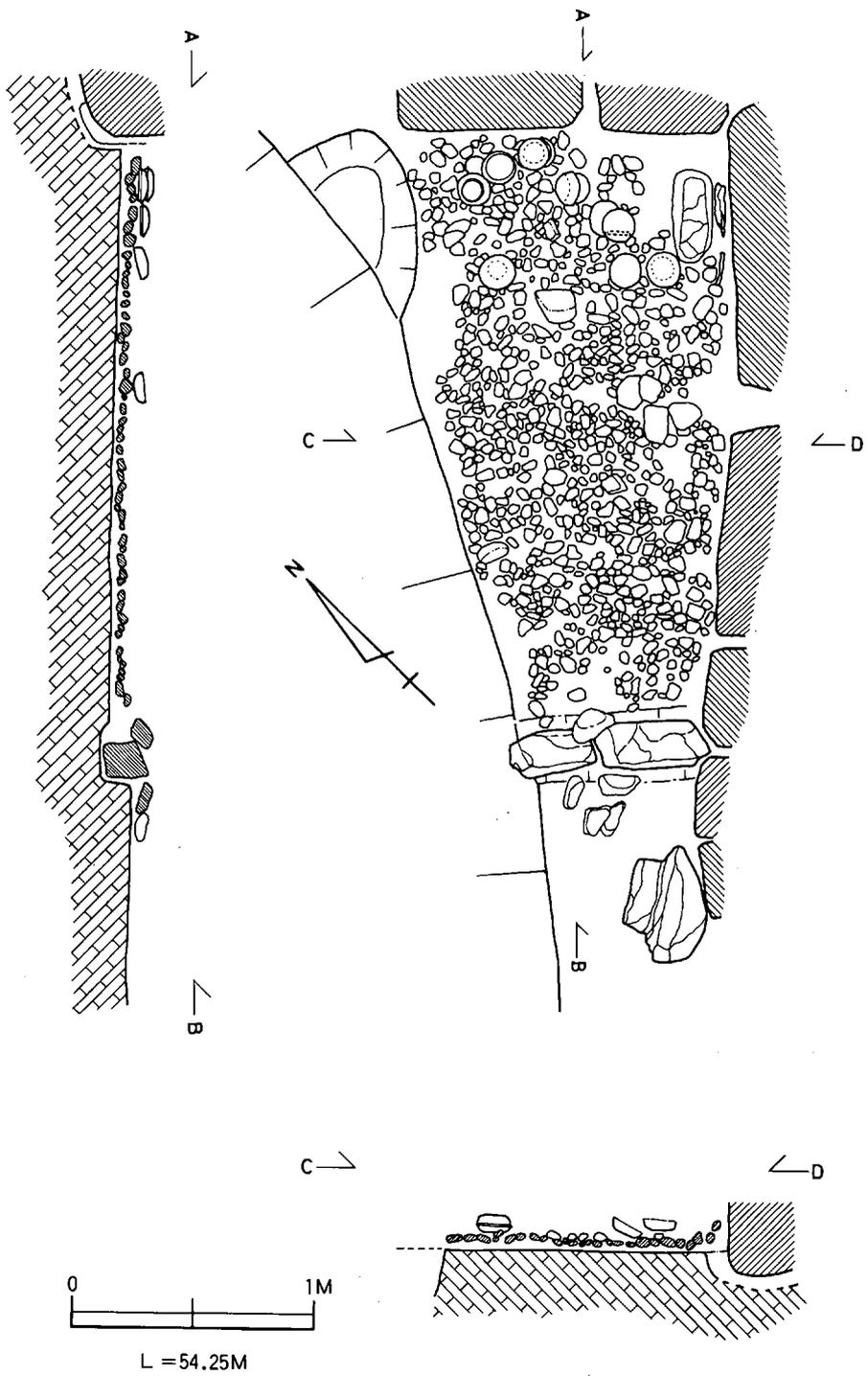


第17図 石室 平・断面図 (S = 1/60)

床面は、花崗岩
バイラン土層を若干掘りこんでいる。玄室は、羨道部より10cmほど低く、長さ5cmほどの小円礫を敷く結果、羨道とほぼ等しい高さになる。

石室の石材は花崗岩である。奥壁は、都合5枚が残存し、開口部に向かって右側は一辺1mほどの石材を立て、広口の面を出している。左側は、最下部は広口積みであるが、二段目・三段目はそれぞれ横口積み・小口積みになっている。側壁は、右側をすべて欠いている。左側壁の玄室部は、基底部を長さ1mほどの大型の石材を広口積みにし、三段積みとなっているが、二段目・三段目は横口積みで、若干ではあるが持ち送りを認められる。これに対して羨道部は、玄室にくらべて石材が小型で、形も一定せず、積みかたもいくぶん雑然としている。したがって、石室石材の用いかけたのうえでも、玄室・羨道の区別が存在したことを指摘できると思われる。

閉塞施設は、羨道部床面の残存が非常にわずかであるために判然としないが、羨道部の左側壁よりも内側には数個の石材が存在し、これは側壁の崩落したものとは認めがたく、閉塞施設



第18図 石室床面状況図 (S = 1/30)

の一部である可能性を想定しうる。

石室内の埋葬の状態については、遺物の出土状態などからみて、床面にまでおよぶ盗掘はなかったと考えられるにもかかわらず、はっきりしない。玄室内礫床面の直上には、長さ40cmほどの長円形の円礫、花崗岩の割石で礫床の円礫よりも大型のものなどが認められるが、これらは棺台とすべきまとまりを示さない。また、鉄釘を出土していないため棺の形態、位置について直接的な手がかりはないが、出土した須恵器が単一の型式に属すること、出土遺物の量からみて単次葬であったことについては疑問を生じない。

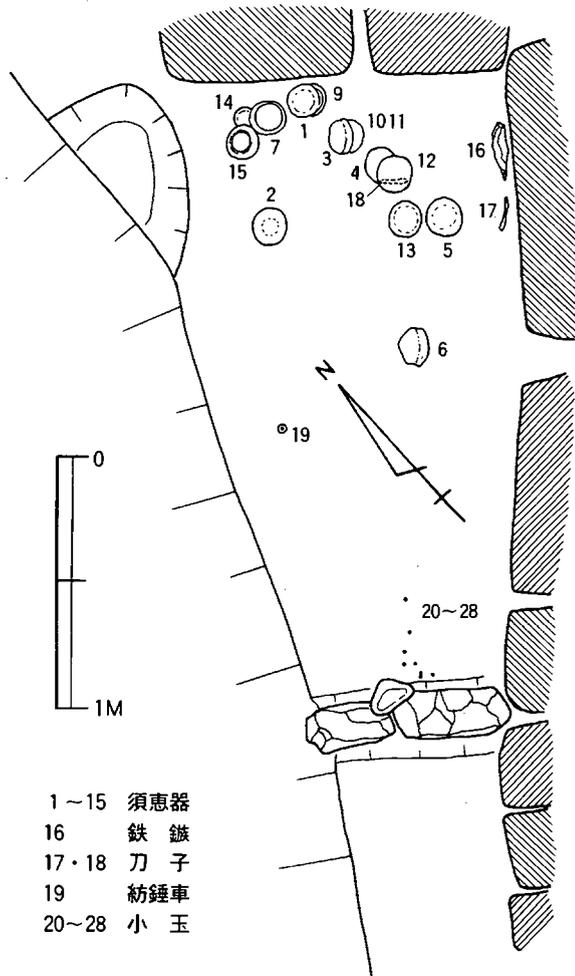
石室そのものについては、小さい玄室に短い羨道部をもつものと言うことができる。なお、床面下については、玄室の礫床面を除去して補足的な調査をおこなったが、排水施設というべきものは特に見出すことはできなかった。

(4) 遺物の出土状況

出土遺物は、土器、鉄器、石製品、玉類などである。

土器は、須恵器が15点出土し、これらは礫床面からわずかに上の、玄室内奥壁寄りに存在した。そのうち14点は、奥壁から開口方向に50cmほどまでのところに存在し、蓋・杯が合わさった状態にあるもののほか、2個重なったもの、3個が重なったものも認められた。残る1点は他よりやや離れた位置にあった。これは若干の欠損が認められ、完形とならない唯一のものである。

鉄器は、鉄鏃・刀子および不明の細片が若干存在する。鉄鏃は、奥壁近くの長さ40cm余の長円形の礫と左側壁との間に存在し、先端を奥壁に向けていた。1束であったものと思われる。刀子は2点が存在した。1は、鉄鏃から10cmほど開口方向寄りの側壁沿い礫床面直上で出土した。2は、須恵器杯9の下、礫床面直上から出土した。



第19図 遺物出土状況図 (S = 1/30)

石製品は、紡錘車が1点存在する。これは玄室中ほどの主軸からやや南に偏した位置に、底面の径の大きいほうを上にして出土した。礫床面とほぼ等しい高さであった。

玉類は、小玉9点が玄室の末端の羨道部にごく近い部分から出土している。そのうちの3点はかたまって存在したが、全体としては点在というべき状況にあった。

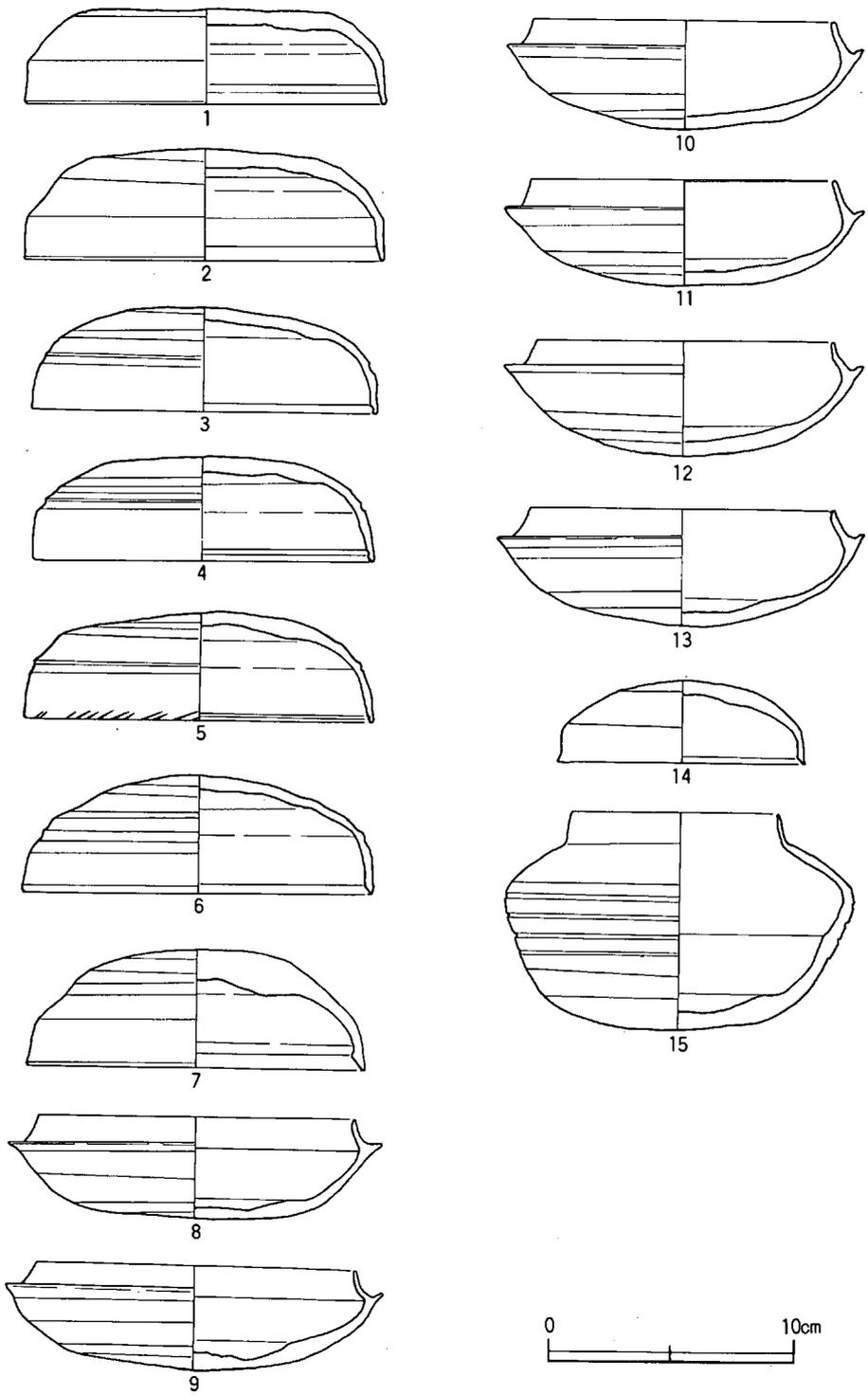
以上は、古墳の副葬品とみなされるものである。

須 恵 器

須恵器は、蓋7点、杯6点、有蓋短頸壺1組の合わせて15点が存在し、1点を除き完形あるいは完形に復元できた。

まず、蓋・杯では、成形および細部の調整のちがいがら類別が可能である。蓋は、天井部が台形を呈しその頂部が平坦に近く、天井部と体部とを画する稜や凹線はなく、口縁部内面にわずかな段をもち端部を薄く仕上げ、天井部中央の外面に平行叩き、内面にスタンプをのこすもの(1・2)と、天井部がゆるやかなドーム状を呈し、天井部下端に退化した稜と鈍い凹線を施し、体部は外弯ぎみにふくらみ、口縁端がすぼまり気味になり、天井部内面中央に仕上げナデを施すもの(3~6)、そして両者の中間的なもの(7)の三者が存在し、順に蓋A類・B類・C類とする。杯は、底部が平坦に近く、立ちあがりはやや短かく直立ぎみで、受け部との接合部の外面をなめらかに仕上げその内面にはっきりしたくりこみを生じ、底部中央の外面に平行叩き、内面にスタンプをのこすもの(8・9)と、底部がまるみを帯び、立ちあがりは内傾ぎみで、受け部にシャープなくりこみをもち、立ちあがりの接合部の内面をなめらかにし、底部中央の内面に仕上げナデを施すもの(10~13)に分類でき、それぞれ杯A類・B類とする。これらは、形態や細部の手法、具体的には天井部・底部の内面にスタンプをもつもの(A類)と仕上げナデを施すもの(B類)というちがいがいに加えて胎土も異なることから、蓋A類と杯A類、蓋B類と杯B類の対応関係を認めることができる。なお、法量の平均値は、蓋A類では口径15.10cm、器高4.35cm、蓋B類は口径14.45cm、器高4.50cm、杯A類は口径13.30cm、最大径15.65cm、器高4.45cm、杯B類は口径12.28cm、最大径15.13cm、器高4.70cmであり、A類が扁平でB類が丸味をおびた形態であること、杯A類とB類の立ちあがりの長さや傾きのちがいは、数値のうえにもあらわれているということができよう。

1は径14.9cm、高さ4.2cmで暗灰青色を呈し、焼成は良好である。胎土中の砂粒は著しくすくない。2は径15.3cm、高さ4.5cm。胎土中にごくこまかな砂粒をわずかに含むが3~6にくらべれば明らかにすくない。焼成は十分でなく淡い灰かつ色を呈し、いくぶん軟質である。3は径14.5cm、高さ4.3cm。やや青味がかかった灰色を呈し焼成は良好。内面にはにぶい光沢がある。胎土中にこまかな砂粒を含む。4は径14.4cm、高さ4.1cm。青味をおびた灰白色を呈し、焼成は良好。胎土中に砂粒を若干含む。内外面とも部分的に自然釉が付着する。5は径14.7cm、



第20図 須恵器

高さ4.5cm、淡灰色を呈するが焼成は良好。胎土中に砂粒は多い。外面の一部に鈍い光沢がある。口縁端の外面には、ヘラ描きと思われる斜方向の直線的な施文が、間隔は一定しないが認められる。この種の施文は、総社市内では井山の出土例（註5）があるが他ではあまり知られていないものようである。6は、径14.7cm、高さ5.1cm、灰白色を呈し焼成は良好。胎土中にやや粒の大きい砂粒が顕著である。7は、焼きひずみを生じており、径13.8～14.2cm、高さ5.0cmである。形態について、天井部がまるみをおびるのは、B類の特徴だが、それ以外はA類、特に2との近似が認められる。ただし、口縁端を断面三角形に肥厚させる例は他では見出せないため独特のものとするべきだが、全体的に見ればA・B類の中間的なものと言ってさしつかえないだろう。天井部内面には、スタンプが認められるが、これに対応すべき外面の平行叩きは顕著でない。胎土中の砂粒はかなり多い。焼成は過度のようであり、火ぶくれ・焼きひずみが著しく、内外面ともにピッチ状の付着物が認められる。8は口径13.2cm、最大径15.6cm、器高4.6cm。灰色を呈し、焼成は良好。こまかな砂粒をわずかに含む。焼成・胎土は1に近似する。9は口径13.4cm、最大径15.8cm、器高4.3cmである。焼成がやや不足で淡い灰かっ色を呈するのは2と同様である。底面に剝離が認められるが、これは融着した他のものをはがしたためと思われる。10は、口径12.2cm、最大径15.0cm、器高4.8cmで、灰白色を呈するが焼成は良好。胎土中に砂粒をわずかに含む。底面に自然釉が認められるほか、底面がすこし陥没するところがある。11は口径12.4cm、最大径15.1cm、器高4.3cm。暗灰色を呈し、底面に自然釉が認められる。焼成は良好。胎土中にはこまかな砂粒を若干含む。底面に、自然釉のためと思われるが他の製品が付着した痕跡がのこる。12は口径12.3cm、最大径14.9cm、器高4.7cm。灰色を呈し、焼成良好。底面のほぼ全体にわたって自然釉がかかるが光沢は全くない。胎土中の砂粒は若干ある。重ね焼きの痕跡がある。13は口径13.1cm、最大径15.2cm、器高4.9cm。灰白色だが、自然釉が多く付着し底面は緑色を呈す。焼成は良好。胎土中にやや粗い砂粒が多く認められる。これも底面に引き剥がした痕跡をのこす。

14・15は有蓋短頸壺である。14は口径8.5cm、胴部最大径14.6cm、器高8.9cm。口縁部は短くゆるやかに内傾し、端部をまるくおさめる。肩はよく張っており、胴部には3～4条のラセン状の沈線を施すが、この沈線は部分的につぶれているところがある。胴の下半から底にかけてはまるみを帯び、底部は杯に似た形態で丸底である。沈線の施される部分では段状のズレが顕著で内面には凹凸が認められる。胎土は他に比べて非常にきめがこまかく、砂粒の混入はほとんど認められない。明るい青灰色を呈するが焼成はすこし不足ぎみのようである。15は、天井部がゆるやかなまるみを持ち、口縁端を顕著に外反させることを除けば、蓋A類に近い形態である。口径10.3cm、器高3.4cmをはかる。胎土および色調等は14に近いが、天井部は部分的に灰かっ色を呈する。仕上げナデ、あるいはスタンプは判然としない。14・15ともにロクロの

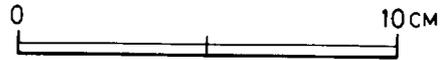
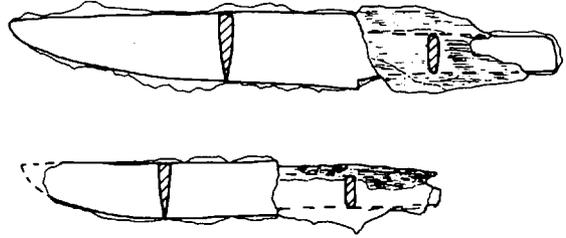
回転は時計まわりである。

これらの須恵器は、陶邑古窯址群（註6）のTK-10に認められる特徴をそなえている。

鉄 器

刀 子

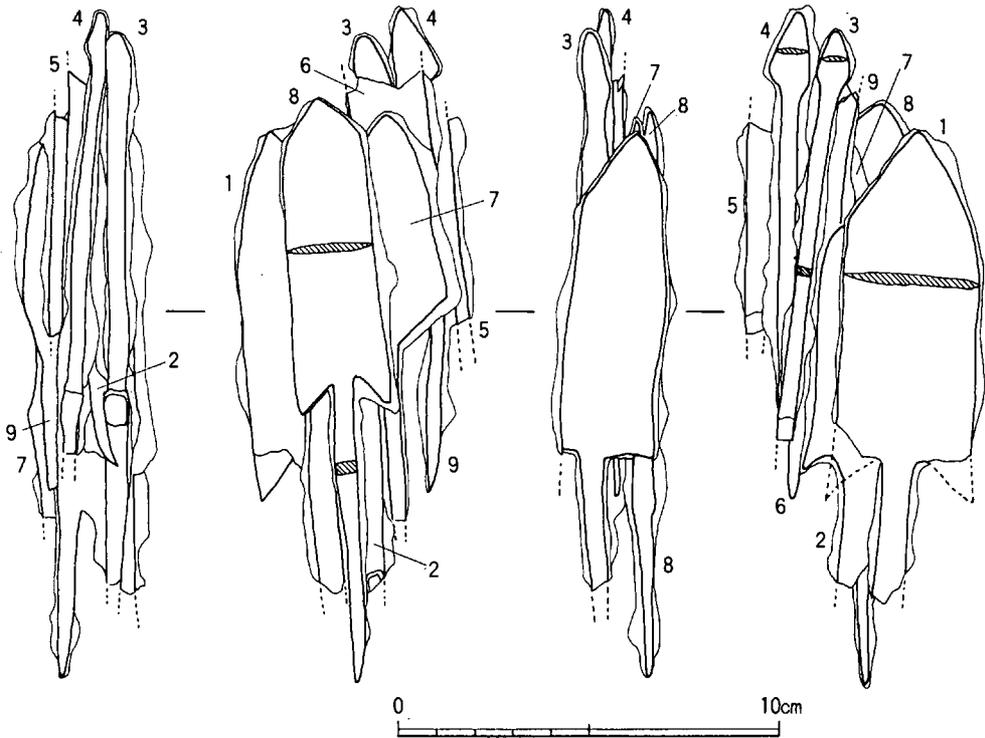
1は、現存長14.8cm、刃部は長さ9.3cm、幅1.9cmをはかる。茎は5.1cmで柄部の木質が若干であるが残存する。刃部と柄部のあいだで折れるが、接合する。刃部・茎部はほぼ完存するが、木柄は茎の途中までが部分的にのこっている程度である。刃部の先端近くに繊維の付着がわずかに認められる。



第21図 刀 子

2は、現存長9.7cm。茎・木柄部と刃部の間で折れるほか、刃部は3つに割れており先端を欠いている。残存する刃部は長さ5.8cm、幅1.4cm。茎・木柄部は、長さ4.4cmが認められる。茎の部分のみに関しては完存するものと思われる。

2は、現存長9.7cm。茎・木柄部と刃部の間で折れるほか、刃部は3つに割れており先端を欠いている。残存する刃部は長さ5.8cm、幅1.4cm。茎・木柄部は、長さ4.4cmが認められる。茎の部分のみに関しては完存するものと思われる。



第22図 鉄 鏃

鉄 鎌

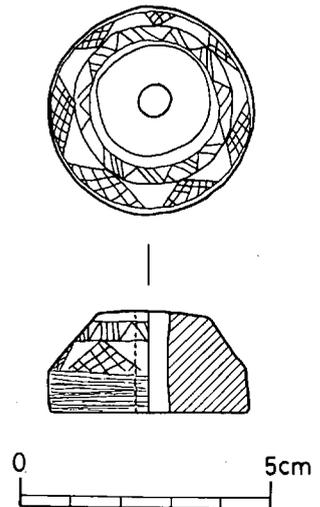
これは銹着が著しく分離が困難なため、固まりのまま図示・観察をおこなうにとどまった。一束であったものと思われ、9本までが確認できる。鎌身の形態によって分類すると、柳葉形式4（そのうち腸袂のあるものが2点）、先端を欠くが鑿頭式または柳葉形式1、三角形式1、片刃矢式1、箆被から茎のみの残欠2という内訳である。尖根、平根の区別では、平根式5、尖根式4ということになる。

1は、柳葉形式である。鎌身部は下端部の片側をわずかに欠くが長さ8.2cm、幅4.2cm、箆被は完存しないが残存する限りで3.7cmが認められる。鎌身先端部は中軸線よりわずかに偏りがある。2は、腸袂のある柳葉形式で、逆刺がやや外反ぎみである。残存長9.8cmで、鎌身部は長さ7.8cm、幅3.4cm。箆被部は完存しない。3は、三角形式である。全長10.6cm、鎌身部は長さ1.2cm、幅1.2cmで、箆被は途中までの残存である。4は、片刃矢式である。茎の一部までが残存し、鎌身部は長さ1.9cm、幅1.5cmである。5・6は、箆被と茎の一部のみの残存であるが3・4のような長頸鎌と思われる。7は柳葉形式で、箆被の一部までが残存し、全長10.8cm、鎌身部は長さ6.0cm、幅3.2cmをはかる。鎌身部下端の形態は、はっきりしない。8は、柳葉形式で完存する唯一の例である。全長15.4cm、鎌身部は長さ8.7cm、幅3.0cmで腸袂がある。9は、鎌身の上半を欠損しているが、鑿頭形式または柳葉形式と考えられるものである。鎌身の下端部は直線的である。

石 製 品

紡錘車

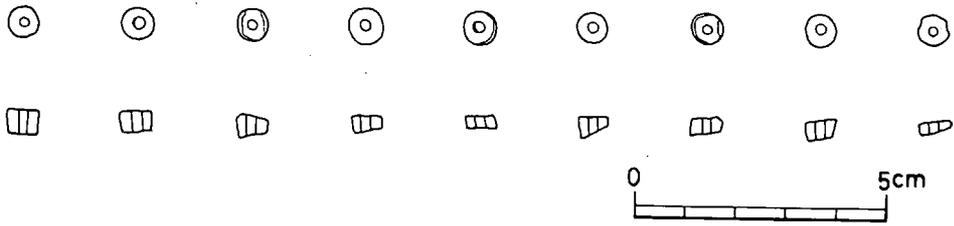
上面径2.4cm、底面径4.0cm、器高2.0cm、重量42.8gである。色調は、いくぶん灰色を帯びた暗緑色を呈し、滑石製である。断面形は、施文のある部分は截頭円錐形、器胴下半は長方形を呈する。器表の斜面となる部分には、上から沈線・鋸齒文・沈線・鋸齒文の順に刻線が施されている。最上段の沈線は、いくぶん磨りへっており、全周のおよそ半分ほどが消えかかっている。胴の側面は、すこしまるみを帯びるが、著しい擦痕が認められる。底面は平坦で無文となっている。穿孔は、直径1.0cmで、これは円の中央からは僅かに偏りがある。円孔内には、鉄芯などの残存は認められない。



第23図 紡錘車

小 玉

9点存在する。いずれも滑石製で、わずかに緑色を帯びた灰白色を呈している。径は0.6~0.7cm、厚さ0.2~0.6cmで、大きさは一定しない。断面形は、左右対称となるものはすくなく、



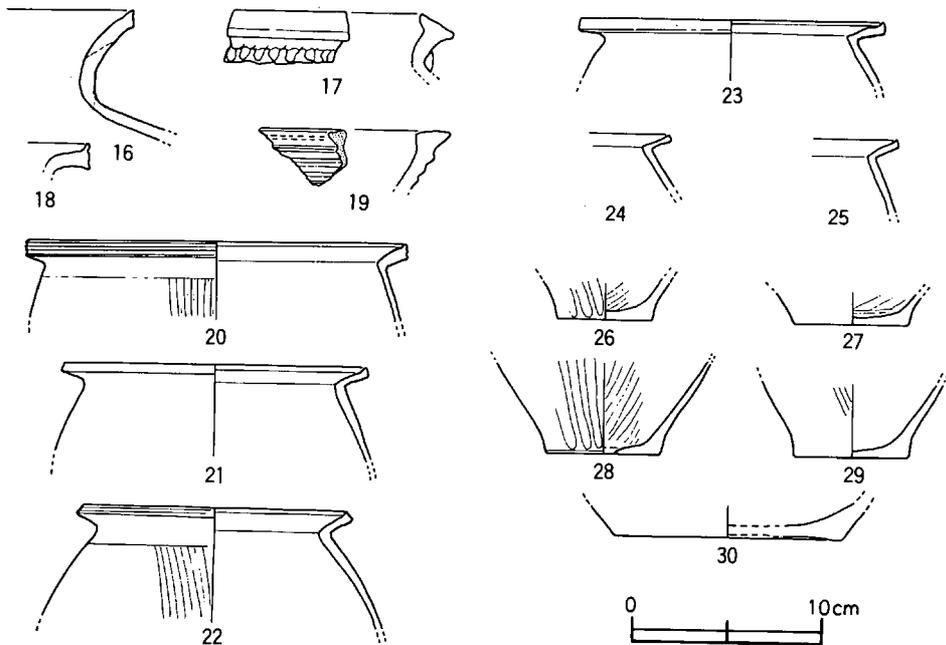
第24図 小玉

台形ないし不等辺四角形というべき形のものが多い。外側面には木理状のこまかな筋が数多く見うけられ、この面を平滑に研磨しているものはない。穿孔面については、片面だけを平滑にしているものが若干あるが、そのほかは切断した状態と考えられる凹凸を顕著に残している。

遺構に伴わない遺物

墳丘封土・石室の掘りかた・石室内の埋積土などから出土したもので、数十片が存在した。ほとんどが弥生土器である。古墳よりも東側は、ごくゆるやかな傾斜面になっており、この部分に弥生時代の包含層が存在する可能性が想定でき、そこから古墳の存在する部分にかけての流れこみと考えてさしつかえないだろう（註7）。17～30は弥生時代中期後半のものである。

17・18は壺形土器片である。まず17は、明褐色を呈し、口縁を上下に拡張する。口縁端面には施文はなく、ヨコナデによって生じたわずかな凹面をのこす。頸部の途中までの破片であるが、頸部のくびれた部分には、粘土ひもを貼付し、その上に押圧による刻み目を施す。18は、



第25図 遺構に伴わない出土遺物

白味を帯びた明褐色を呈し、胎土中には微細な砂粒を多く含む。口縁は外方にひろがり、端部を肥厚して端面に2条の凹線を施される。

20～25は甕形土器片である。器面は、いずれも磨滅が著しく、調整を判別しうるものはごくわずかである。20は、やや白っぽい明褐色を呈すが、焼成はわずかに不足する。胴部のふくらみはすくない。口縁の端面に2条の凹線がある。器胴外面には、ハケ目が認められるが内面の調整は判別困難である。22は、口縁端を上方にわずかに拡張する。胴はかなりふくらむが、破片は器胴の最大径の部分までは残存しない。明褐色を呈する。口縁端面は、ヨコナデのみで施文はない。器胴の表面には、間隔の広いハケ目が認められる。21は、赤味を帯びた褐色を呈する。胎土中には砂粒を多く含んでいる。口縁端の拡張はほとんどないが、やや上方に屈曲ぎみである。23は、21とほぼ同じ形態である。白味を帯びた黄褐色を呈し、胎土はきめ細かい。内外面とも磨耗が著しく調整は不明。

26～30は底部である。29は茶褐色を呈する。器面は著しく磨滅しているが、外面にはハケ目が痕跡程度に認められる。30は淡かっ色を呈す。底面は、わずかに上げ底となる。器面の調整は不明。27は、白味を帯びた褐色を呈する。底面のほぼ中央に穿孔状のくぼみがある。外面はヘラみがき、内面はヘラ削りのあとにナデを施したものである。26は、白味を帯びた褐色を呈する。胎土そのものはきめ細かいが砂粒が多い。外面はヘラみがきである。28は明かっ色を呈す。器面は磨耗が著しく、調整は不明。

16は、須恵器・甕の口縁部である。これは石室内の床面から30cmほど上で出土した。外面のくびれ部から下に沈線、列点状の刺突文などが施され、ほぼ全面に自然釉が付着する。これに関しては、古墳に本来伴うべきものであったかもしれない。

4. 小 結

すりばち池3号墳は、直径約10mの墳丘と幅2mの周溝をもった円墳で、横穴式石室を主体部とする古墳である。すでに石室の天井石・右側壁の石材が失われ、墳丘も半分程度が残存するにすぎなかったために、周溝が全周にわたってめぐらされていたか否か、墳丘・石室の高さなど不明な点も多いが、石室全長については掘りかたの状況などから残存した3.8mという数値は本来の規模から大きく隔るものではないかもしれない。玄室の部分は、平面プランの85%ほどが残っており、盗掘をうけた痕跡は見出せなかった。副葬品は、須恵器杯・蓋・有蓋短頸壺、鉄器では刀子・鉄鉢、滑石製紡錘車・小玉の30点余を数えるが、器種の変化に乏しいことを特徴としてあげることができよう。須恵器の杯・蓋は、形態・手法からみて大きく2通りに分類可能だが、出土状況なども考慮にいれば明らかな追葬も認めがたく、これは製作工房のちがいが反映したものと見るほうが妥当と思われる。玄室内での棺の位置については、鉄

釘が検出されていないこと、礫床の上面にいくぶん大ぶりの礫が散見されたが棺台としてのまとまりを想定することが困難であるため、具体的に示すにはいたらなかった。

この付近に存在する古墳について、内容の明らかなものは、泉ニュータウンの造成に伴って調査されたものを除けばごくわずかである（註8）が、古式の須恵器を共伴した例である梅谷2号墳・福井10号墳・恩崎2号墳などは丘陵の先端に近い部分に位置しているのに対し、横穴式石室を主体部とするものは、すりばち池3号墳を含めて北西の部分に偏るという分布をみることができる。このことは（古式の須恵器を伴うものと横穴式石室をもつすりばち池3号墳との間にどの位の年代差があるかを明確にはしえないが）墓域が時代が降るにしたがって北西に向け推移したことを示しているものかもしれない。

すりばち池3号墳は、墳丘・石室の規模、副葬品の内容などについて傑出したものではないが、この丘陵上に連続と築かれてきた古墳の系譜につづくもので比較的初期に横穴式石室を採用したものということができ、築造年代は副葬されていた須恵器から6世紀中葉という時期と考えられる。

註

- 註1 この山塊には、鬼ノ城をはじめとして新山寺址・岩屋寺址など多くの重要な遺跡が存在する。鬼ノ城学術調査委員会「鬼ノ城」1980年
- 2 鎌木義昌「総社市西山周辺古墳群」『総社市埋蔵文化財調査概報Ⅰ』総社市教育委員会 1972年 および「総社団地文化財調査委員会」の記録による。
- 3 梅谷2号墳では須恵器甕・把手のついた高杯（または椀）が出土している。
- 4 葛原克人「あまこやまこふん」『岡山県大百科事典（上）』山陽新聞社 1980年
- 5 昭和56年に確認調査をおこなった際出土した。これは多量の焼土をもつ遺構に伴うものと思われる。
- 6 平安学園考古学クラブ「陶邑古窯址群Ⅰ」1966年
- 7 すりばち池3号墳からは離れるが、神明遺跡（第40図18）で弥生時代中期末の高杯が採集されたほか、註2文献によると福井10号墳（第14図15）の南斜面では弥生時代中期後半の壺棺の可能性のあるもの、石庖丁・石斧などが出土しているなど弥生時代の遺跡も存在することを付記する。
- 8 西川宏・今井堯「吉備地方須恵器編年資料集成（Ⅰ）」『古代吉備』第2集 1958年 総社市小寺赤坂出土の須恵器というのは、すりばち池3号墳周辺の古墳から出土した疑いがあるのが数少ない例のひとつである。



1. すりばち池3号墳遠景（南から）



2. すりばち池3号墳近景（南から）

図版24



1. 調査前の墳丘の状況（南から）



2. 調査前の周溝の状況（北から）



1. 切通し面の状況（調査前）



2. 切通し面の状況（清掃後）

図版26



1. 石室断面 (切通し面)



2. 墳丘と石室の状況



1. 作業風景



2. 石室全景 (西から)



1. 石室と掘り方の状況



2. 石室から羨道を望む（北から）



1. 須恵器出土状況（東から）



2. 須恵器出土状況（南から）

図版30



遺物出土状況 (上右・小玉, 上左・紡錘車, 下右・鉄鏃, 下左・刀子)

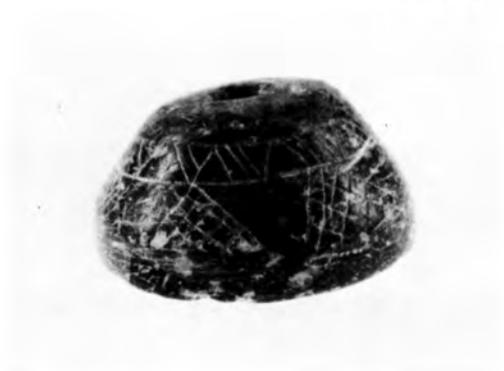


石室および礫床面の状況（上左・上右・北から，下・南から）

图版32



出土遺物 1 須恵器

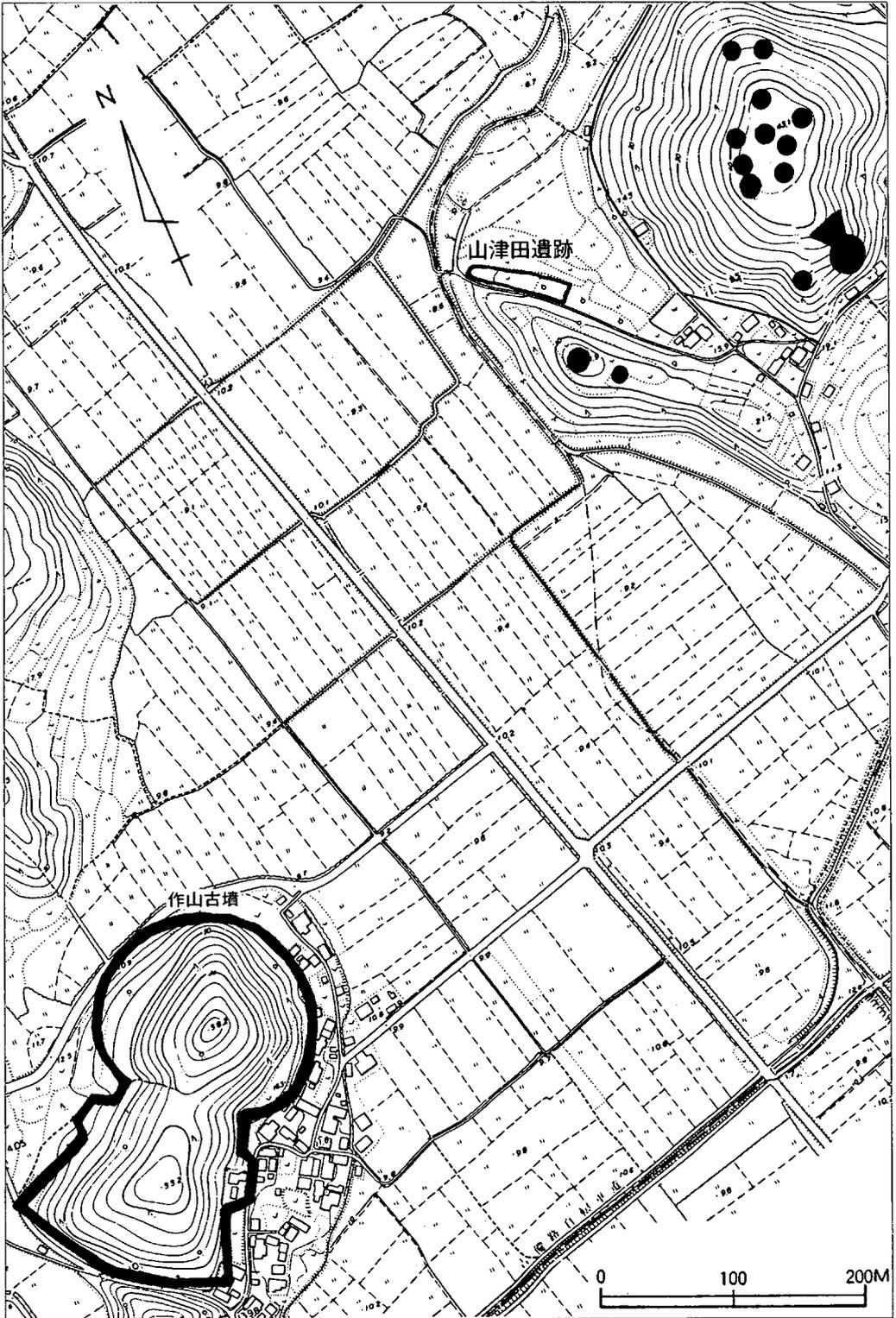


出土遺物2 須恵器・石製品・鉄器



遺構に伴わない遺物 弥生土器

第 3 章 山津田遺跡



第26図 山津田遺跡周辺地形図 (S = 1/5,000)

1. 調査にいたる経緯

江崎地区は、三須丘陵の西端の総社市上林に所在する。前面に備中国分寺の五重塔を仰見し西方指呼の間に作山古墳に没す夕日を見る吉備路観光の中心に位置している。南から西、北方の平地には水田が開けたのどかな田園風景を呈すが、南方山地からの流水は排水の悪さもあって停滞しがちであり、ひとたび大雨に見舞われると水田のかなりの部分が冠水する。こうした状況と近年の農業機械の大型化から圃場整備の機運が高まり、団体営事業として実施されることとなった。実施計画によれば、規模は24.4haに及ぶが、受容面積は19.2haで、排水路などの占める比率が高いのは前述した理由による。事業は昭和56年度から着工し、60年度をもって完了する予定であり、現在一部工事中である。

当該地区は、丘陵端部斜面の畑地を除き水田であり、遺物の表採もなく、従って周知の遺跡は存在しない。しかし狭い範囲とはいえ上記の畑地が存在することと、慎重を期すために水田部分にも確認調査を実施することとした。

2. 確認調査の概要

調査は稲の収穫後の時期を選んで実施することとした。候補地として丘陵斜面の畑地を主目標にし、国分寺西面の水田を選定したが、作付や地権者の承諾の関係からある程度限定されたものとなった。

第一地点は、三須丘陵最西端の北西に小さくのびる低丘陵の東斜面で、表採時に若干の土器片を採集した畑地である。2×3mのトレンチを6ヶ所設定し掘下げた。斜面堆積のためトレンチにより深さが異なるが、耕土直下に地山の風化花崗岩層があり、南端のトレンチで確認長85cm、幅55cmの長方形土塊を検出し、少量の弥生後期の土器片を採集した。この地区の南も畑地であるが、作物の植付が行われており、確認調査は実施できなかったが表採でかなり多数の弥生土器片を採集したことから、検出した遺構と考えあわせ、遺構がこの斜面の南寄りに存在すると考えられ、発掘調査が必要と判断した。

第二、三地点は、備中国分寺五重塔の所在する小低丘陵の西斜面にあたる。2×2～3mのトレンチを第二地点に6ヶ所、第三地点に7ヶ所設定した。前者は現表面下30cm前後で地山に達するが、遺構は検出されず僅かに須恵器、弥生片各1片をえたのみである。第三地点も30cmほどで地山になり、一部のトレンチで流入と考えられる数片の布目瓦がえられたが、北側へ移るにつれ土質が変化し、小谷部に近いことをうかがわせる状況が観察された。

第四～九地点においては、長短は地点により異なるが幅2mのトレンチ14ヶ所を掘下げた。これらの地点においては、深浅に若干の差はあるものの、土層は上層から耕土、淡褐色系の砂



第27図 山津田遺跡周辺地形及び地区設定図 (S = 1 / 5,000) 太線が計画予定地

質土、淡青灰色粘質土層となる。いずれのトレンチからも遺構は検出されず、また遺物も出土しなかった。この状況は、これらの地点が長い間湿地状部であり、その後の埋積によって形成されたものと考えられ、居住の場としてはきわめて不適當であると推定された。水田化の時期は不明だが、それを除けば遺構は存在しないと考えられる状況である。

以上の状況から、第一地点においては調査地の南の畑地を含めて、弥生期の墓址または集落址の存在が想定されたため発掘調査が必要と考えられるが、他の地点については遺構は存しないものと判断し、調査の対象から除外することとした。

日誌抄

昭和57年（1982年）

7月2日（晴） 調査開始。作付との関係で制約をうけたが、確認調査時に土壌の検出された部分を中心に遺構の検出作業。斜面の上半である西よりの部分では、20cm足らずの耕土の直下で風化のすすんでいない花崗岩層となり、遺構の存在は認められない。

7月3日（晴） 調査区下半の斜面下寄り部分で、確認調査時に検出された土壌のほか溝などを検出する。これらは上部をかなり削平されている。

7月5日（晴） 確認調査時に調査のできなかつた調査区南半部分で2m幅のトレンチによって遺構の検出作業。表土および攪乱土層中から須恵器などが出土する。この地点では表面採集で土器片のほか須恵器も若干認められていた。

7月6日（曇） 前日にひきつづき調査区南半の検出作業。南端に近い部分で遺構と思われる黒色土の堆積が認められたが、部分的には攪乱と思われるブロック状の茶かっ色土が混ざる。地元の人によれば、この地にはかつてブドウの栽培が行われていたという。

7月8日（晴） 調査区南半で住居址と思われる遺構（H 1とH 2, 3）を検出。

7月9日（晴） 調査区南半の南端で遺構の存在することから、さらに遺構のひろがり予想されるため、既掘部分の南5mほどの位置に2×4mのトレンチを設定する。

7月10日（晴） 前日設定のトレンチで遺構の存在が明らかになったため、さらに2×2mの範囲で拡張する。それ以外では調査区南半部分で、重複している住居址（H 2と3）、単独に存在する住居址（H 1）、溝の存在が明らかになった。

7月12日（曇） 1号住居址の掘下げ。2, 3号住居址上面の攪乱土除去。3号住居址は残存がわずかである。

7月15日（晴） 2, 3号住居址で切り合いから後出と考えられた2号住居址を掘下げ。

7月21, 22日（晴） 1, 2号住居址、床面の検出作業。

7月23日（晴） 1号住居址掘りあがり。

- 7月26日（晴） 北半の土壌、溝、南端トレンチの遺構など掘りあがり。
7月27日（晴） 遺構掘りあげ完了。一部撮影。
7月28日（晴） 遺構の撮影。
7月30、31日（晴） 遺構の実測、調査終了。

3. 位置と環境

山津田遺跡は、総社市上林583・584番地に所在する。遺跡の立地するのは、総社市街地から東へ約3kmの位置にある三須丘陵（註1）の南西端の部分である。この三須丘陵は、山手村と倉敷市が境を接する福山の山塊から足守川に向けて北東方向にのびた低丘陵群であり、そのつけ根のあたりに旧山陽道が東西に通る。

総社平野とその周辺には多数の古墳の存在が知られているが、三須丘陵は分布密度の高さや墳丘規模の大きいものを含んでいることから、むしろ中心的な地域とみることが可能であろう。古墳のうち主要なものでは、全長約142mの前方後円墳で周溝をよくのこす小造山古墳（註2）、家形石棺をおさめる巨大な横穴式石室をもつこうもり塚古墳（註3）、規模の大きな横穴式石室を主体部とする円墳の群集する緑山古墳群などがあり、その総数は200基以上（註4）におよぶ。また、この丘陵に近接した地域には、造山古墳、作山古墳、宿寺山古墳などが所在する。古代になると、備中国分寺、備中国分尼寺（註5）がこの丘陵の一面を占め、さらに備中国府（註6）は三須丘陵の北側の平野中央部におかれた。以上のように、三須丘陵は古墳時代から古代にかけて岡山県西部地域における中心としての位置を得たといえるが、地域内での優位性を確立する過程、あるいはその背景について、特に集落、生産など具体的な資料は十分に得られていないのが実情である。

三須丘陵の弥生時代の遺跡は、散布地が数ヶ所と壺棺墓が1例報告されている（註7）が、散布地については集落址の可能性があるという程度で具体的に明らかにされたものはない。総社市内の沖積微高地上の遺跡は、中央土地区画整理事業に伴う真壁遺跡（註8）の調査を契機に次第に明らかになりつつあるが、三須丘陵の付近では丘陵の西方に位置する美濃田遺跡（註9）などが注意される。丘陵上に立地する弥生時代の集落址としては三輪山南斜面の殿山遺跡（註10）が知られているが、これは弥生時代中期のものである。

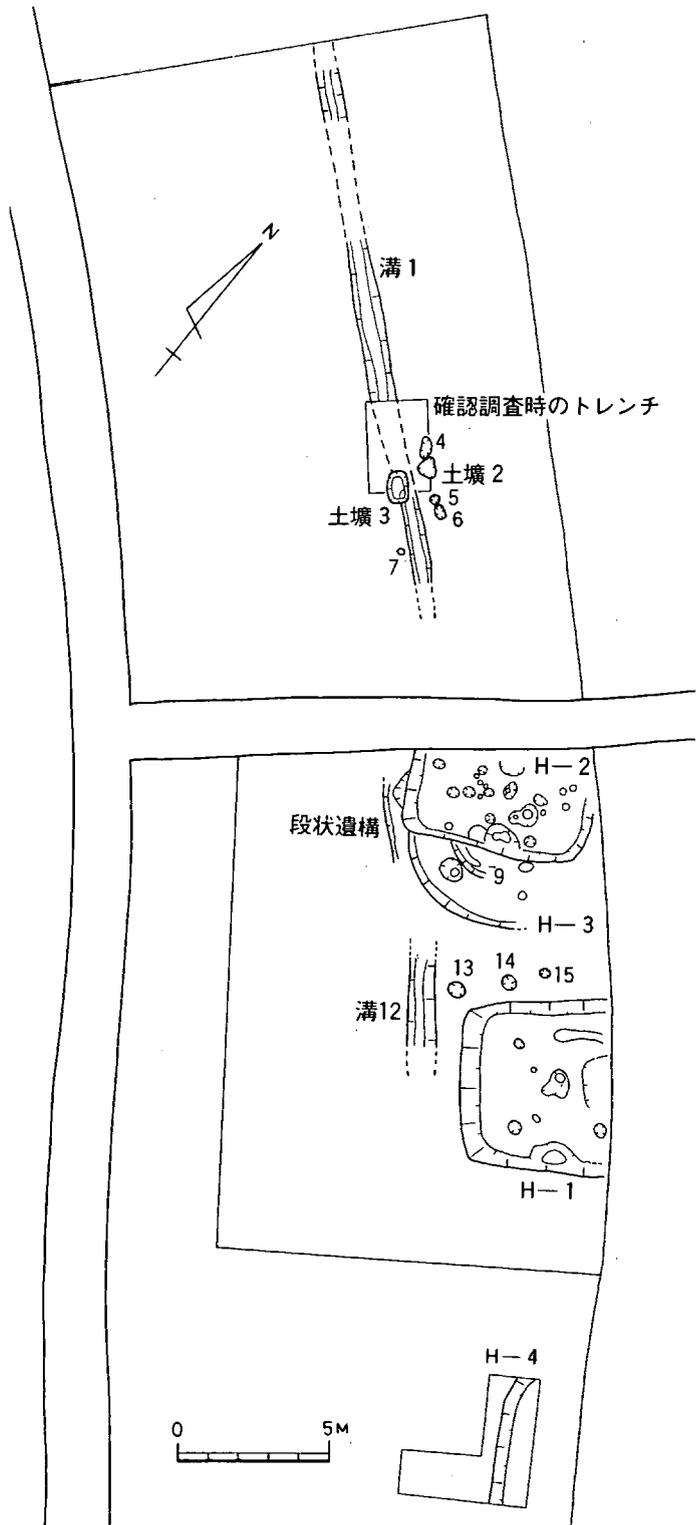
今回調査をおこなった山津田遺跡の周辺には、江崎古墳群（註11）が知られている。その中で江崎古墳（註12）は、現在石室が埋没しているが横穴式石室を主体部とする全長約50mの前方後円墳であるといわれている。それ以外のものは径10m内外の墳丘をもち、箱式石棺を主体部とするもの、横穴式石室をもつものが若干指摘できるとどまり、内容を明らかにできるものは著しく少ない。なお、山津田遺跡から道を隔ててすぐ西には江崎1号墳・2号墳の存在が

あげられているが、現状ではその存在を確認することは困難である。なお、今回の調査では特殊壺形土器・特殊器台形土器片などが出土しており、山津田遺跡の付近に墳丘墓のようなものが存在した可能性も考えられたが、調査範囲内では結論を出すにたる資料は得られなかった。

4. 調査の概要

今回の山津田遺跡の調査では、弥生時代から古墳時代におよぶ遺構、遺物の存在が明らかになった。調査は、作付との関係や調査区の中央に道があるなどの制約があり、さらに調査後すぐ工事にはいらず、一旦埋め戻してひきつづいて耕作をおこなうという事情があり、区域内全体にわたって実施することができなかった。

調査地点は畑地となっており、西から東へ向かって緩傾斜面となり、西端は道路路面より50cmほど高い。調査区の斜面の中ほどから上の部分では、厚さ15cmほどの耕土から下は、風化の著



第28図 山津田遺跡遺構配置図 (S = 1/250)

しくすすんでいない花崗岩層となるが、2mおきに表土をとり除いて観察をおこなった結果、遺構・遺物の存在を認められなかったため、この部分は排土置場とした。また、東端部分では遺構の末端部の残存がわずかになり、傾斜の下降が著しいため調査対象から除外した。

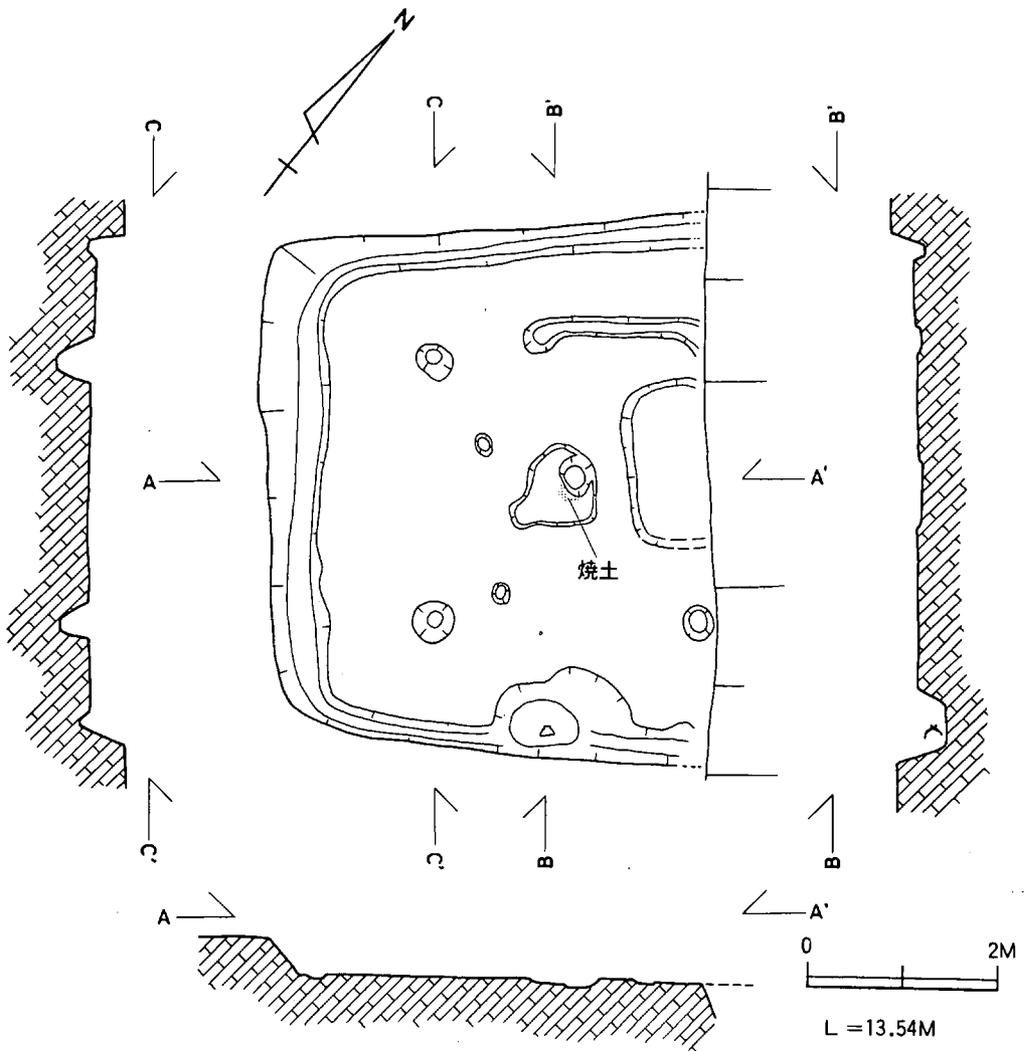
1号住居址より南側の部分は、作付がおこなわれていたが、遺構が集中するのが1～3号住居址の存在する部分と考えられるため、そのひろがりを確認する意味で2×4mのトレンチを1ヶ所設定した。この部分では特に攪乱が著しく、遺構の残存の程度も良好とはいえなかったが、弥生時代前期の遺構の存在が明らかになったため、さらに2×2mの範囲を拡張した。

遺構は、調査範囲の全域に認められるが、中ほどから東の傾斜面の下半部に集中する。小道を隔てて南半と北半で遺構の様相は明らかに異なっており、遺構が掘りこまれた基盤層については、北半部が風化のすすんでいない花崗岩層ないしごくきめの細かい黄白色の砂質土であるのに対し、南半部は粗い粒状を呈す赤味を帯びたマサ土という違いがみられる。個々の遺構についてはのちに述べるが、その他の遺物を伴わないものなどについては、ここで一括してとりあげることとする。まず北半部では、溝、土壌などが検出された。溝1は、等高線と平行に存在するが、北端のほうではいくぶん不明瞭となる。規模は幅が50cmで、深さは遺構の上面が不規則に損われているため、最も残りのよい部分で20cmをはかるがほとんど痕跡程度のところもある。遺構内からは中世土器と思われる細片が出土しているほか、埋積土も他の弥生時代の遺構などと異なり灰黄色の砂質土であること、さらに土壌との切りあい関係などからみて中世のものと考えられる。土壌2、5～7は、大きさや深さが一定でなく、性格は不明である。いずれも遺物を伴っていないが、土壌3・4と位置的に近接し、埋積土も類似することからみて、弥生時代のものである可能性が強いと考えられる。南半部には、1号住居址と3号住居址の間に、ブドウ栽培の時のものと思われる著しい攪乱があるほか、2号住居址の上面、1号住居址の南半部分にも遺構を大きく損わない程度ではあるが、攪乱の痕跡が認められた。南半部で住居址以外の遺構としては、1号住居址周辺の溝12・土壌13～15がある。溝は、幅60cm、深さ30cmの規模であるが、後世の攪乱のため長さ3mほどが検出されたにすぎず、そのつながりについては不明である。出土遺物は、須恵器の細片が少量存在するほか、付近の表土、攪乱土層中から須恵器の杯81、蓋80が出土していることからみて古墳時代後期のものである可能性が強い。土壌13～15は、いずれも径30cm、深さ20cmほどの規模である。遺物は皆無だが、その埋積土は溝12に近似することから古墳時代後期のものである可能性を考えておきたい。

(1) 1号住居址

平面方形を呈する竪穴住居址である。斜面の下端となる東側の端部は、排土置場とせざるを得なかったため不明な点もあるが、南北方向の長さからみて一辺5.5m程度の規模であると考

えられるものである。壁体は、傾斜面上部にあたる西側部分では残存が良好で深さ60cmほどを計るが、東側に向けて斜面の傾斜によって深さを徐々に減じ、東端部分ではほとんど床面の高さぐらいが残存するにすぎない。床面は、そのほとんどが地山を掘りくぼめて整地したままになっているが、東端部分ではわずかであるが地山面が下降するために、一部を埋め出して床面としている形跡がある。床面は、壁体溝がめぐっており、中央部分には径80cmほどの円形で深さ5~10cmのごく浅い中央土壙があり、そのほぼ中ほどにわずかではあるが焼土が認められた。柱穴については、その配置からみて4本柱と想定されるが、北東の1穴については検出できなかった。遺存する柱穴は、上面径40cm、底面径20cm、深さ40cmほどの規模をもつものである。中央土壙西側の支柱穴の内側の対角線上の位置には、径20cm、深さ15cmほどの柱穴状のものが



第29図 1号住居址 平・断面図 (S=1/80)

2穴存在するが、これは補助柱のようなものではなく他の機能を考えるべきと思われる。中央土壌以外の土壌では、東側に壁体溝と接して140×80cm、深さが住居址床面から30cmの不整形の土壌があり、この中からは高杯22・23、甕形土器15、台付鉢形土器36などが出土している。それらのほかには、中央土壌北の柱穴外側に、長さ1.8m、深さ10cmほどの浅い溝状のものが見られるほか、中央土壌東側には浅い凹み状のものがある。

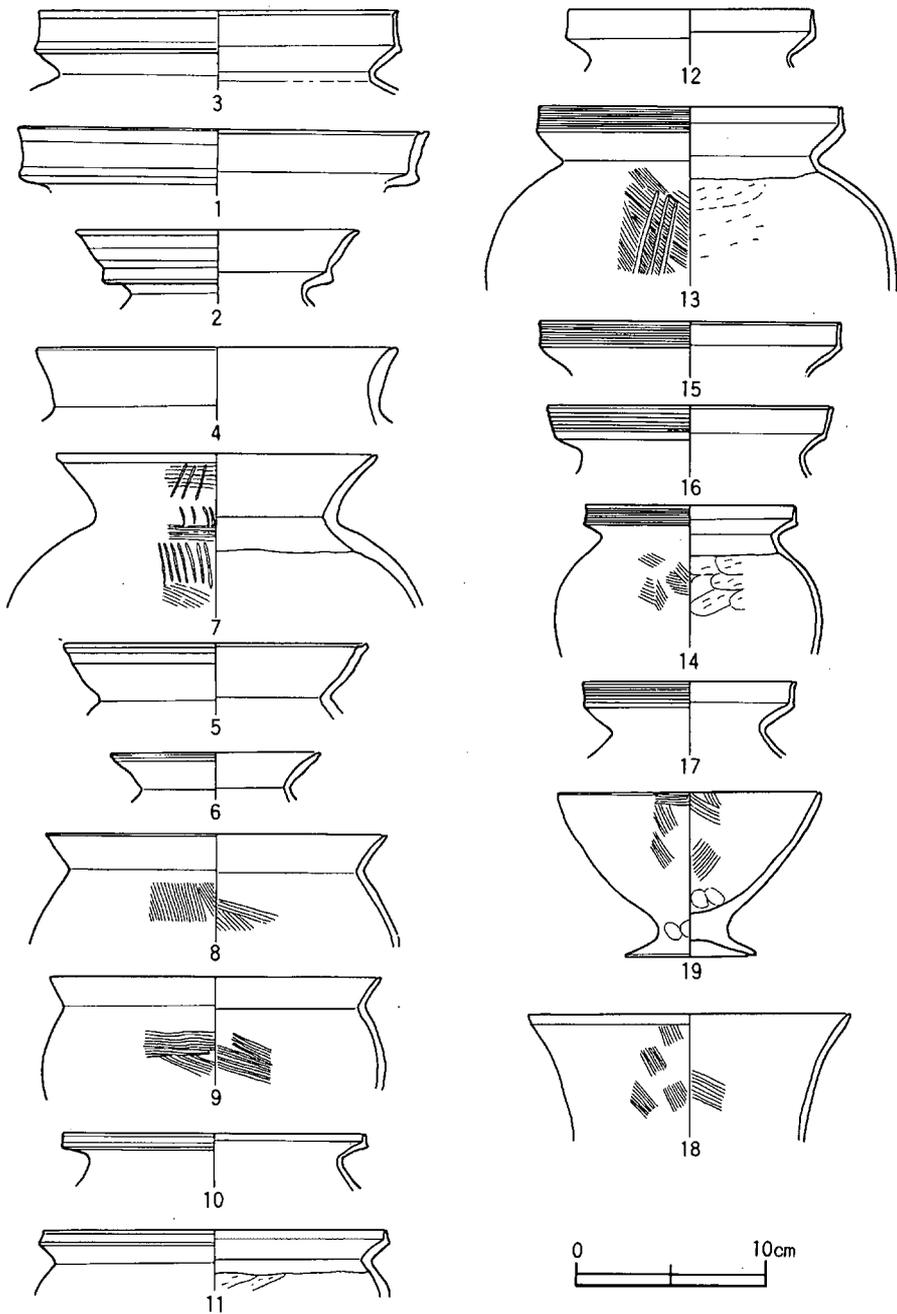
遺物

1号住居址の出土遺物は、土器および石器である。土器は、いずれも小片ばかりで、しかも摩耗が著しいものが多く全形を知りうるものはない。石器は、砥石1点のほかはサヌカイトの細片がごく少量出土したにとどまる。

壺形土器（1～3）は、二重口縁をもつものが3例存在したにすぎない。口縁部のわずかな破片であるため、頸部以下は不明である。口縁端の形態から、外反（1・2）、内傾ぎみに直立（3）するものに分けられる。いずれも白っぽい色調で、胎土中には砂粒を多く含んでいるが、全体に丁寧なナデられているため表面はなめらかである。焼成は良好。1・3は、拡張面がヨコナデにより凹状となる。2は、稜線がきわめてシャープである。

甕形土器（4～17）は、口縁部の形態によりくの字状のもの（5～9）と、二重口縁をもつもの（10～17）に大別でき、後者はさらに拡張面がせまくヨコナデのみのもの（10～11）と、拡張面を広くとって櫛描沈線文を施すもの（13～17）が存在する。いずれも胎土中に砂粒を多く含み、器面の荒れているものも多く調整を判別しにくいものが多い。くの字状の口縁をもつものは、5が口縁端をほぼ平らにしているのを除けば先端を細く、まるくおさめている。調整は、5・6では丁寧なナデ、8・9は胴部にハケ目、7は外面にこまかなハケ目が施されたのちへら磨きのような痕が認められる。胴部の形態についてはよくわからないが、7のように口径より胴径が大きくなるものと、9のように口径と胴径があまりちがわないものの両者が存在するようである。底部は遺存例がないため不明。二重口縁をもつものは、いずれもやや外反ぎみか直立状に拡張をおこなう。10・11は、端面のせまいものである。端面は、ヨコナデによってわずかに凹面となっている。12は、端面がやや幅広だが無文で、形態のうえでは次にあげる櫛描沈線文を施されるものに近い。13～17は、拡張面に櫛描沈線文を施すものである。いずれも器面の摩耗が著しいため、こまかな調整は判別しにくい。器形の全容はうかがえないが、肩部が張り胴径が口径を大きくうわまわる。拡張面は、ヨコナデによってわずかに凹面となる傾向がある。15～17は、口縁部がやや外反する。施文の原体は、線の遺存を見る限りそれぞれが幅1mm程度の平たいもののように思われ、その間隔は原体の幅ずつぐらいあいており、沈線そのものの深さは0.2mmほどのようである。13は、外面にハケのちミガキがおこなわれている。

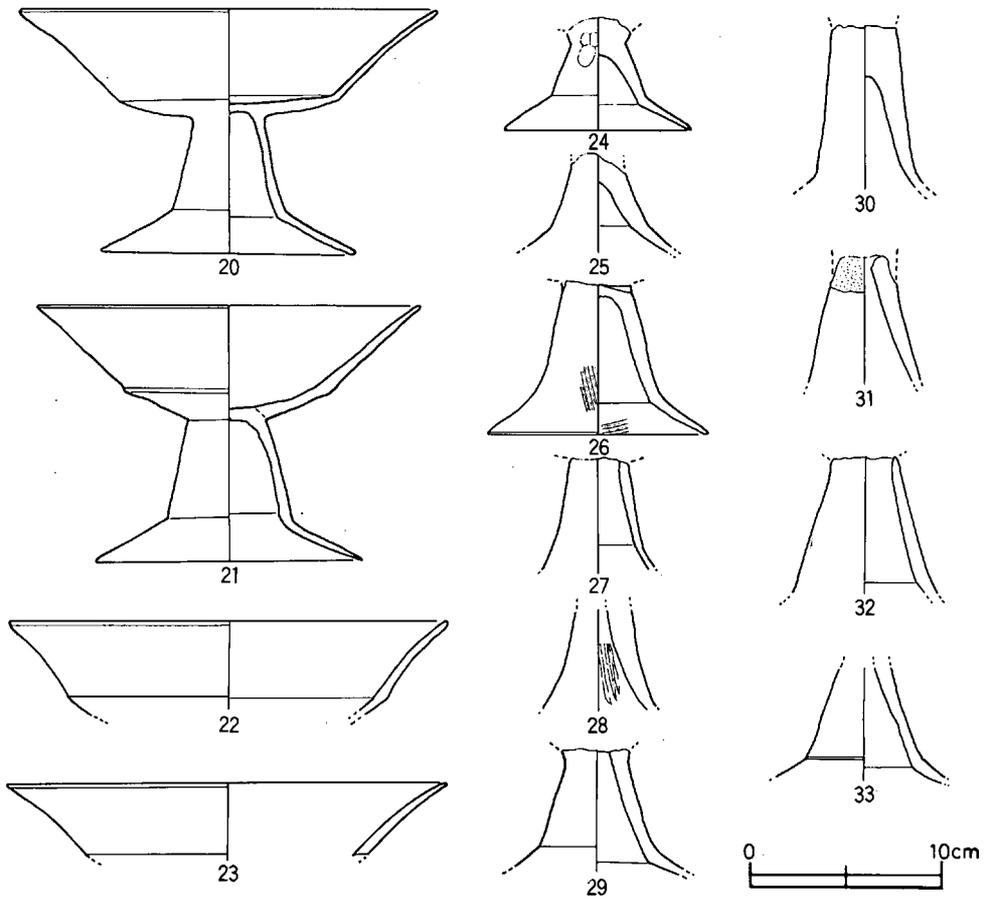
18は、器種不明のものである。直口壺のようなものの口縁かと思われたが、破片の下端の部



第30図 1号住居址 出土遺物1

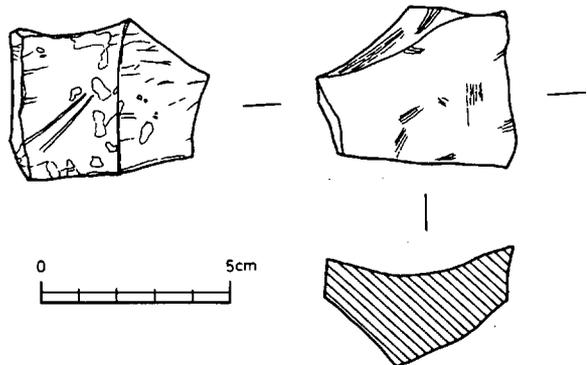
分で内傾ぎみに屈曲するようなので鉢の可能性も捨てがたい。19は、台付鉢形土器で深い体部に低い台をもつ。内外面ともハケ調整で、底面に指圧痕を残す。

高杯は、全形のわかるものは2点のみで、他は杯部、脚柱部の破片である。20・21は完形ではないが、全形を知ることのできるものである。杯部は、20と21では深さがいくぶん異なるが、



第31図 1号住居址 出土遺物 2

やや浅めで口縁は外方に向けてゆるやかにのび、口縁端はまるみを帯びる。脚柱から屈曲して裾部にいたる。端部は口縁と同様にまるくおさめている。この2例はいずれも水こし粘土を用いているが、器面が剝離しており調整は不明である。成形は21の



場合、脚柱と杯部、杯部の立ちあがる部分で接合のおこなわれていることがわかる。21・23は杯部の破片である。形態は20・21と同様であるが、胎土は水こし粘土ではなく砂粒を多く含んでいる。いずれも器面は、平滑に仕上げられている。23は、その下端に接合のおこなわれたところから剝離しており、この手法は21に認められるものと同じである。24～33は脚柱部である。

脚端まで残存するのは、24・26の2点のみしかない。胎土はいずれも水こし粘土ではなく、なかには砂粒を多量に含むものも見うけられる。形態の特徴から、20・21に近似するもの（24・29・33）、屈曲のややゆるやかなもの（25～27・32）、脚柱が細く器壁の厚いもの（28・30）、脚柱の著しく短かいもの（24・25）の4種に大別できる。杯部との接合は、24・25・30など中実になるものはソケット状と考えられる。以上のうち、24・25は脚高、脚径が小さく、他例に比し短脚である。

砥石は、長さ5cmほどのもので6面のうち5面が使用されており、自然面をのこしているのは1面のみである。石材は、流紋岩と考えられる。

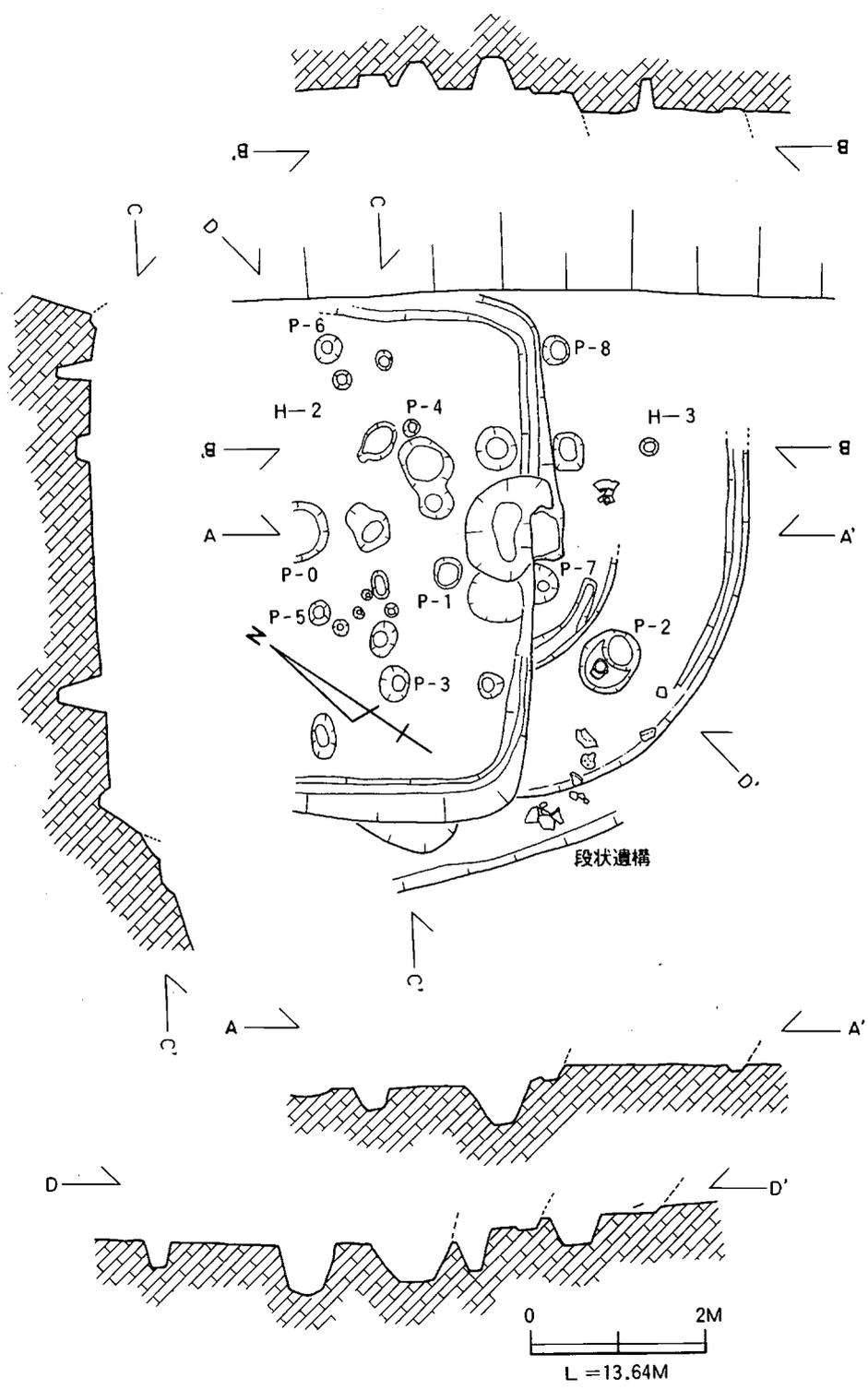
(2) 2号住居址

北半の部分が道にかかることから、南半分のみ調査をおこなった。このため全形を明らかにすることはできなかったが、検出した範囲内では東西方向に6mの長さを測り、壁体の状況を考慮にいれば一辺6mの平面方形の竪穴住居址であるといえる。壁体の深さは、西側の残存のよい最深部でおよそ60cmを測るが、斜面の傾斜にしたがって東端の部分にいたっては壁体溝がかるうじて残存する程度であった。床面は1号住居址と同様に地山を削り、東端の一部で埋めだしをおこなっている。柱穴については、2号住居址の床面内には、一部が重複している3号住居址のものも混在しているため判別は困難だが、中央土壌と考えられるP-0との位置関係から、P-3・P-4を含めた4本柱を想定した。P-3は上面径40cm、底面径20cm、深さ50cmほどの規模で、P-4は径はP-3を上回るが、深さについては大差ない。P-0は、中央土壌と考えられるもので半分しか検出しえなかったが、径70cm、深さ10cm足らずの浅い皿状を呈している。P-1は90×40cmほどの不整形を呈し、深さは約40cmである。共伴する遺物（40・42）から2号住居址に伴うものであり、1号住居址に見られたものと同様のものと考えられる。それ以外の柱穴などについては、1号住居址に認められたような径20cmほどの小さいものも含まれているが、本来2号住居址に伴っていたものかどうかの判別は困難である。なお、両側部分に円弧状のおちこみが認められたが、これは埋積土が異なり明らかに後世の攪乱というべきものである。

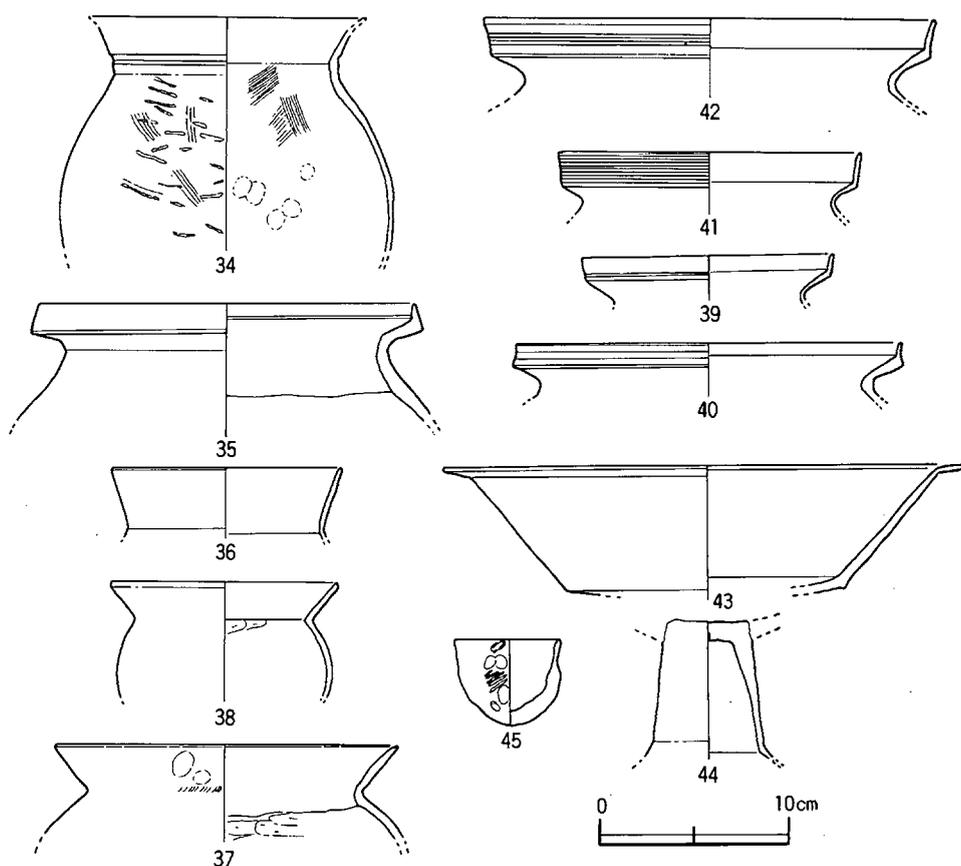
遺物

34・35は壺形土器である。34は口縁端を欠いているが、外反する口縁部をもつ。ごく短かい頸部に凹線状の痕跡が認められる。胴部は外面に不規則な叩き状のものがあがり、器面は凹凸が著しい。灰黄色を呈し、砂粒を胎土中に多く含む。焼成は良好。35は短かい頸部をもち無文である。口縁端は内傾する。

36～42は甕形土器である。くの字状の口縁と二重口縁の二者が存在する。37は端面に面をもち、その中ほどが凹む。外面の屈曲部には、こまかな刺突文様を施す。1号住居址出土の5に



第32図 2・3号住居址・段状遺構 平・断面図 (S = 1/80)

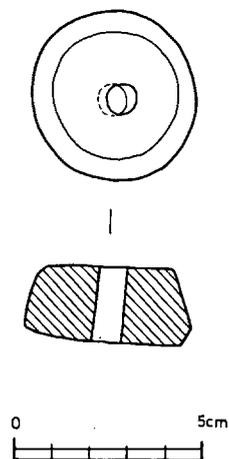


第33図 2号住居址 出土遺物

形態は近いものといえる。36・38は小型のものである。39は器表面の状態が良好でないが、わずかに外反する拡張面の下端近くに2条の浅い沈線が認められる。40は、二重口縁の端面がヨコナデによって凹面となるものである。41・42は、外反する二重口縁の端面に櫛描沈線を施す。41は9条、42はのこりが悪いが4条が認められる。

43・44は高杯形土器である。43は、著しく外方に屈曲する端部をもつ。赤味を帯びた色調で、胎土中に砂粒を多く含む。丁寧なナデが施されており、内面にはたて向のハケがある。44は脚柱部であるが、水こし粘土を用いたもので、43とは個体が異なる。

45は手づくねの土器である。口縁端部をすこし欠いている。指頭圧痕が顕著なほか、叩きに似た痕跡が認められる。焼成は良好だが、全体に黒っぽい。胎土は高杯などに見られるような水こし粘土と思

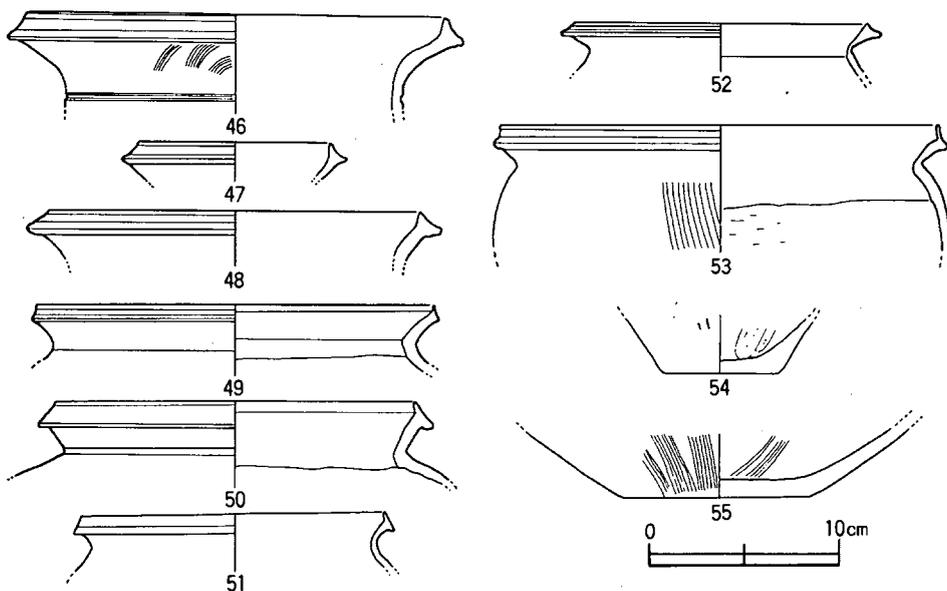


われる。なお、この他に土製紡錘車が出土している。

(3) 3号住居址

2号住居址と複合して存在するもので、切り合い関係、出土遺物などからみて2号住居址に先行するものと考えられる。壁体の残存から、径6mほどの円形の竪穴住居址と考えられるが、大半の部分を2号住居址によって切られていること、床面が2号住居址より20cmほど高いことなどの理由により、壁体は全周の5分の1ほどが検出されたにとどまる。壁体溝の遺存は、10～15cmほどで、東側に向けては斜面の傾斜によって徐々に深さを減じ、痕跡程度になってしまう。西側の段状遺構に近い部分には、3号住居址の主体的な遺物より明らかに後出の土器の一群が存在するが、これについては段状遺構との関連で述べるべきものと考えられる。柱穴は、床面の部分にいくらか認められるが、2号住居址と重複する部分では3号住居址のものを抽出するのは困難であるが、壁体溝からの距離、遺存する底面の深さなどを考慮にいれたうえで、P5～8の4本柱を想定した。3号住居址床面に存在するP-2は、出土遺物(60)から後出のものと考えられる。

P-2北側に存在する円弧状のおちこみは、その形態が別個の住居址の壁体溝のようなものかと思われたが、残存がごくわずかであり、その性格を断定するにはいたらないが、3号住居址に付帯するものという可能性も指摘できるのではないかと思われる。



第34図 3号住居址 出土遺物

遺物

遺物は土器片のみであり、量はすくない。

壺形土器(46~50)は、長頸壺と考えられるもの(46・48)と、頸部の短いもの(49・50)が存在する。いずれも口縁を肥厚させ、端面はヨコナデによる凹面となる。

甕形土器(51・52)は、2点存在する。52の口縁端面は、やや深く凹んでいる。

鉢形土器(53)は1点のみで、端部は直立ぎみに細くたちあがる。端面は、壺形土器などと同様に凹面となる。器胴外面には、ハケ目が施されている。底部は2点出土した。いずれも平底である。

(4) 段状遺構

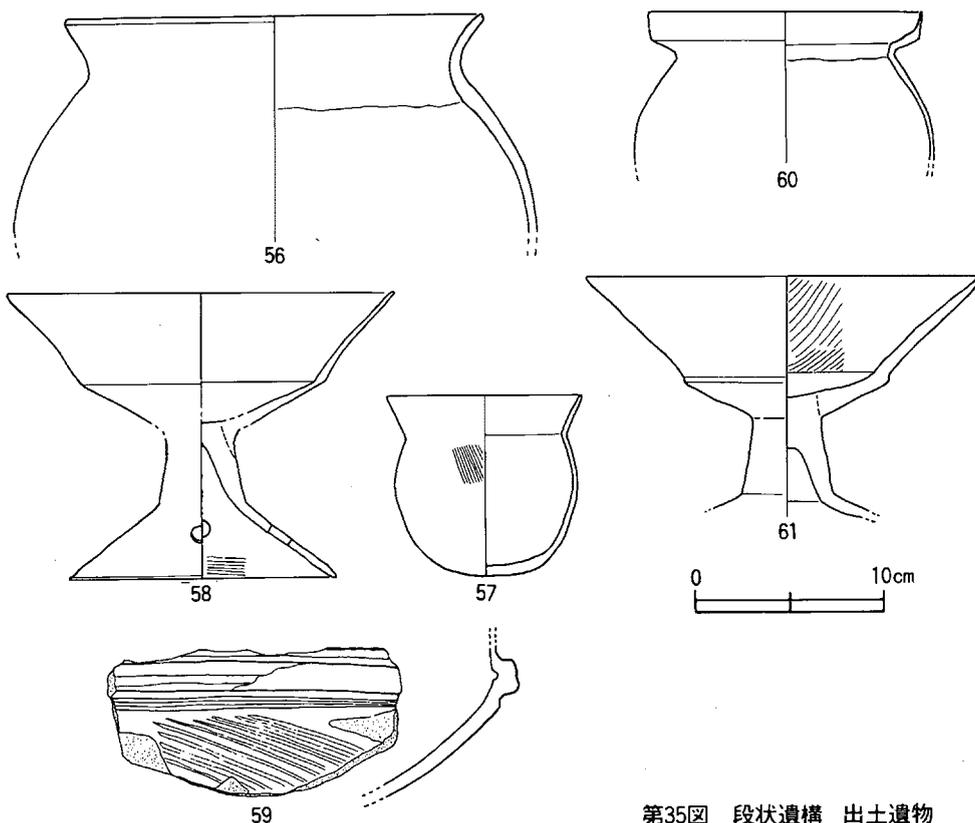
2・3号住居址の西南側に位置する。削平などのため、段状となる部分は東西2.5mほどが認められるにすぎない。上面はかなり損われているようであるが、残存するかぎりでは傾斜面を深さ15cmほど掘りくぼめて平坦面をつくり出している。平坦面は2号住居址に切られるため、地山を整形している部分に限ると幅50cmが検出されたにとどまる。平坦面の部分からは、甕形土器(56)が出土した。

3号住居址西端の部分には、3号住居址より明らかに後出する土器(57~59)が存在した。これらが出土したレベルは、3号住居址床面より高く段状遺構の平坦面に等しい。さらにこの土器の存在した部分では、3号住居址のプランがいくぶん不鮮明となることから、3号住居址が廃棄され埋没したのちに段状遺構がつくられたとみることができるといえる。3号住居址内のP-2は、出土する土器(60)から3号住居址より後出と考えられたものだが、位置的に近接するという点のみから判断すれば、段状遺構に伴うものである可能性はある。

以上のように、主に切り合い関係などから3号住居址→段状遺構→2号住居址という推移が考えられるが、段状遺構は遺物の出土状況から3号住居址の廃棄後整地した部分の一部も含んだ範囲にひろがっていたものと思われる。さらに、3号住居址西南端部分で壁体溝が消失していることからみれば、段状というよりむしろ溝状のものを想定したほうが良いかもしれない。

遺物

遺物は、段の部分から出土したもの(56)、3号住居址上部のもの(57~59, 61)、P-2出土のもの(60)などを一括して述べる。56は甕形土器で、器面が剝離しているため調整は不明である。赤味を帯びた褐色を呈し、胎土中に砂粒を著しく多く含む。口縁はゆるやかに外反し、端部はまるくおさめる。57は小型の甕形土器である。口縁はくの字状に外反する。底部はほとんど丸底である。58は高杯形土器である。胎土中にはこまかな砂粒を含む。59は特殊壺の胴部破片で、これ以外にも攪乱土層中などで出土したものもあるが、それらは別にとりあげること



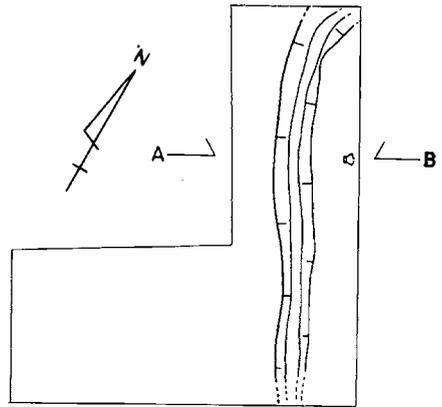
第35図 段状遺構 出土遺物

とする。これは外面に暗赤色の顔料を塗布している。胎土は灰色ないし灰茶色を呈し、非常にきめがこまかい。突帯は1条しか認められないが、数条からなるものと思われる。60は甕形土器である。胴下半から下を欠いている。器表面は剝落しているため調整は不明である。器壁は胴部で特にうすい。胎土中にはこまかな砂粒を多く含んでいる。61は3号住居址内の床面からかなり上で出土したもののだが、形態、手法が58に近似する。杯部のたちあがりは、58よりやや長い。

(5) 4号住居址

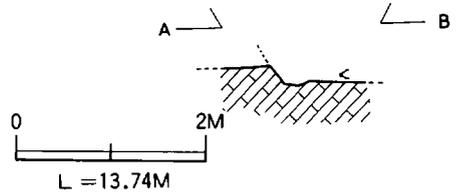
調査範囲南端の1号住居址より南の部分に設定したトレンチで検出されたものである。遺構は、トレンチ東半部の傾斜面の下のほうにあたる東西1.7m、南北4mほどの範囲に認められ、地山面を掘りくぼめた幅40cm、深さ30cmの溝状の部分と、その東側につづく平坦面からなっている。平坦面の部分は、溝の上面から10cmほど下がっており、幅70cmほどにわたって検出されたが、トレンチを設定する際に作付のおこなわれているところを避けざるを得なかったため、さらに東にひろがっていることが予想されたが、その全容を明らかにすることはできなかった。遺構の上面は、耕作などによって著しく損われているため残存の状態は良好とはいえ、特に

トレンチの南半部では攪乱がさらに深くまでおよんでいる。遺構の存在が確認されたのち、拡張をおこなった西側部分(2×2m)では、遺構や本来の地山の傾斜は見出せず攪乱がかなり広い範囲にわたっていたことを追認したにとどまった。この遺構の性格については、形態からみて斜面上に構築された竪穴住居址の壁体溝から床面の部分と考えられるが、検出した範囲がせまかったためか柱穴などは見出せなかった。



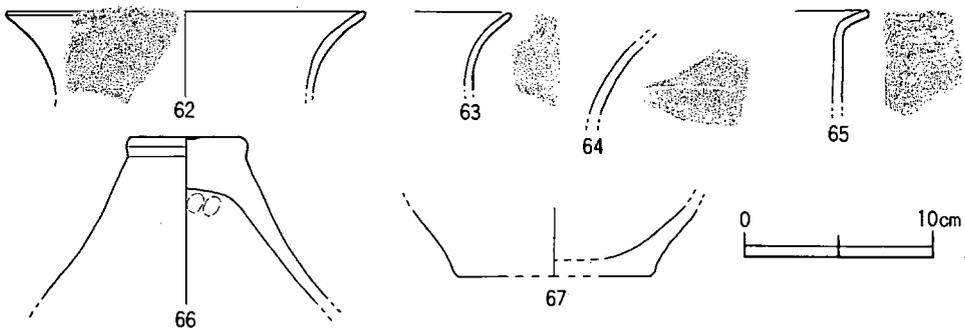
遺物

62~64は壺形土器である。口縁はゆるやかに外反し、端部には施文はない。64は頸部の破片で一条の沈線が施される。65は甕形土器の口縁部である。口縁端は斜め上方に拡張する。残存する限りでは施文はない。以上のものはいずれも白っぽい色調で、こまかな砂粒を多く含むが焼成は良好である。66は蓋形土器である。頂部は平坦面となる。器面は平滑に仕上げられているが、内面に指頭圧痕が散見できる。67は壺形土器の底部である。胎土中には粒の大きい砂粒が著しく多く含まれる。焼成が良好でないためか、器面の剥落が特に著しい。



第36図 4号住居址 平・断面図

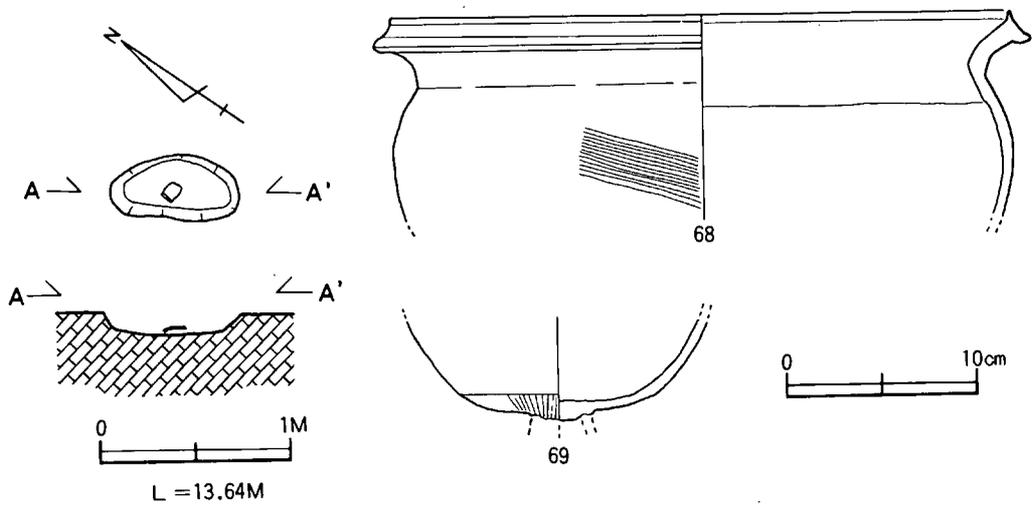
以上の遺物は、その特徴から弥生時代前期後半に属するものと考えられる。



第37図 4号住居址 出土遺物

(6) 土 壙 2

70×30cmほどの規模で、まるみを帯びた不整形を呈する。上部をかなり失われており、深さ

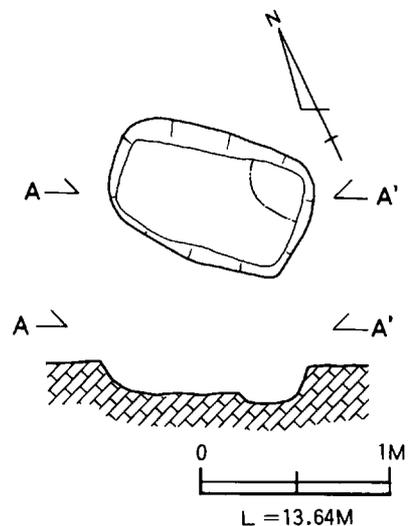


第38図 土壌2 平・断面図及び遺物

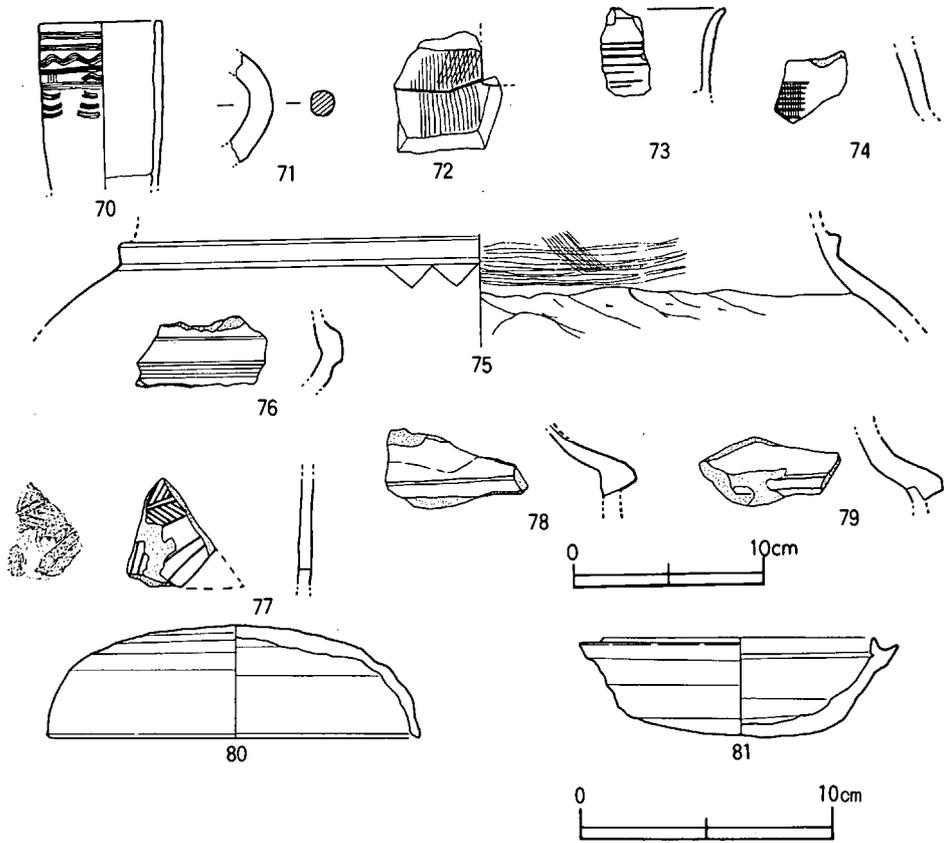
は15cmほどが残存しているにすぎない。埋積土中に若干の土器片を伴うが、図示できるものは鉢形土器片・高杯の杯部の各1点が存在するにとどまる。68は、白味を帯びた黄褐色を呈し、胎土はきめ細かく、砂粒は多くない。焼成は良好。口縁部の拡張面は、ナデによって生じた凹みをもつ。器胴外面には、ハケ目が認められる。口径は推定復元である。69は、高杯の杯部であるが口縁端部を欠いている。赤味の強い褐色を呈しており、胎土中に多量の砂粒を含む。器表面は荒れており調整の観察は困難であるが、底面の近くにハケ状のものがわずかに認められる。底面には、脚部を接合した痕跡があり、脚柱部は中空のものであったと思われる。杯部の形態は、まるみをおびた椀状に近いものというべきである。

(7) 土 壌 3

確認調査の際に、その一部が検出されていたものである。長径1.0m・短径0.7mの、長方形に近い長円形を呈する。深さは20~30cmほどであるが、東隅の部分はまるく凹んですこし深い。確認調査時には、土壌墓を考えていたものであるが、上部をかなり損われていることなどにより、その性格を明らかにするのは困難であり、土壌墓であることを積極的に認める理由もない。土壌内から若干の土器片が出土したが細片のため図示できるものはない。弥生時代後期のものと考えられる。



第39図 土壌3 平・断面図



第40図 遺構に伴わない出土遺物

(8) 遺構に伴わない遺物

70・71は、いずれも白味を帯びた黄灰色を呈し、胎土はきめこまかい。70は口頸部のみの残存であるため器種は不明である。また71は把手状のものだが70と同一個体か否かはわからない。

72は、長方形の透し孔が一部認められ、器台形土器と考えられる。器壁は著しく厚い。赤色顔料の塗付はないが、胎土そのものは73～79と共通し暗茶灰色を呈している。

特殊壺・特殊器台の破片は全部で20片ほど存在したが、図示しうるものは73～79と前掲の59の8点のみである。これらは、いずれも赤色顔料の塗付が認められ、73、75、78、79、59は暗茶紅色、70・77は橙色を帯びた淡い黄茶色を呈する。73・75は内面にも顔料の付着がある。75は、内面の下半部では、ヘラ削りによって掻きとられている。73・75は同一個体の可能性があるものであり、特殊壺・特殊器台とも数個体ずつ存在したもののようである。

81・82は須恵器である。ロクロの回転は時計まわり、法量は81が口径14.7cm、器高4.6cm、82が口径12.6cm、器高4.0cmをはかる。攪乱土層中からの出土である。

5. 小 結

山津田遺跡の調査では、弥生時代のものを中心とする竪穴住居址・土坑・溝などの存在が認められた。個々の遺構の時期は、4号住居址が弥生時代前期後半、3号住居址・土坑2が弥生時代後期の上東・鬼川市Ⅲ式併行（註13）1・2号住居址が下田所式に併行、溝12が古墳時代後期（註14）という年代を与えることができる。

山津田遺跡の主体をなすのは、弥生時代の住居址など、集落にかかわる遺構である。これについては、付近の沖積微高地上の集落の内容が明らかでないため（註15）対比すべき資料を欠いており、また山津田遺跡の資料がその時期の集落の一般的なありかたを示したものであるかどうか、長期にわたって安定した居住の場となっていたかどうかに関しても明確にすることは困難である。

出土遺物のなかには特殊壺・特殊器台の破片が存在し、特殊壺の胴部の破片59の出土状況からみて、これらは段状遺構に共伴したものである可能性が強い。段状遺構は、2・3号住居址と切り合い関係にあり、さらに後世の攪乱が及んでいるため残存がわずかであるが、先後関係は3号住居址→段状遺構→2号住居址という推移を想定しうる。59は、遺構の基底面から若干浮いた状態で出土しているため、本来は遺構の付近に破碎された状態であったものが埋積の過程でおちこんだものと説明できるかもしれない。この遺構の性格については、通常は埋葬・祭祀に伴うことの多い土器片の存在を根拠に、ただちに埋葬・祭祀にかかわるものと断定するには遺構そのものの残存がわずかであるため疑問が残る。

註

- 註1 「三須丘陵」の呼称は、この丘陵が合併前の三須村の領域に存在することに由来するものであり、現在の総社市三須という地名は作山古墳から北にかけての部分に用いられる。
- 2 西川宏「こずくりやまこふん」『岡山県大百科事典(上)』山陽新聞社、1980年。
- 3 葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35 岡山県教育委員会 1979年。
- 4 『岡山県遺跡地図』第三分冊、岡山県教育委員会、1975年による。
- 5 これらは『吉備路風土記の丘』として整備がなされている。
- 6 これまでのところ地下遺構は確認されていない。
- 7 岡山大学考古学研究所『三須丘陵遺跡分布調査報告』 1976。
- 8 昭和55年7月から調査を実施している。
- 9 弥生時代後期初頭の土器などが出土している。高杉鋭一氏蔵
- 10 平井勝「殿山遺跡・殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』47 1982年 岡山県教育委員会。
- 11 遠山荒次「岡山縣の古墳（其ノ四）」『考古學雜誌』16卷3号 1926年ほか
- 12 註4書では「江崎5号墳」となっている。
- 13 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977年 岡山県教育委員会
- 14 P. 100参照
- 15 前掲の美濃田遺跡をはじめとして土器の出土が注意されているにとどまっているのが実情である。



1. 江崎地区圃場整備事業区域（西から）



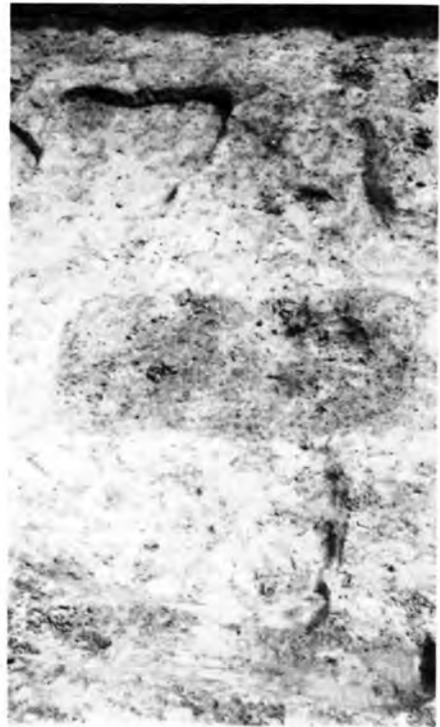
2. 圃場整備事業地と備中国分寺五重塔



1. 山津田遺跡遠景（東から）



2. 山津田遺跡南半部近景（南から）



調査区北半部遺構検出及び掘り上りの状況

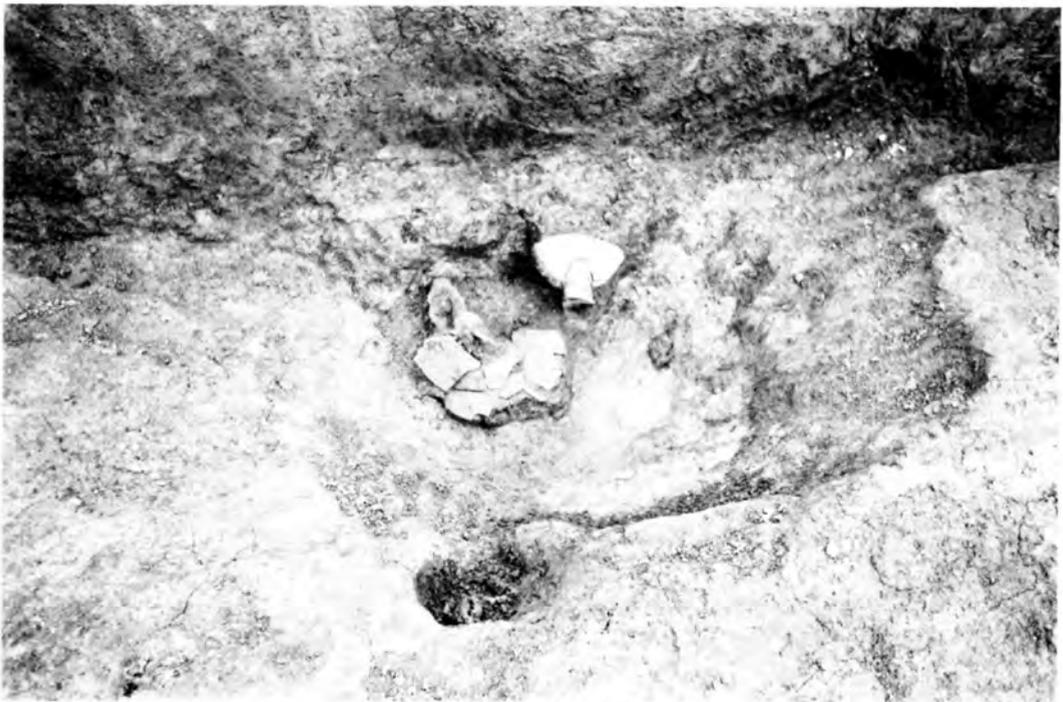
図版38



調査区南半部遺構検出状況（上・南から、下・北から）



1. 1号住居址（東から）



2. 1号住居址内土壙遺物出土状況



1. 2・3号住居址及び段状遺構（東から）



2. 段状遺構遺物出土状況



1. 4号住居址検出状況



2. 4号住居址

図版42



5



18



13



43



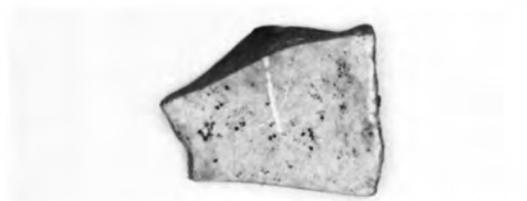
14



21



45

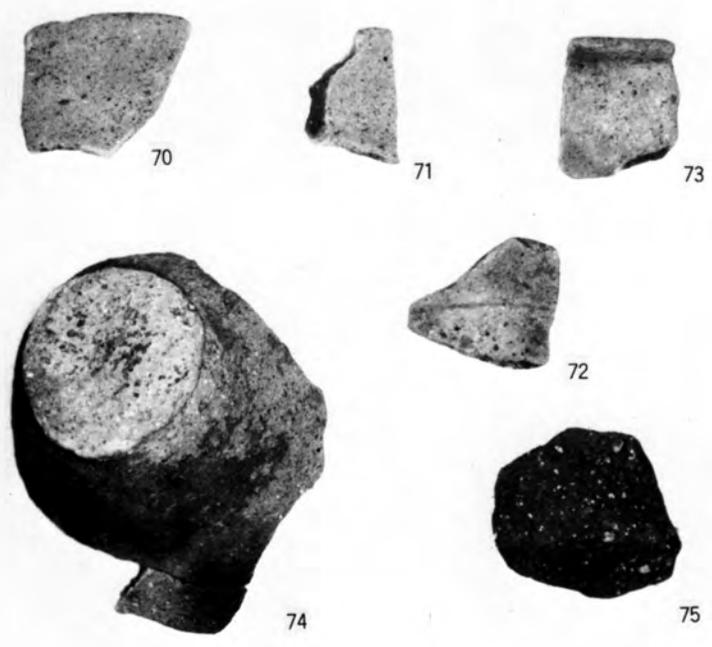
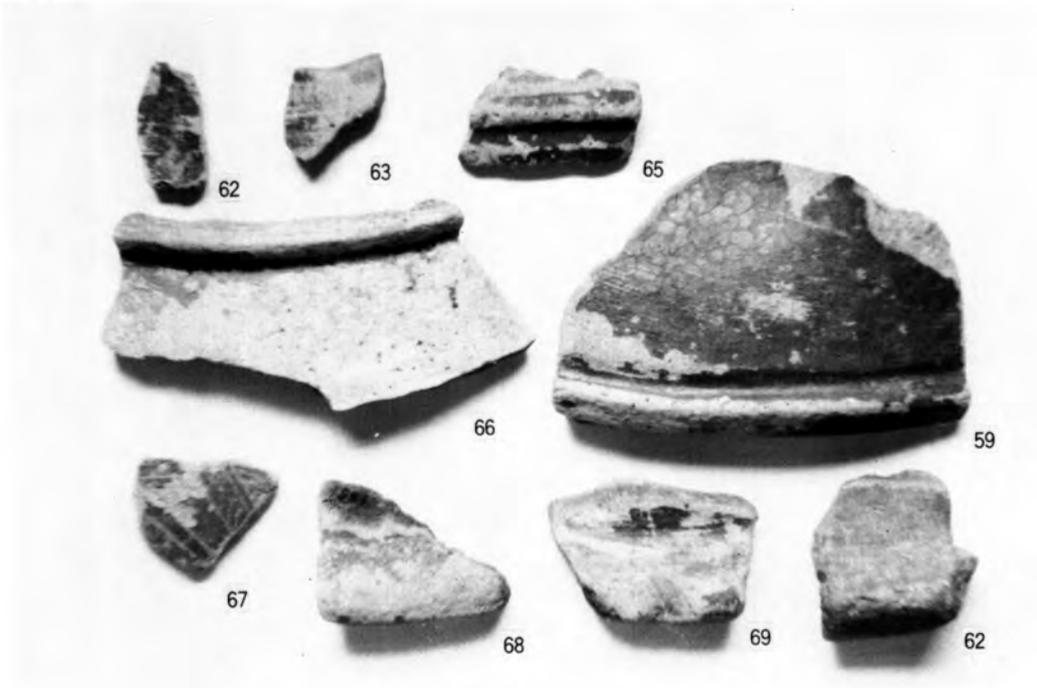


山津田遺跡 出土遺物 1



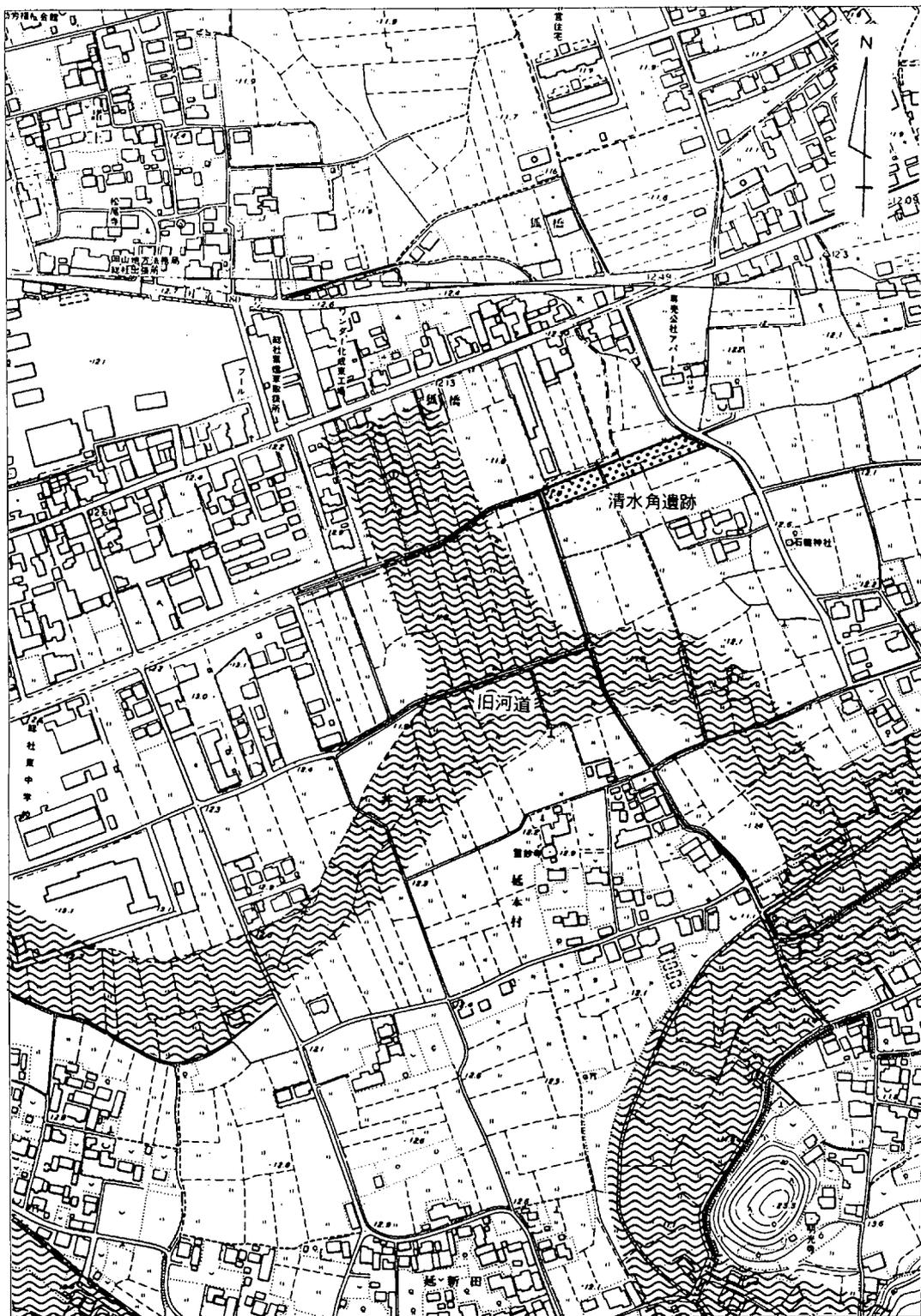
山津田遺跡 出土遺物 2 (上・H-3 出土)

図版44



山津田遺跡 出土遺物 3

第 4 章 清水角遺跡



第41図 清水角遺跡周辺地形図 (S = 1/5,000)

1. 調査にいたる経緯

都市計画街路総社駅前線は、幅員16mの幹線道路である。国鉄吉備、伯備線総社駅を起点に、国道181号線の南を併行する状態で東方にのび、最終的には幅員22mの東総社中原線と大字井手付近で合し、さらに東方にのびて大字天原付近で国道181号線に合流する計画である。この路線は、昭和56年度の段階ですでに起点から約2.2kmの工事が終了しており、57年度事業として約140mの延長工事が行われることとなった。

予定地周辺は、これまでに遺跡の所在は確認されていなかったが、真壁遺跡（註1）の発掘調査における知見や周辺の地形観察から、微高地の拡がりが想定された。このため担当課に申し入れを行い、工事初期段階の側溝工事に立会することとなった。

立会は昭和57年5月21日に行い、遺物は殆んど採集できなかったものの、時期不明ながら溝、土壌などいくつかの遺構を検出した。このため担当課と協議を重ねたが、田植えの時期が迫っており、用水の確保が急務であるため側溝工事は継続することとし、それ以外の工事は中断することとなった。しかし前述したごとき状況であるため、遺跡を回避しての保存は困難であった。一方工事終了予定期限は10月末であり、このため緊急に発掘調査を実施することとなった。

2. 遺跡の位置

遺跡は、総社市井手字清水角に所在する。

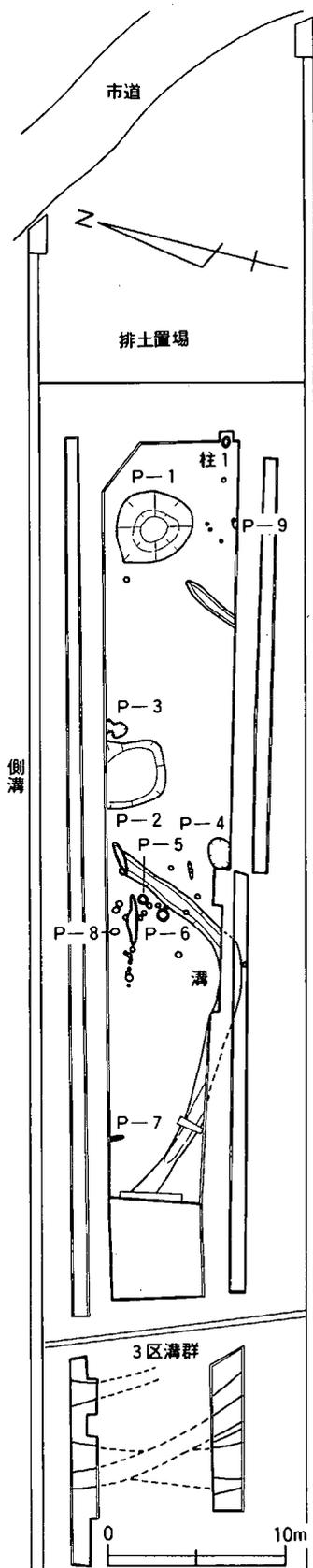
遺跡名は、将来この路線が延長される計画であり、そうした地域での遺跡の存在も想定されるため、小字名を付して「清水角遺跡」と称することとした。

遺跡周辺は総社平野の真只中であり、複雑に旧河道がいくつにわたっている（註2）。現状では旧河道内の埋積や市街化の進行のため明瞭ではないが、現水田面に僅かながら高低差として反映されている。この地区の南には「宮瀬川」（註3）に比定されている東流する旧河道があり、それと合する形で字延本村の北にももうひとつの西から東流する旧河道がみられる。本遺跡の周辺は、市街化に伴う地上げや宅地化が進行しており、必ずしも明確な状態ではないが、北から南流する小河道がうかがえる。従って南北方向に長軸をもつ微高地が推定され、道路延長部分はこれを横断することとなる。

3. 調査の概要

(1) 調査の方法

調査は昭和57年7月15日に着手したが、雨のため排水作業の繰り返しとなり、8月7日に実質18日を費して終了した。



第42図 清水角遺跡遺構配置図 (S = 1/400)

調査範囲は、道路予定地の長さ約140m、幅16mの2,240㎡である。現水田の一枚ごとの単位をもとに、西から東へ1～4区と呼称することとした。調査は、西から東へ向うにつれ、各水田ごとに約20～30cm前後ずつ高まっており、1区から西方へは逆に低くなっていて、この部分に南流する小河道の存在がうかがえる。

この部分の土層については、調査前年の周辺の工場の建設時における掘削土層の断面観察から、耕土直下から青灰色粘質土層が確認されており、また周辺地においても、2区の側溝工事の掘削時に同質同色の土層を確認しており、東へ向うにつれ褐色砂質土層が西方へ下降することが判明した。また4区では、工事着手前の表面採集の段階で、細片や小破片ながら土鍋などの中世遺物を採集したが、他の区からはできなかった。こうした状況から、1、2区においては遺構、遺物ともに検出されておらず、また土層の観察からも遺構の存在の可能性は後世の水田層を除いては殆んどないと判断されるため、調査を3、4区において実施することとした。遺構は、耕土及び床土層を除去した段階の褐色～茶褐色砂質土層から検出された。

(2) 遺構と遺物

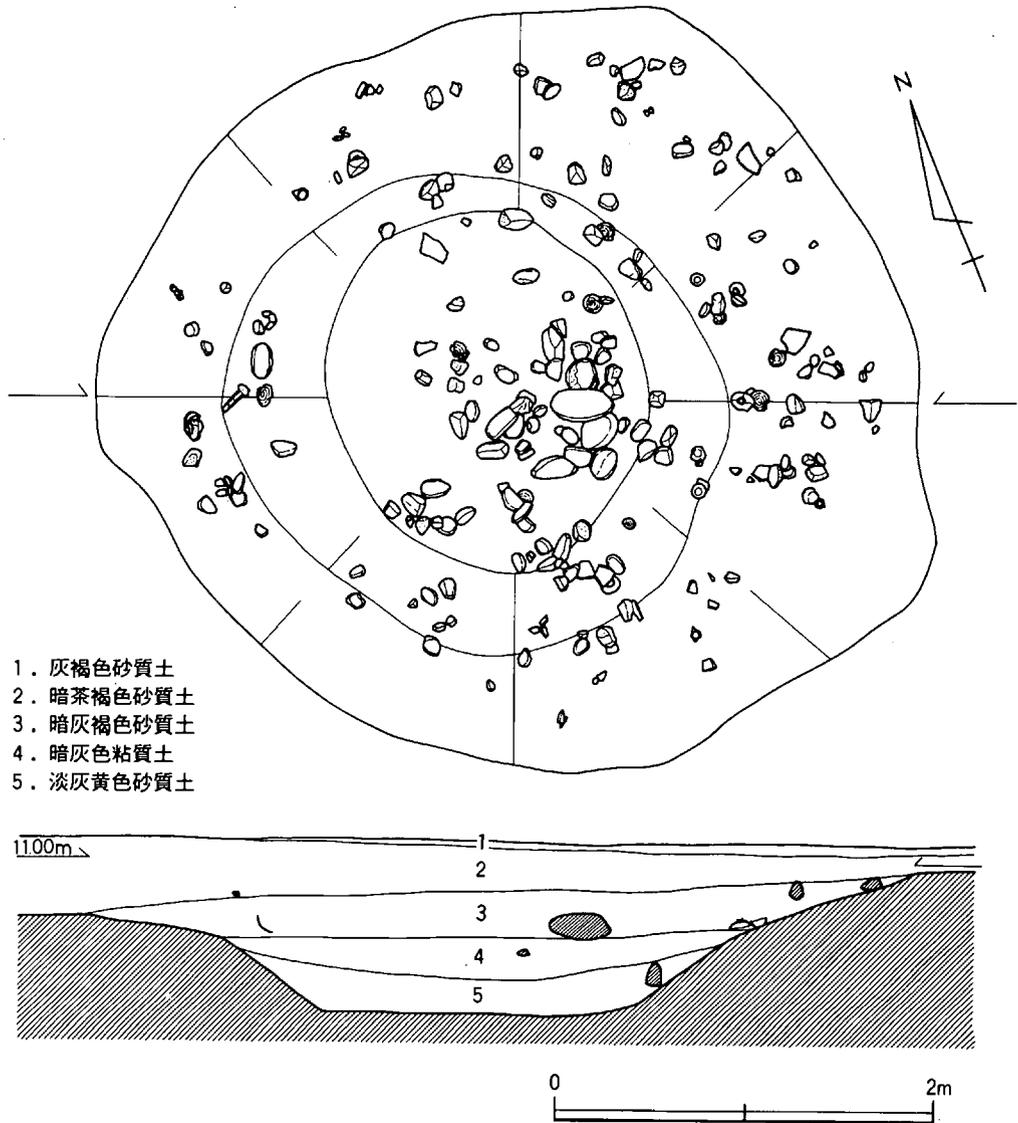
調査は、側溝の内側に排水溝を兼ねた幅約1mのトレンチを設けた。3区ではこのトレンチにおいて数条の溝を検出したが、トレンチ間の道路中央部分は他に適当な場所がないため表土層の耕土置場とせざるをえず、溝を平面的にとらえることはできなかった。溝内からは遺物の出土はない。埋積土層は灰褐色～淡褐色を基調とした砂質土で、全体に淡色系の色調を呈している。4区の遺構内埋積土が、褐色を基調としながらも暗色を帯びるのは異なっている。4区から検出された遺構は、溝、土壇、柱穴などであるが、数的には多くない。柱穴は中央部分を中心に十数穴検出されたが、規則的な配置状況ではない。土壇は主として柱穴群より東で検出された。

4区東端は表土層の耕土置場とせざるをえなかったため、調

査は実施していないが、側溝工事の際の土層観察においては遺構は検出されなかった。

土壙 1 (井戸状遺構)

長径450cm, 短径400cm, 深さ75cmの浅くやや歪つな楕円形状の平面形を呈す。掘り込みはゆるやかで、中間部でやや角度が急となっており、底部はほぼ平らである。全体としては、大きく浅い皿状の形態である。壙内の埋積土は三層に分れ、第3層は下層がやや暗色に漸移的に変化する。遺物は3, 4層が圧倒的に多く、5層はきわめて少ない。この土層は、規模のわりに浅いが底部は湧水層であり、井戸としての可能性を考えておきたい。



第43図 土壙 1 (井戸状遺構) 平・断面図 (S = 1/40)

遺物は、土師質高台付椀、小皿、須恵質こね鉢、青磁、白磁、土鍋、同支脚、カマドなどであり、これらに混在して挙大の礫が多数混在していた。

土師質高台付椀（1～28） 俗に「早島式土器」（註4）と呼ばれているもので、約100個体以上が出土した。このうち、口径、器高、高台径などが測定可能で、図示できたのは約30個体弱である。

体部は、底部から緩やかに内弯しながら斜め上方へたち上って口縁部にいたり、端部はまるくおさめられる。体部中位あたりに鈍い稜をもつものが多い。また口縁部下にヨコナデ調整による浅く広い凹状部を有するものが多いが、それがあまり目立たぬものも存在する。外面底部の高台はいずれも貼り付け高台で、断面は三角形状を呈すものが大部分であるが、中には崩れた台形状をなすものもみられる。内面は不定方向のナデを施し、いずれも平滑な面をなすが、外面は口縁下のヨコナデを施した部分を除いては未調整のものが多く、器面に凹凸があり平滑さを欠く。高台の貼り付けは、やや丁寧なものもあるが大部分は雑な貼り付けである。5には5～8mm、27には1mm弱の小孔が外側から焼成後に穿たれている。また1には暗文がみられる。胎土は1mm前後の砂粒をかなり多く含み、中には3～5mm前後の大粒のものもみられる。焼成は良好で、内面に重ね焼きの痕跡と推定される円形の高台痕がみられるものもある。色調は、淡褐色～淡黄灰白色である。

全体的な印象としては、口径が小さく、器高が低くて粗雑な調整の椀といえる。28は口縁部を欠くが、推定口径9.3cm、推定器高2.8cm、底径4.4cmである。胎土、焼成は殆んど変わらないが、淡赤灰色を呈すやや小型のものである。

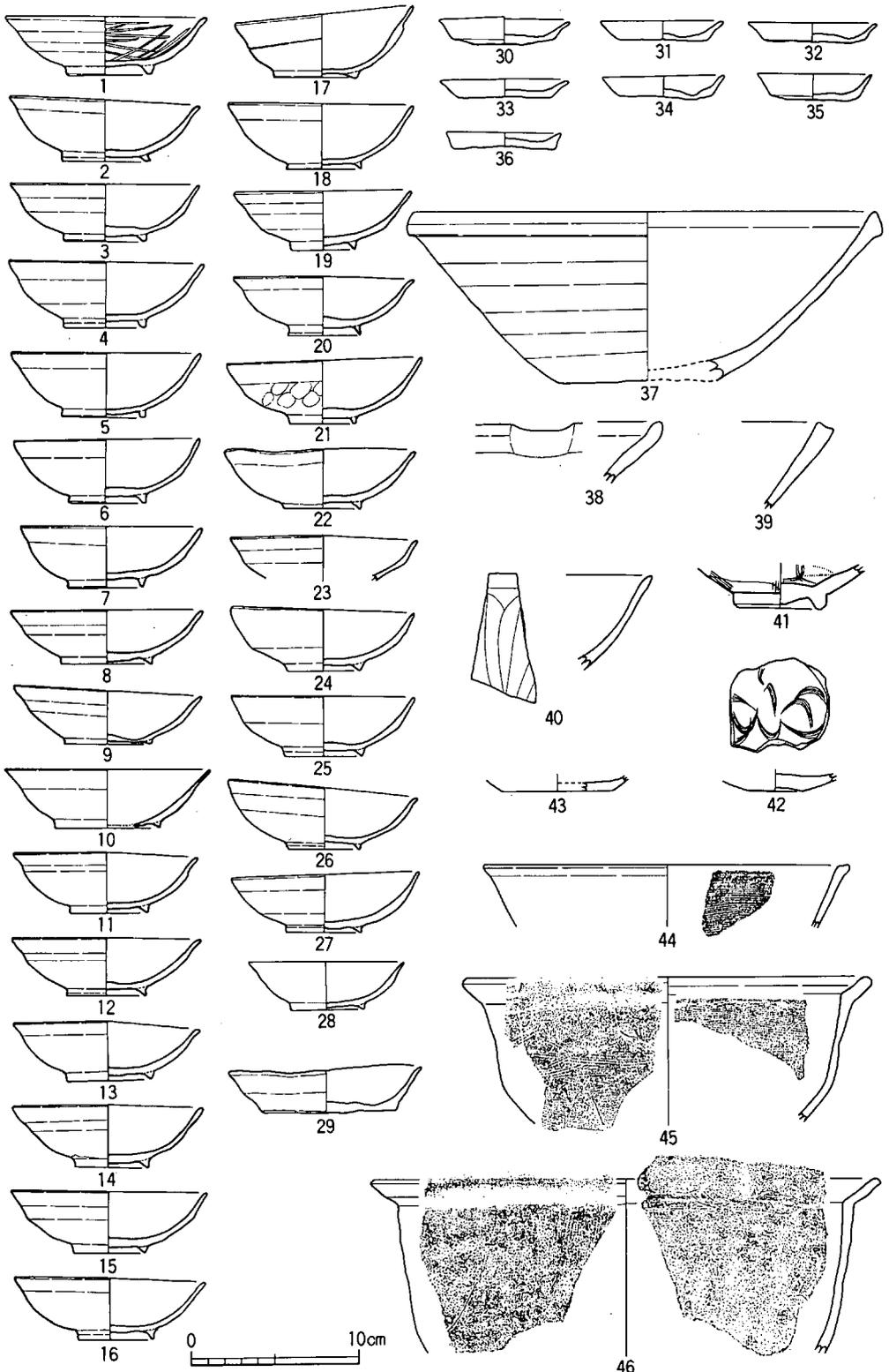
なお図示した27個体（28を除く）の平均値は、口径11.25cm、器高3.57cm、高台径4.7cmである。

土師質皿（29） 1個体のみ出土した。体部から斜め上方へたちあがり、口縁端部はやや尖り気味にまるくおさめる。調整は内外面ともヨコナデを施しているが、成形時の凹凸が底部内面に明瞭に残っている。底部は回転ヘラ切りである。水漉粘土に近い良質のもので、焼成は良好で淡褐色を呈している。

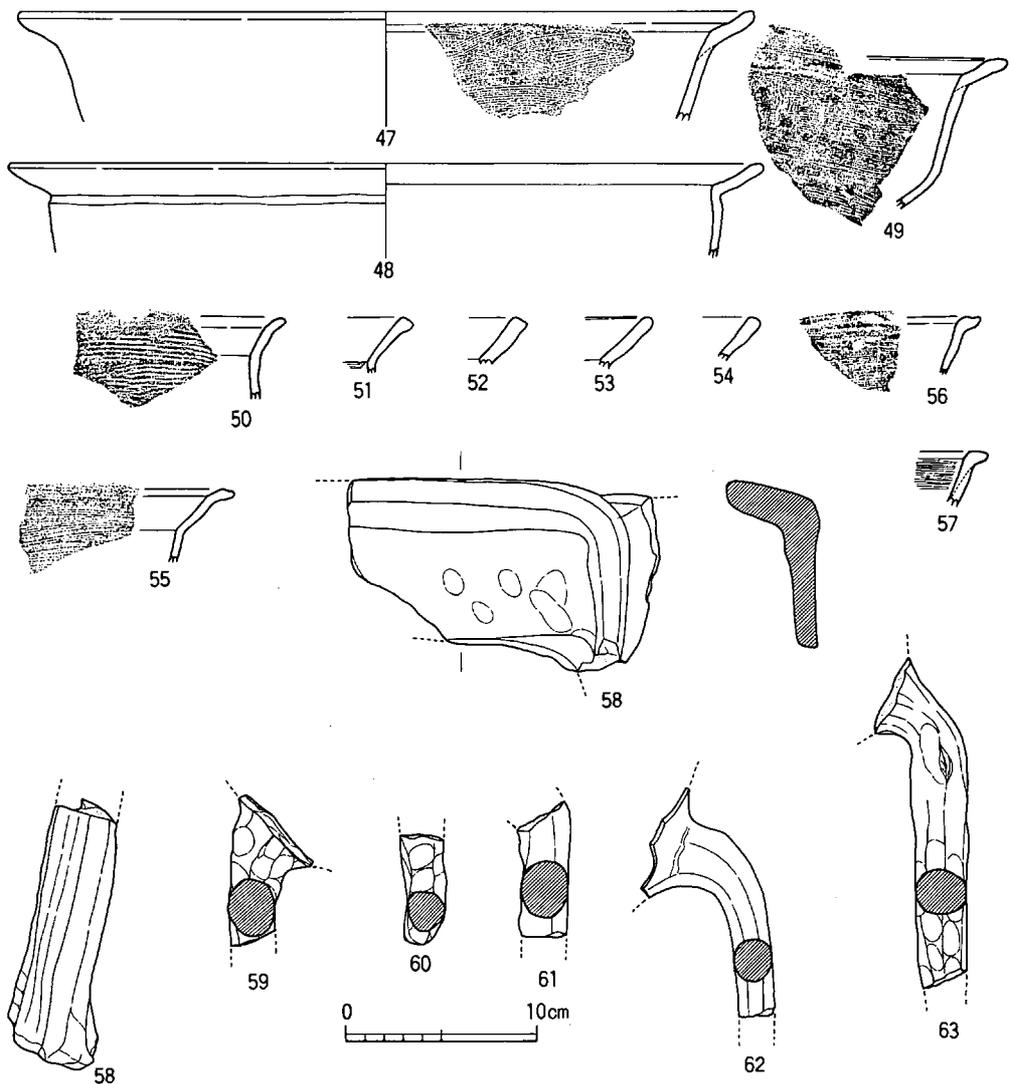
土師質小皿（30～36） 数十個分出土しているが、口径、器高ともに測定しうるのは図示した7個体である。底部はいずれも平底であり、斜め上方へたちあがっていて口縁端部はまるくおさめる。32、34、35には回転ヘラ切り痕跡のほか板目痕跡がみられる。胎土は砂粒の少ないものと微砂を少量含むものがある。焼成は良好で、淡灰褐色～暗褐色を呈している。36は器高がやや低く、たちあがりも短かくて端部はやや尖りぎみになるなど、他と多少異なる。

30～35の平均値は、口径7.37cm、器高1.27cmである。

須恵質こね鉢（37～39） 37は口径27.6cm、器高9.9cmを測る。底部の大半を欠くが、比較



第44图 土壙 1 出土遺物 1



第45図 土壌1 出土遺物2

的残存度は良い。平底でやや内湾ぎみに斜め上方へちあがり、口縁端部は拡張して外面に面をもつ。片口になるか否かは欠損のため不明である。器外面は成形時の凹凸が顕著に残るが、内面はヨコナデによりかなり平滑に仕上げている。胎土は1~2mm前後の砂粒を多く含んでおり、焼成は良好で淡青灰色を呈している。38は片口部分で、口縁外面に重ね焼きの痕跡と推定される変色した暗青灰色部分がみられる。39は口縁端部をやや肥厚させ、端面に浅い凹状部をもつ。37、38に比べ胎土中の砂粒は少なく、焼成良好で淡青灰色を呈している。

37、38は魚住焼、39は亀山焼と考えられる。なお図示していないが、この他に須恵質の甕片が若干出土している。

磁器 (40~42) 43を除く他は青磁である。43は白磁の皿で、底部の釉は掻きとっているが、

掻き残りの部分もみられる。41は碗で台形状の厚い高台をもち、内外面に櫛目を有す。胎土は暗灰色で、釉は暗緑色に発するが、外面の体部下半には施釉していない。40の碗は鑄蓮弁のもので、緑色の施釉である。42は皿で、内面見込みに櫛目を有す。

表6 土師質高台付碗 小皿計測表

(単位 cm)

番号	口径	器高	高台径	番号	口径	器高	高台径	番号	口径	器高
1	11.4	3.5	4.6	15	11.6	3.7	4.4	1	7.7	1.6
2	11.3	3.4	4.9	16	11.5	3.6	4.6	2	7.3	1.1
3	11.7	3.4	5.1	17	10.7	3.7	5.0	3	7.7	1.1
4	11.5	3.9	3.9	18	11.7	3.9	4.6	4	7.3	1.1
5	11.4	3.8	5.0	19	10.7	3.5	3.9	5	7.3	1.2
6	11.2	3.7	4.7	20	10.9	3.5	4.4	6	7.0	1.5
7	10.9	3.7	4.5	21	11.6	3.7	4.0			
8	10.5	3.2	4.5	22	11.4	3.7	5.3			
9	11.3	3.2	5.1	23	11.1					
10	12.3	3.5	6.4	24	11.0	3.6	4.3			
11	11.2	3.6	4.9	25	11.0	3.6	4.7			
12	11.4	3.4	4.8	26	11.2	3.7	4.3			
13	11.0	3.4	5.2	27	11.1	3.4	4.6			
14	11.4	3.7	4.5	平均	11.25	3.57	4.7	平均	7.38	1.26

青磁のうち、41は同安窯系、40と42は竜泉窯系と考えられる。

鉢 (44) 44は鉢と考えられる。口径21.8cm。底部を欠くが、斜め上方に開く口縁部をもち端部はわずかに外方へ拡張する。内面には丁寧な刷毛調整を施す。56と57は口縁部が短かく外方にひきだされており、鉢かと思われる。

土鍋 (45~55) 20個体に近い個数が出土しているが、完形に復元できるものはない。破片が小さく、口径の算出ができるものは4個体にすぎないが、口径25cm前後のもの(45)、30cm前後、40cm前後(47、48)の三種に分類できそうである。いずれも底部を欠いているが、やや扁平な球形状の内弯する体部をもち、口縁部は外反してくの字状となり、内面に稜をもつ。端部はまるくおさめるものと、やや肥厚させるものがみられる。調整は、外面は主として縦位の、内面は横～斜め方向の刷毛調整で、口縁部はヨコナデが多いが、刷毛調整のものもみられる。胎土は1~2mm前後の砂粒を多く含み、焼成は良好で、外面にススが附着しており黒褐色に、内面は淡褐色を呈している。

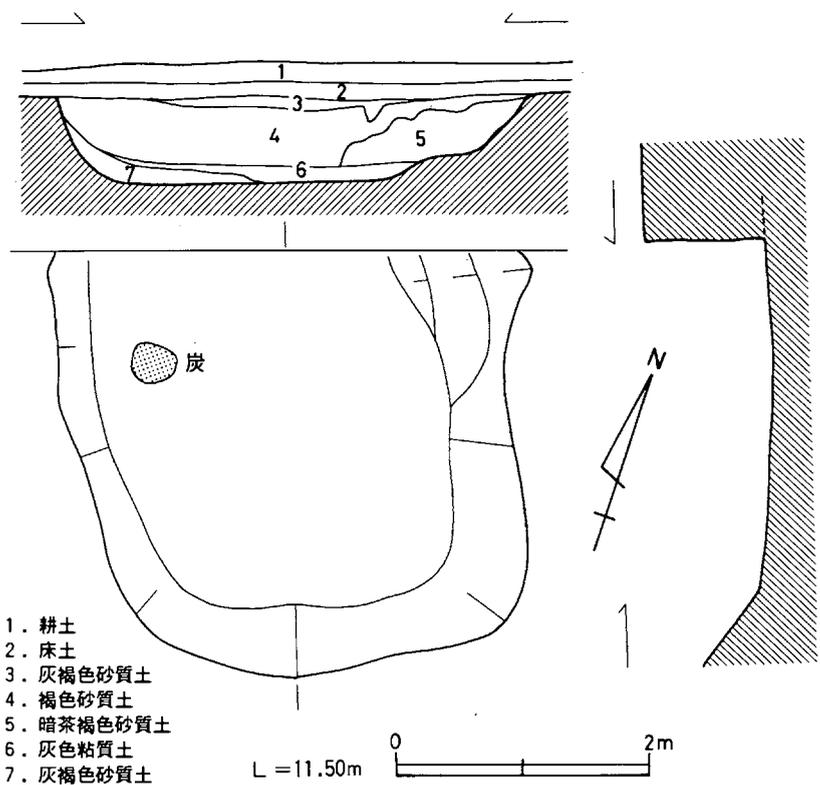
土製支脚 (59~63) 成形後、殆んど未調整のまま指頭圧痕を多くとどめ、凹凸の著しいものとナデ調整によってかなり整えられたものがある。断面はやや楕円形状を呈す。胎土は1~2mm前後の砂粒を多く含み、焼成は良好で褐色～暗褐色を呈している。

カマド (58) 胎土、色調から同一個体と考えられる。破片のため大きさがはっきりしないが、焚口は台形状と思われる。胎土は砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈している。

土壙2

一部を掘り残しているが、現状からは楕円形状に近い平面形を呈している。現存長335~350cm、深さ95cmを測るU字状に掘り込まれた大型の土壙である。底面の西寄りには37×30cmの範囲で炭が拡がっており、この下層から一面が何かに用いられたらしくよく磨かれた状態の瓦片

が出土している。
 この壙内からは、
 須恵質甕片，土師
 質小皿，椀，土鍋
 など約30片ほどが
 出土しているが、
 いずれも小片か細
 片のため図示でき
 るものはない。時
 期的には，上記の
 遺物から土壙1と
 ほぼ同期と考えら
 れるが，この土壙
 の性格については
 不明である。



土壙3

土壙2に隣接す

第46図 土壙2 平・断面図 (S = 1/60)

る現存長90~130cm，深さ15cmの不整形の浅い皿状の形態を呈す。土鍋片，土師質小皿などが約10片ほど出土している。

土壙4

土壙2の南4mにあり，長径180cm，短径120cm，深さ5cmの浅い皿状の土壙である。鉄釘片土師質高台付椀1片が出土している。

土壙5

長径60cm，短径50cm，深さ50cmの円形状の小土壙である。土鍋片，土師質高台付椀など数片が出土している。

土壙6

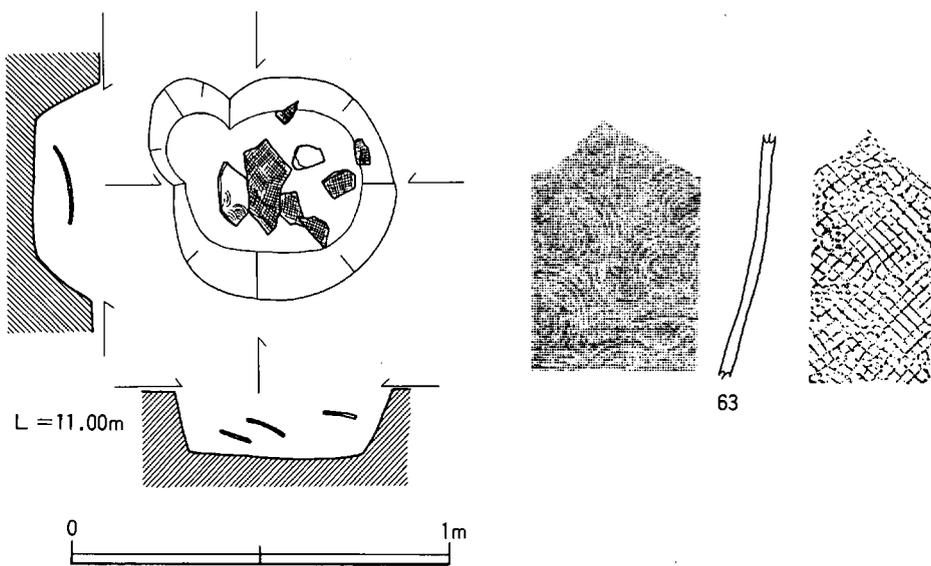
径70cmの円形土壙で，深さ20cmを測る。土師質高台付椀など数片が出土している。

土壙7

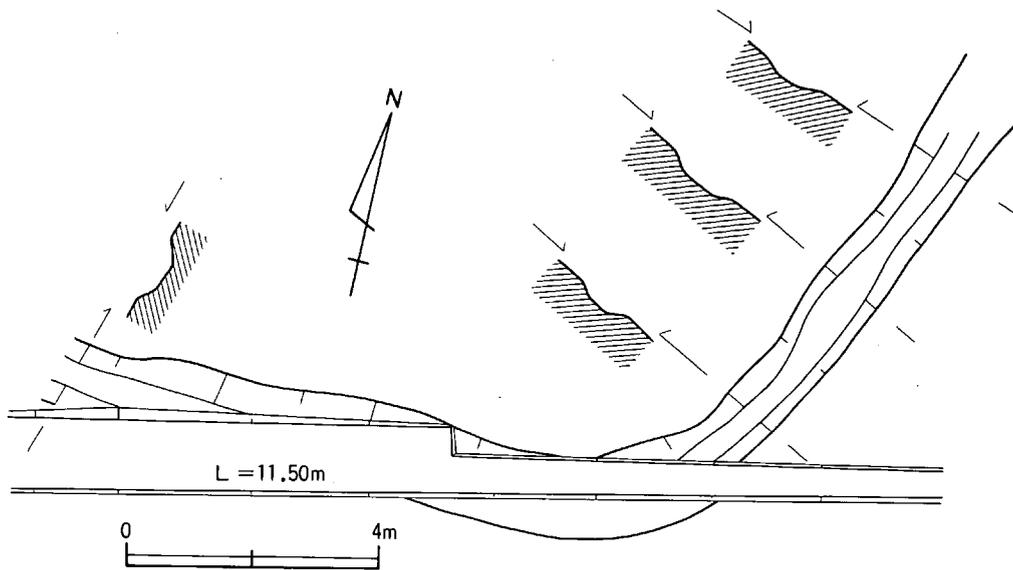
現存長径80cm，短径20cmの細長い土壙で，深さ10cmである。土師質高台付椀，瓦片など数片が出土している。

土壙8

長径50cm，短径30cmの楕円形状で，深さ40cmを測る。土鍋片が1片出土している。



第47図 土壌9 平・断面図及び出土遺物



第48図 溝 平・断面図 (S = 1/120)

土壌9

土壌1の南約2mにあり、径108cm、深さ30~35cmの円形に近い土壌であるが、のちに柱穴に切られている。壙内からは亀山焼の甕片十数片が出土している。

甕は胴部の破片のみで、外面に格子目叩き、内面は同心円がナデで消されている。約10cm位の間隔で器面に成形時の凹凸が残っている。

溝

4区の中央から西にかけて存する半円状の平面形を呈す溝で、深さは約15cmである。東側は浅いがしっかりした溝の状態を示しているが、西側は土層が淡褐色系に変化することもあり、溝底も不明確で浅くなっている。このあたりでは、溝底下20～25cm前後で東方へ下降する礫層となっている。

なおこの他に、円弧状の溝周辺及び土壙1の南に深さ10～15cm前後の細長い土壙が検出されたが、遺物は出土していない。

3区溝群

流走方向は確定できないが、南北方向に流路をもつ7条の溝群である。幅は1～2mで、深さは約40cmを測る。何条かの溝には切り合い関係があるが、遺物の出土はない。土層の観察からは、中世ないしそれ以降のものと推定される。

柱穴1

径34cm、深さ24cmの柱穴で、2個体の土師質高台付椀が出土している。遺物の形態、調整から、土壙1と同期のものと考えられる。

以上のほか、4つの柱穴内から土師質高台付椀、小皿、土鍋などの破片が出土しているが、いずれも細片である。

以上、遺構の状況と出土遺物について概要を記したが、次にこの遺構の時期について略述する。俗に早島式土器と呼ばれる土師質高台付椀については、最近県南を中心に出土が報せられ、その編年的位置づけも試みられている(註5)。それによると「畿内の土師器や瓦器に認められる技術の簡略化と法量の縮小化が、岡山県南部地方から広島県南東部地方の地域特有の土師質高台付椀にもあてはめることができるならば」という前提にたつて「沖の店遺跡1号窯址—百間川当麻遺跡井戸3—百間川当麻遺跡中世土壙墓—上東遺跡P—123井戸状遺構(上東遺跡P—123井戸状遺構井筒内—上東遺跡P—123井戸状遺構埋土中土器溜り)—川入遺跡P—9土壙—御堂奥遺跡建物址—百間川岩間遺跡土壙Ⅱ—上東遺跡H—9住居址」という編年観を示されている。ところで先述したごとく土壙1出土の土師質高台付椀は、平均口径11.25cm、器高3.57cm、高台径4.7cmを測り、全体として小型化がより進行し、成形、調整ともに粗雑になっている。この数値に最も近いのは、上記のうち上東遺跡H—9であり、平均値は口径11.4cm、器高3.4cm、高台径4.4cmである。土壙1は口径でやや小さく、器高及び高台径でわずかにうわまわっている。従つて上東遺跡H—9出土のものよりやや後出のものとされよう。また伴出した魚住焼の須恵質こね鉢の口縁部の特徴(註6)や、大宰府における中国輸入陶磁器の編年(註7)から、大まかではあるがおよそ鎌倉時代後半期頃の所産と考えられないであろうか。

4. おわりに

清水角遺跡で検出された遺構及び出土遺物について概述した。これらの遺構からみるこの遺跡の時期は、土壌1以外に指標となるべきものが少ないが、他の土壌出土の遺物が細片や小破片のため断定は避けなければならないが、土師質高台付椀や小皿片が多く、しかもそれらが土壌1出土のものに類似していると考えられることから、大部分の遺構は土壌1とほぼ併存していたものと推定される。また遺跡の拡がりについては、地形的状況等を勘案すれば今後延長が計画されている東部分にも拡がるものと想定される。

調査及び報告書作成段階において、岡山県史編纂室 伊藤 晃、岡山県教育委員会文化課 山磨康平・平井泰男・平井 勝・福田正継氏らから多大の教示をえたことを記し、謝意を表します。

註

- 註1 区画整理事業に伴う発掘調査が、昭和55年7月から57年9月にかけて実施された。この結果、縄文～室町時代に及ぶ複合集落跡であることが判明した。
- 2 正岡睦夫「総社平野の微高地群」『瀬戸内考研』No. 19 瀬戸内考古学研究所 1980
- 3 葛原克人「古代吉備豪族の誕生—古墳の形成過程を中心として—」 歴史手帳 第4巻第7号 1976。
葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35 岡山県教育委員会 1979年
- 4 快舟散史(水原岩太郎)「考古行脚」『吉備考古』第32号 吉備考古学会 1937
- 5 福田正継「中世の土器について」『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』 岡山県教育委員会 1981
- 6 大村敬通・水口富夫「魚住古窯ニュース11」1982
- 7 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館 研究論集4 1978



1. 清水角遺跡 航空写真



2. 調査後の遺跡



1. 南側の工事用掘削坑土層断面（立会調査時）



2. 北側の工事用掘削坑の土層断面



1. 土壇1 遺物出土状況



2. 土壇1 掘り上がり後の状況



1. 土壇 2 掘り上がり後の状況



2. 遺構全景



2. 溝断面



4. 柱穴1 遺物出土状況



1. 土壙2 底面の炭

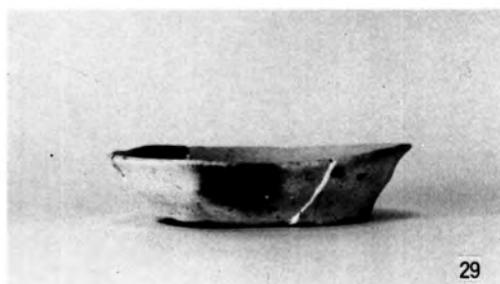


3. 土壙9 遺物出土状況

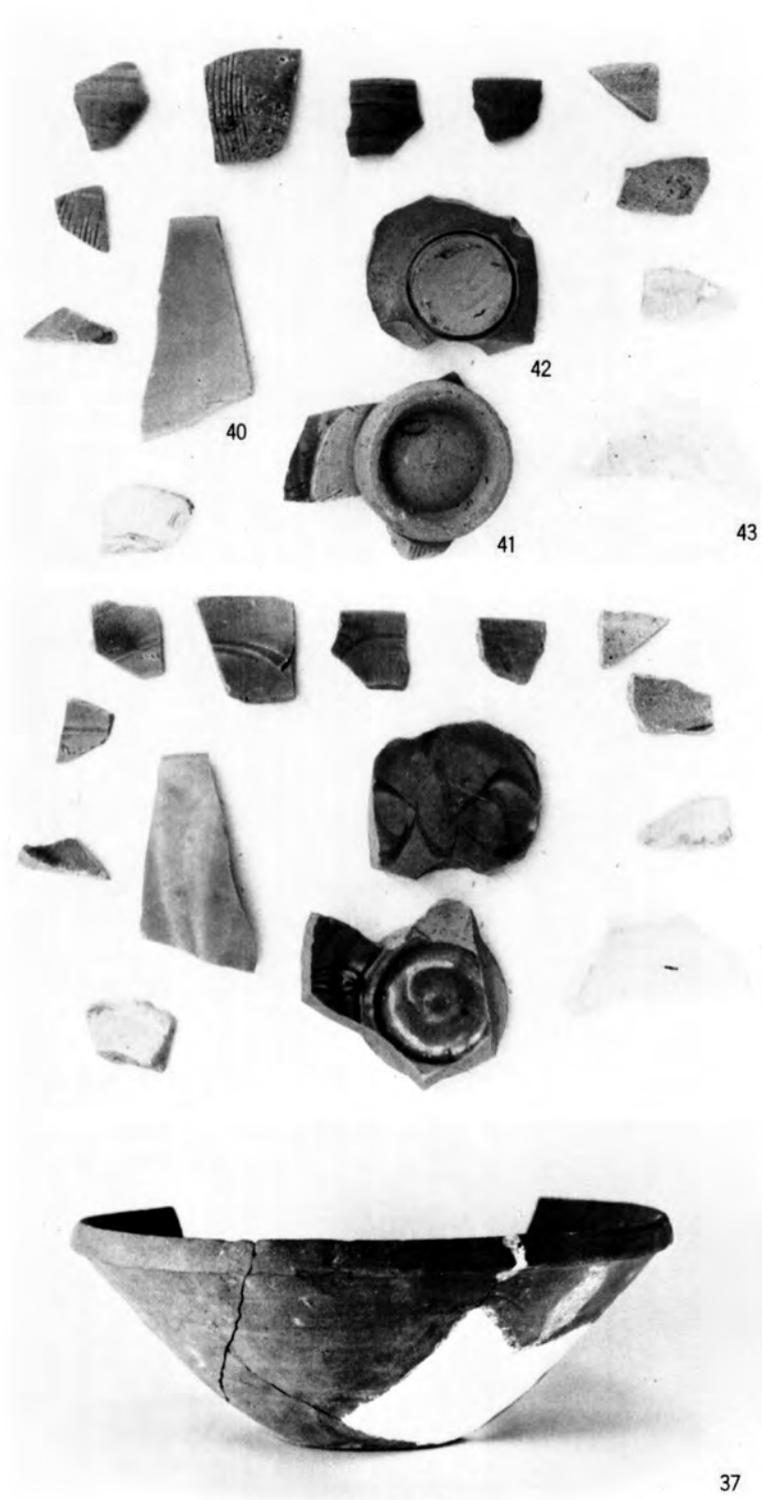
図版50



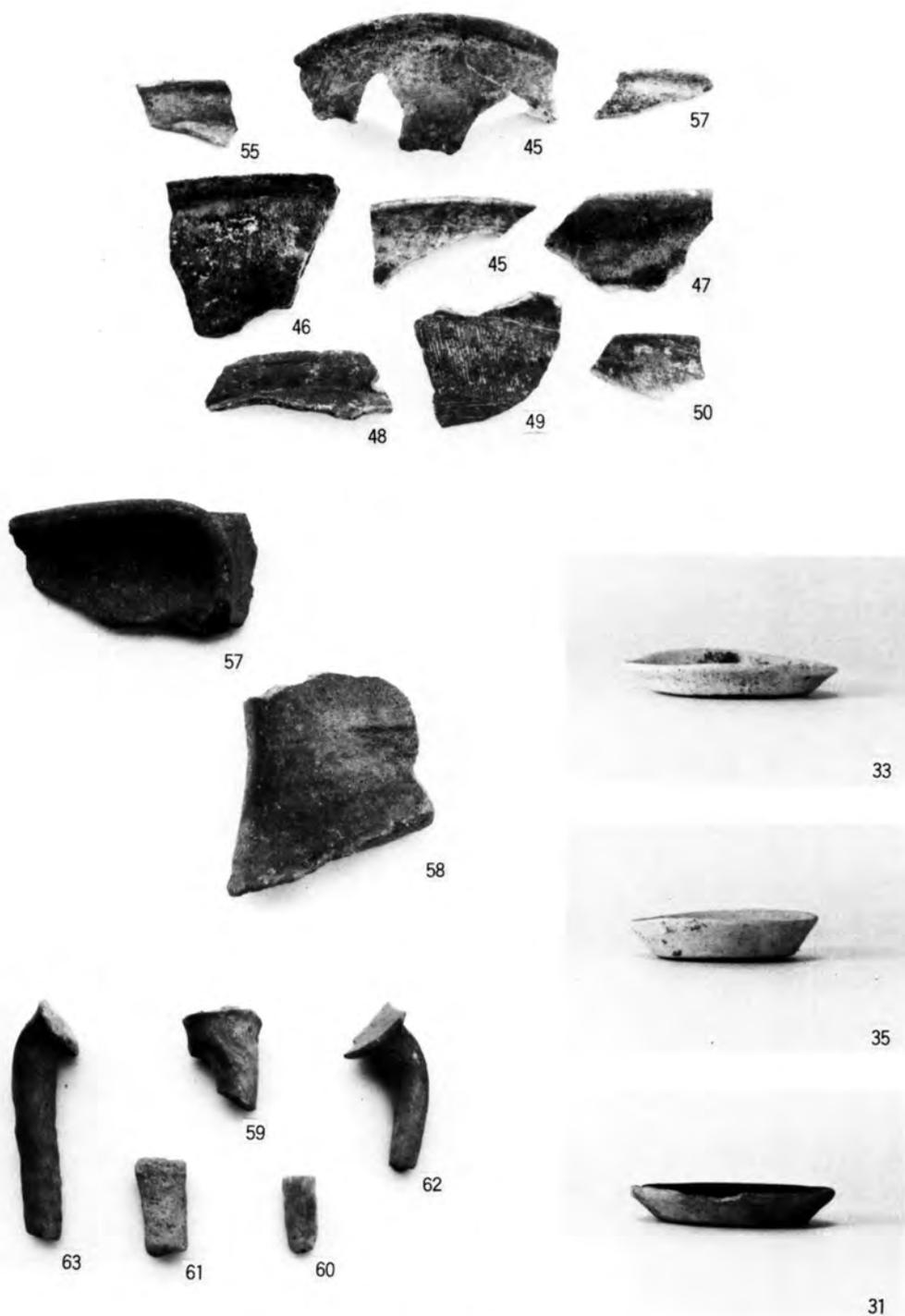
出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4



総社市埋蔵文化財発掘調査報告 1
緑山17号墳・すりばち池3号墳
山津田遺跡・清水角遺跡

1984年3月 印刷

1984年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央1-1-1

印刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市津高651

